女鑑



第十八年
第八號

歐米美人の肌は艶々として美つくしきこと羽二重の如し何故に歐米の婦人は斯く美つくしきや？

●常にスミス洗粉を使用するが故なり

若し未だ美人國の稱ある日本婦人中スミス洗粉を使用せざる人ありとせば

●其は美人國の恥辱なり

何故に美人國の恥辱なる乎

常にスミス洗粉を使用せざれば到底歐米美人の如き眞の美をなす能はざればなり

販賣店全國到る處の洋品店化粧品小間物賣藥店にあり

定價大瓶金卅錢小瓶金十八錢袋入十二錢郵送料金十二錢郵券注文一割増

製造元　大國英帝室御用化粧品商　英國倫敦　スミス化粧品會社

發賣元　ローヤル化粧料發賣元　東京銀座　佐々木商店

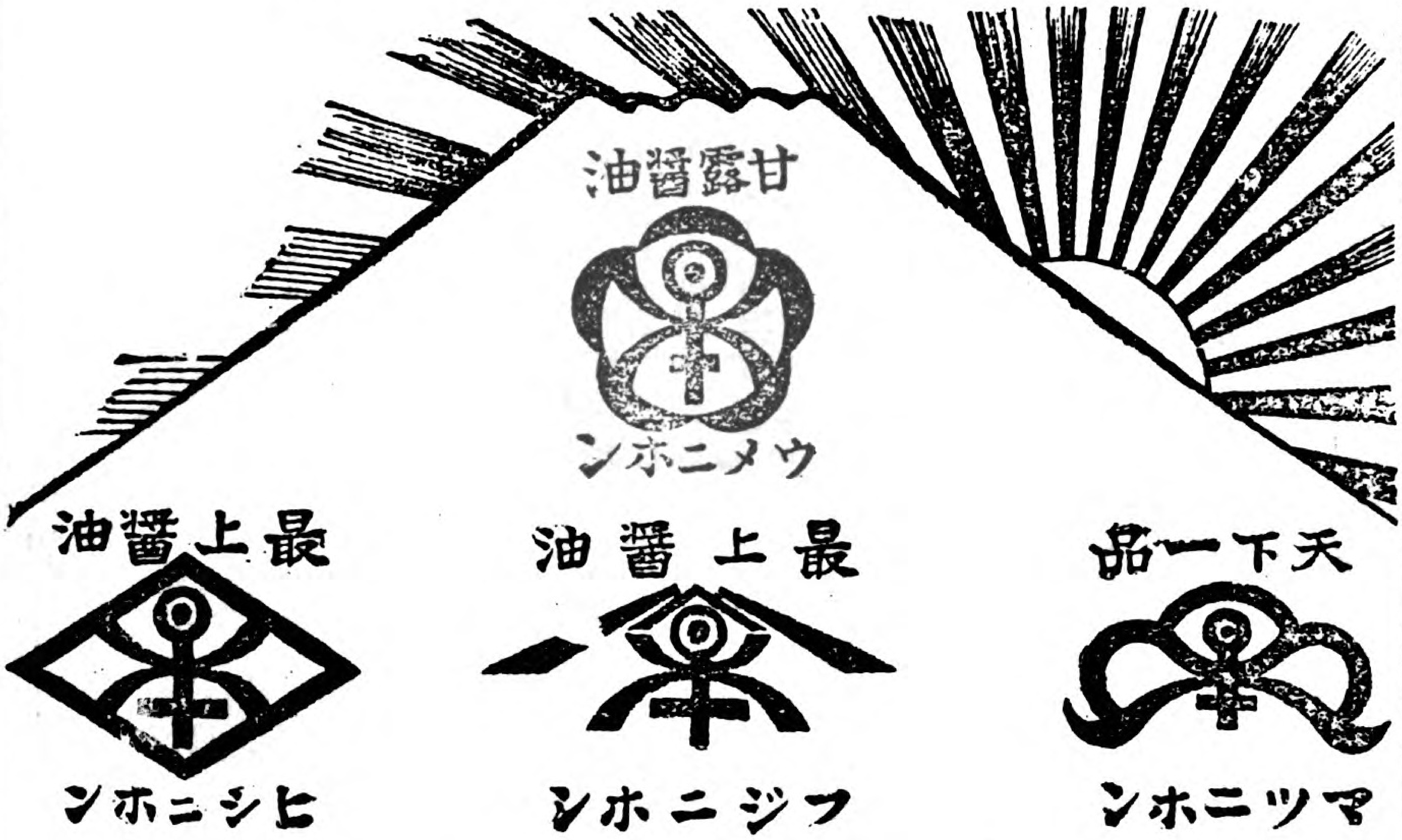
電話新橋四七二番　振貯三三二〇番

女鑑第十八年第八號目次



醬油釀造界の一大革新

最良醬油



●資本金＝壹千萬圓

釀造元 日本醬油釀造株式會社

東京深川區小名木川通 電話浪花（長）三七七三番 一五九五番

特色

製造清潔
品質佳良
黴を生ぜず
價格低廉

特色

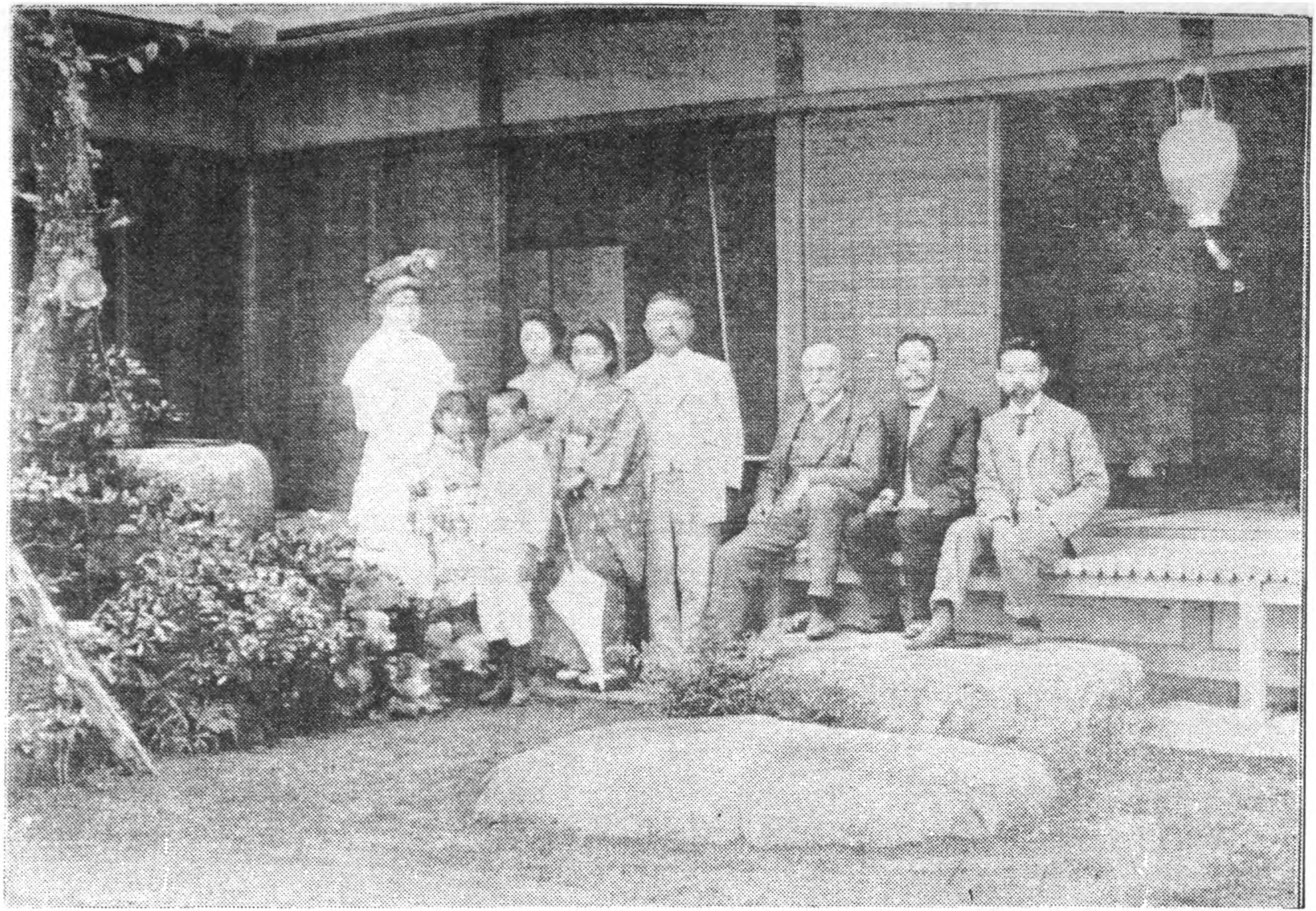
弊社は前人未發の新發明にかゝる嶄新にして完全なる鈴木式釀造方法及機械的裝置により精良無比の醬油を釀造販賣す

特約販賣所

東京日本橋區北新堀町 合資會社 日本醬油東京販賣所 電話浪花（長）一四六番

其他 東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地小賣店にて販賣致候間御用命願上候

長與博士の家庭とコ博士夫妻

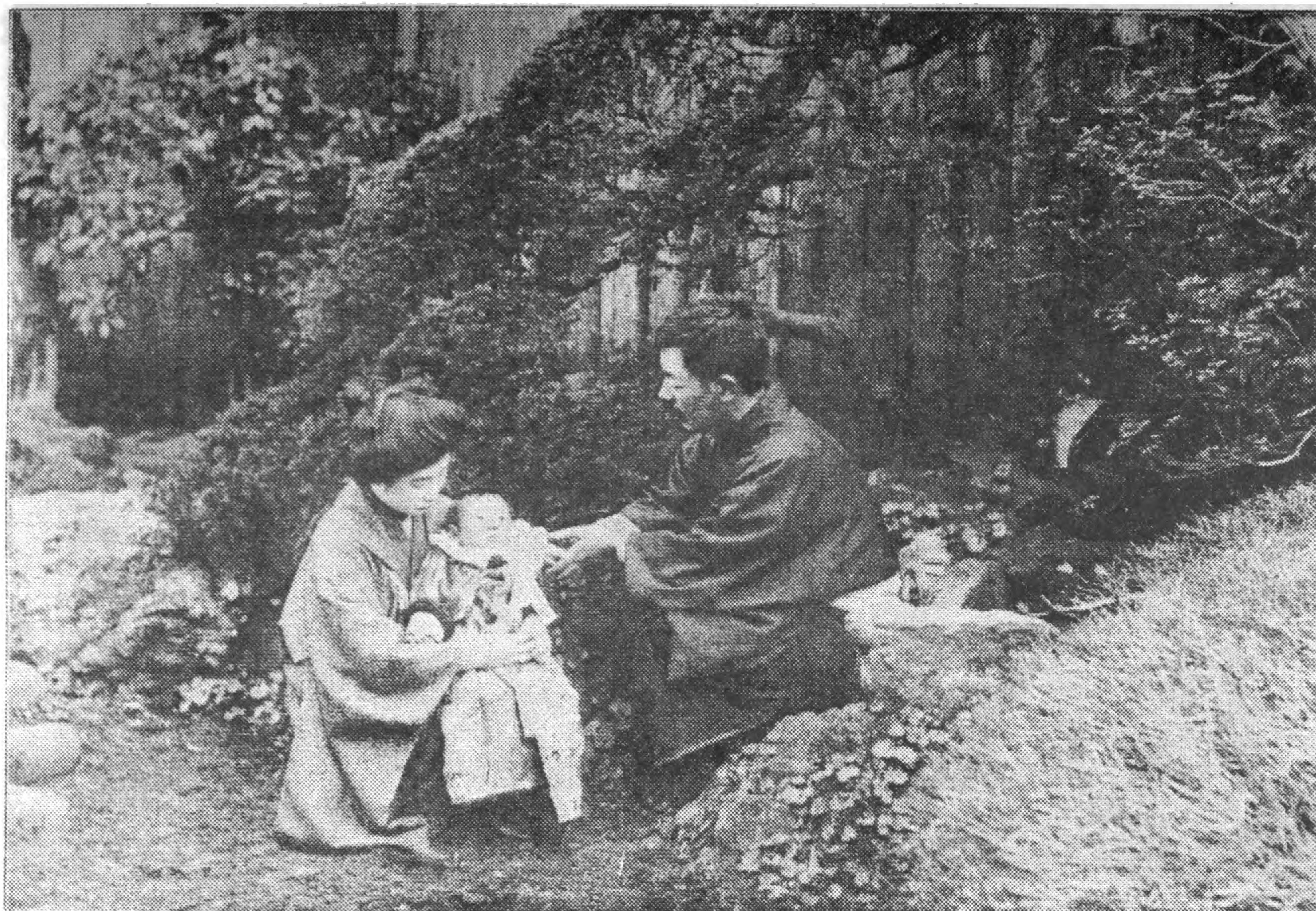


大韓夫人會



下段中央に朝鮮服を着けられたるは目賀田博士夫人

梶田半古畫伯の家庭



女子教育家



書齋に於ける小川直子刀自







小出新次郎氏家庭

毛髪の發生をよくし脱毛を止める毛髪化粧液として歐米に大評判の流行品に佛國「ヒベール」會社製造の「ペトロール、ハーン」です毛髪を大切にせらるゝ淑女紳士の愛用を賜はらんことを願ふ

大壜　貳圓貳拾錢

小壜　壹圓五拾錢

ペトロールハーン



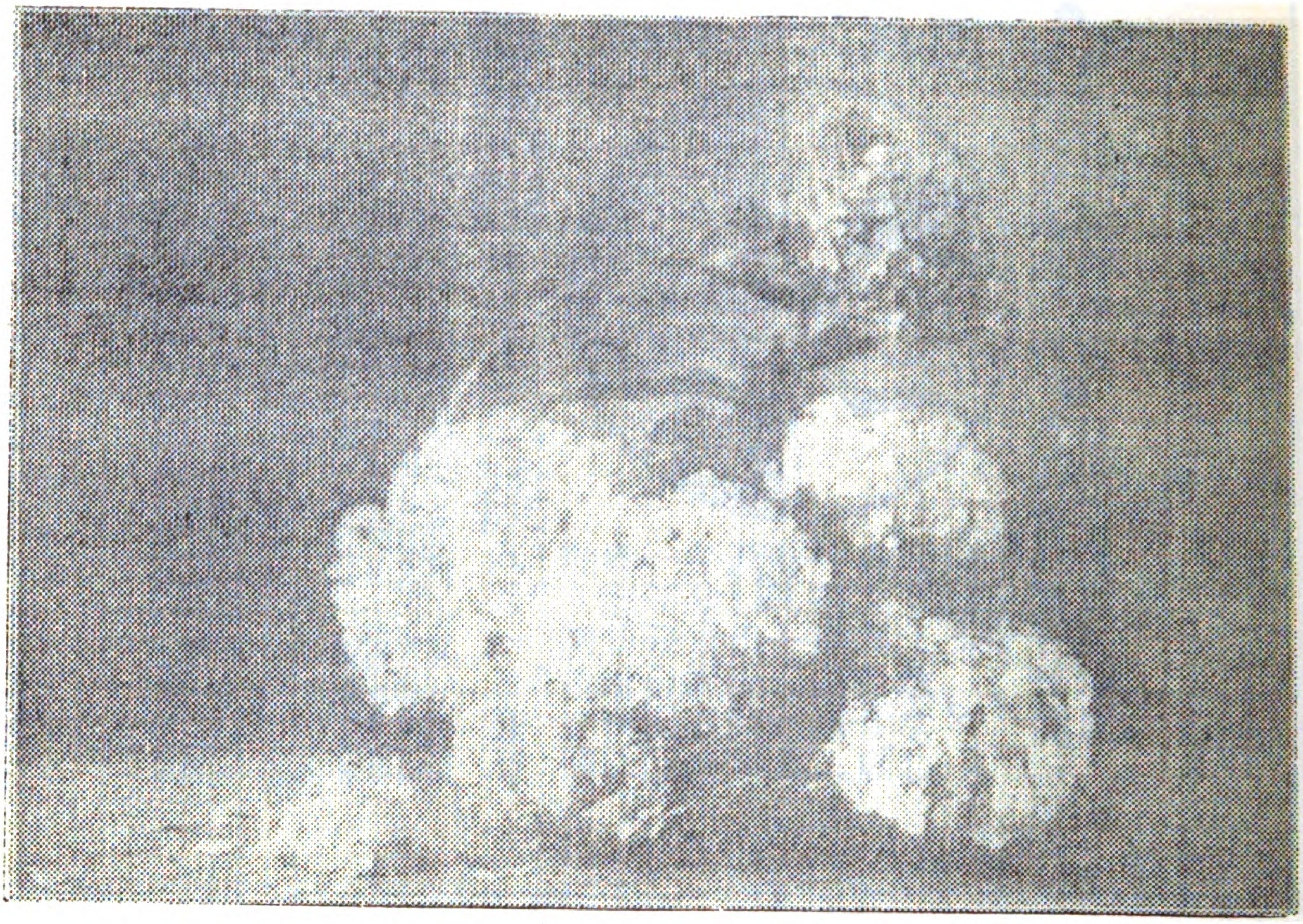
◎舶來束髪用櫛及化粧品一切取揃申候

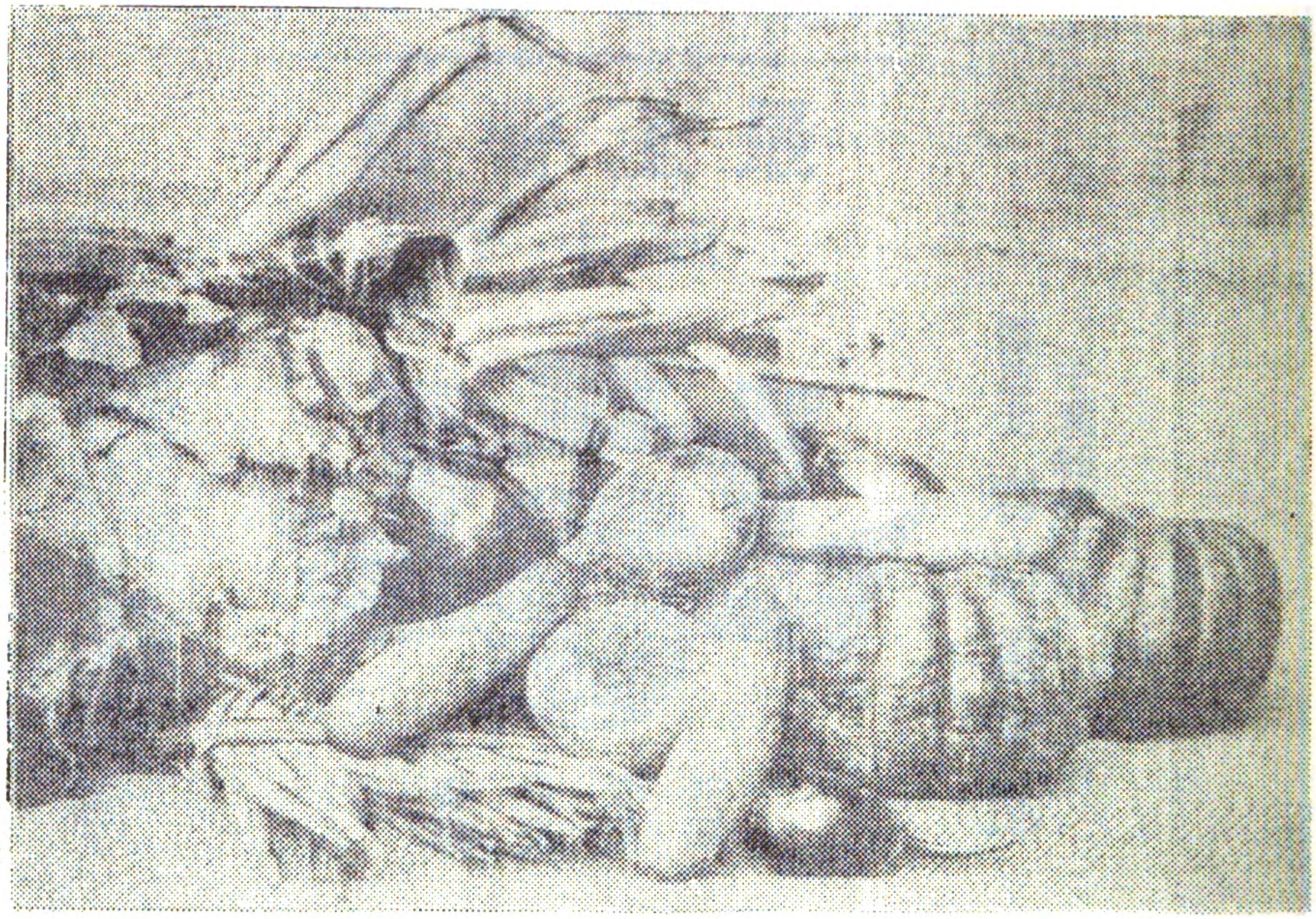
「アクム、フレンチ、マッサージ、クリーム」一手販賣店

京橋區尾張町二丁目二十五番地電話新四三三五

めでたや

夏の花菜





松平直之伯撮影

最も上流の家庭に歡迎せらる

女學世界

八月一日發行 **第拾號** 正價廿錢 郵税二錢 前金八冊一圓六十三錢

▽現代女界の暗流 三輪田眞佐子
▽諦める人の幸福 大町桂月
▽鎖夏二十法 糸左近
▽辛苦多き妻の一日 紅涙女史
▽出京先の日記 秋雨女史
▽無用と實用 棚橋絢子
▽讀者によりて得たる利益 三宅花圃
▽卅年前のハイカラ女學生 藤波女史
▽如何なる婦人が死神を驅逐するか 中村鈴子

▼私が好んで[illegible]し書物[illegible]
▼何の爲めに何を讀むか 貞子
▼米國女學生修業の道行 進[illegible]
▼婦人胸中の秘密：：：[illegible]
▼今樣秋の[illegible]一紙
▼避暑地の[illegible]
▼虚榮心の[illegible]
▼女子の[illegible]

少女世界

◎少女唱歌 海の歌 田山花袋
◎少女小説 天の橋立 巖谷小波
◎訓話 虫飼ひ 石橋思案

▼少看護婦 笠峰
▼海底の女王 水蔭
▼恒子の行方 渚山
▼露子の旅行 春浪
▼黒百合姉具 濤蔭
▼樂しき歸省 小翠

◎人形の着物
◎手提袋
◎少女笑話

八月一日發行 **第拾壹號** 正價十錢 郵税一錢 前金郵税共四冊四十二錢 八冊八十三錢 十六冊一ヶ年分壹圓五十六錢

口繪 ○繪日傘 ○海水帽 ○白百合 ○少女會 ○愛讀者の面影

▲八月夏期休暇
▲[illegible]愛讀者會
▲神田愛讀者會
▲[illegible]
▲目のいろいろ
▲少女[illegible]……

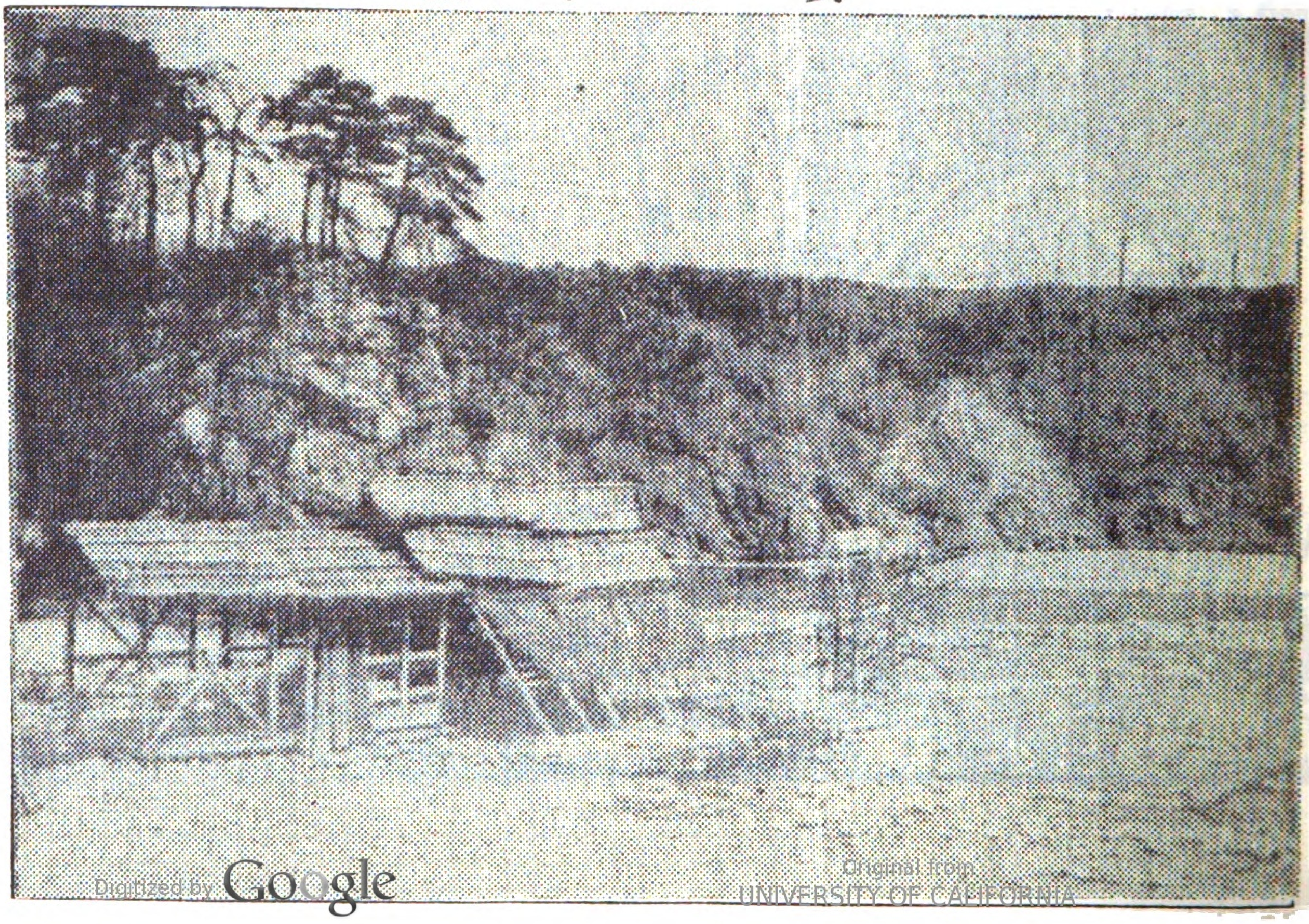
（東京） 博文館 （本町）

多摩川



其の水源不動の流

其の下流



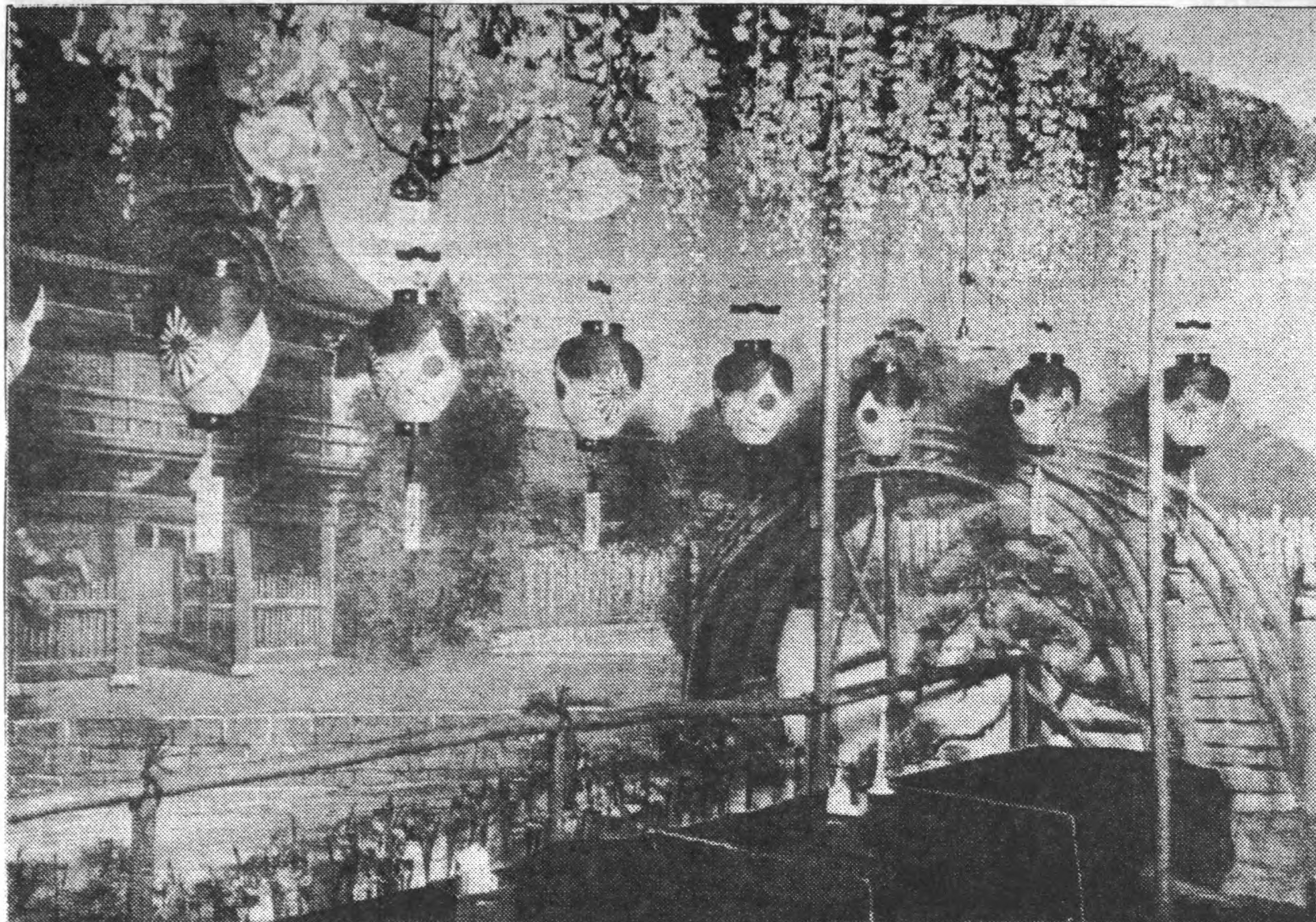
（井伊直方君撮影）


スミレ香水ハ
実に好い香で永くもちます
發賣元ハ
パール本舗で有ります
東京濱町
平尾分店

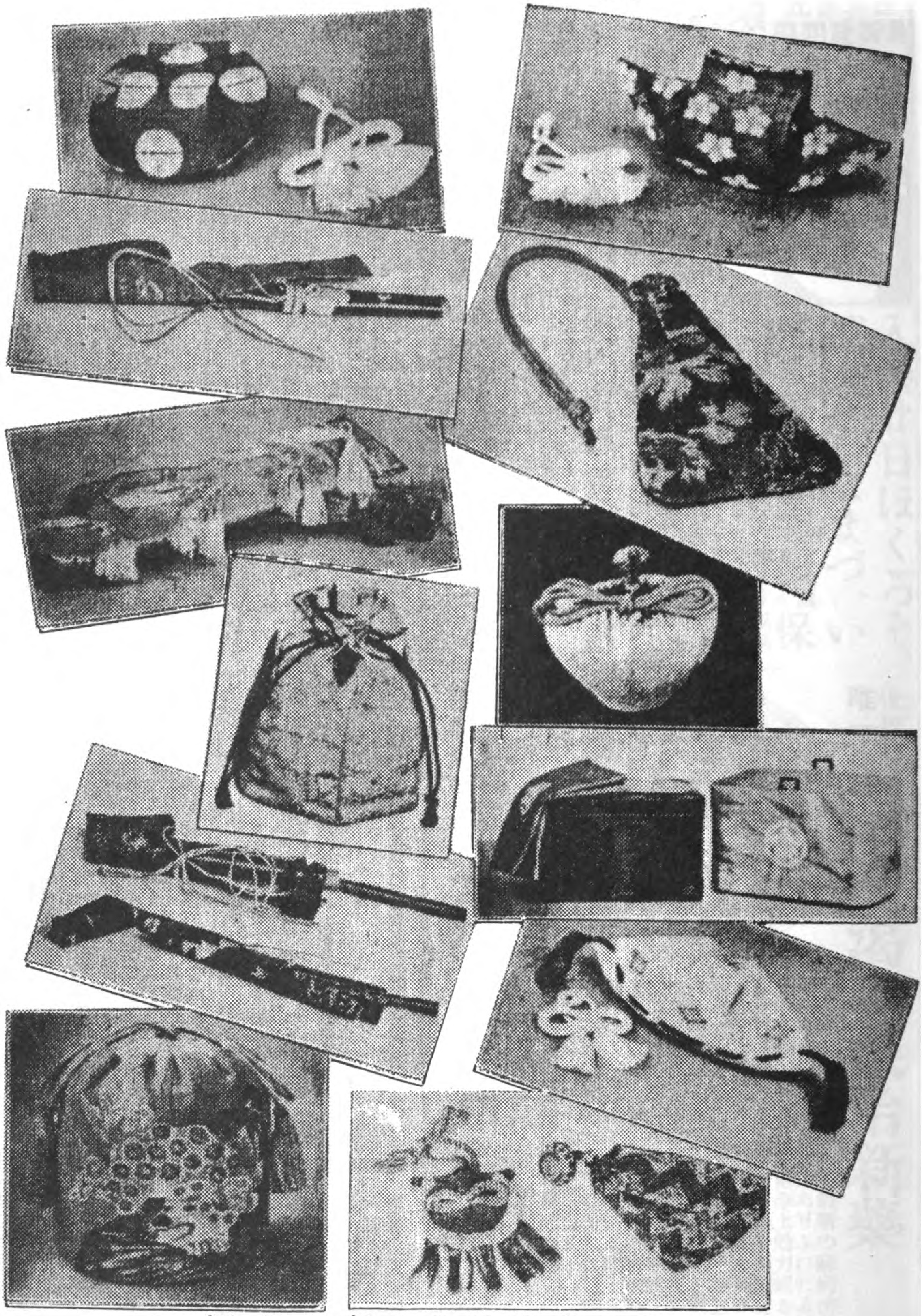

懷中要藥
登錄商標
高木
清心丹
清心丹特有の効能を常に食後食後に服用すれば消化を速にし胃腸を健全ならしむるにあり
東京市日本橋區元大坂町八番地
本舗 高木與兵衛


毛はへ藥を教ゆ
妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇藥を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし三錢郵券を添へ御照會あれ
東京市京橋區越前堀　河村愛子

模造龜井戸



袋物



小出新次郎君作品(本文参照)



女鑑
第十八年第八號

女子の覺悟と働き

農學博士　横井時敬

上中下を通じて、今日の世の中に處して行くといふ事はなか〳〵困難であるが、中に就て最も困難を感ずるのは何であるかと云ふに、その多い中でも、

家庭を形造る

といふ事が一番困難であると考へる、

殊に現今の社會は、總ての狀態が新舊過渡の時代であるから、舊來の家庭は今日の社會に適せず、又今日善いと思つて居る家庭が、明日は既に惡

ひとせらるゝかも知れないのであるが、併し謂ゆる上流の家庭は財產があるから、その金の力によつて如何やうにでも爲て行く事が出來るかも知れない、また極下等な社會にしても、たゞ生活といふ事だけが、其日〳〵の仕事であるから、比較的困難を感じないかも知れない、世の中が文明に進むに從つて、諸種の產業が勃興して來るから、彼等下等社會のものは、相當の勞働に從事さへして居れば、それが爲に却つて食ふ事には困らなくなるであらうと思はれる、殊に女子の職業が追々に增加して、女子もそれ〳〵生計の手助けをすることが出來るやうになれば、案外に生活し易いだらうと考へる、たゞ女子が或職業に從事する結果、女子本來の職分たる家を治むる事に遠かり、從つて家庭を形造ることが出來なくなると云ふ傾向がありはすまいか、それは兎も角として、まづ概して下等社會のものも、左程困るやうな事は無からうと思はれるのである、そこで上流の貴族社會と下等の勞働社會とを除きたる、我々中等社會のものが、家庭を構成することに於て最も困難を感ずるのである、

　中等社會と云つても極めて漠然たる言葉であるが、まづ主人は外に出でゝ朝から晚まで働いて居るし、妻は家を治めて其楫を執ると云ふ位のところが、今日世に謂ふ中等社會ではあるまいか、その中等社會の家庭では、第一家屋の搆造からして不都合に出來て居る、例へば、家内のものが外出する時には、必ず留守番を置かなければ出られ無いといふのが、今日中等社會の有樣である、そこで其留守番をさせる爲に、左まで必要もない下女を傭はねばならぬが、これは實に困つた事と云はなければならぬ、それから品物を買ふにしても、

主婦が居坐りのまゝ

で買ふ事になつて居る、即ち米屋、薪屋、魚屋、八百屋、それらの者が皆品物を賣りに來る、それが爲に

商賣人に幾分か餘計な利益を得させるのは、誠に免がれぬ事である、併し今日の社會の狀態では、主婦が朝早く市場へ買物に行くといふ風には爲つて居らぬ、田舍の方では市中へ買物に出るとか、市場へ買ひに行くことがあるが、それも極めて少部分である、もし之を改めて、必要の物品は

此方から買に出掛ける

といふ事にし、市場では其を當然と認めるやうに爲つたならば、頗る益する所があると考へる、

また我國の家庭では、時を定めず客が來る、茶を出す、菓子を侑める、食事時には飯を供せなければならぬ習慣になつて居る、案內をして招いたのでも無い客に對して、斯樣に茶菓をすゝめ、食膳を饗するといふ事は隨分困つた話である、またチヨット訪問する時にまで土產物を持つて行く、これを受けた方では何か返禮をせねばならぬ、よほど面倒な譯ではあるまいか、凡そ是等の事は中等社會のものが家庭を形造るに就て最も困難とする點である、

それから、家庭の重大任務たる子女の敎育であるが、まづ男の子に高等の敎育を受けさせやうと思つても、入學する事の出來る學校の無い事がある即ち大學へ入るには、何うしても高等學校といふ關門を通過しなければならぬのであるが、もしも其所で二三回も失敗すれば、最早それから他の專門の方に向はせやうとしても時期が遲い、別言すれば、年齡が長じ過ぎて了ふのである、それも直ちに入學が出來るとは極らないで、男子の敎育も却々困難であるが、殊に女子の敎育と來ては、殆んど如何すれば良いのか思案に餘るのである、

言ふ迄も無く、女子の第一本分は、家庭を治め子女を敎養するにあるから、既に小學校時代から、その

心得で教育すべき者であらうと思ふけれども、今日の若い教師は、たゞ學校を卒業したばかりで、家庭といふ事には少しも經驗の無い者が多い、單に讀書き算盤を教へるといふ事に止つて、

それ以上は望まれない

といふ有様である、進んで高等女學校へ入つても、やはり少壯の教育家が家庭といふ事を閑却して、自分の主義や理想によつて教育しやうとして居る、或は夫が良いのかも知れないが、高等女學校は普通中等社會の女子が入學する所であるから、その目的に適ふやうに教育しなければ甚だ困るのである、教育家の唱へて居る理論は、如何にも高尚で立派であるが、之を實際に應用する事を知らないやうに見受けらるゝ、家政學の理論は如何に正しくとも、それを直ちに今日の中等程度の社會に行ふ事が出來なければ何の効も無いではあるまいか、

それで予は想ふやう、現今のやうな教育法ならば、寧ろ女子は小學校を卒業させたならば直ちに家庭を構成するに必要なる技藝を習はせる方が良くはあるまいかと考へる、けれども裁縫、料理、琴、活花といふやうに、各々專門の所へ習ひに遣ることは隨分費用の要ることで、到底行はれない事であるから、止むを得ず高等女學校へ入れる、所が、その高等女學校では、徒らに上流社會や貴族社會の眞似をして、中等社會に適する教育を授けて呉れない、例へば、料理の稽古を爲るにしても、

惣菜料理を教へるのではなくて

西洋料理とか本膳の献立とかを教へて居る、日本の中等社會では、西洋料理といふ事が既に贅澤である、

料理の稽古は畢竟家の費用を多くする、といふやうな奇觀を呈して居る、その他何事によらず、餘りに上流社會を眞似て居るから、卒業した曉に非常に困る、中等社會のものは、やはり大抵中等社會に緣付くものとせなければならないのに、學校に居る間は貴族的の敎育を受けて居るのである、世の女子敎育家は如何いふ考へか知らないが、予は甚だ迷ふのである、

勿論女子は家を治めるといふ事が本來の務であるが、中等社會のものは、不幸にして一朝下等社會に身を落した時に、謂ゆる藝が身を助くる不仕合せな境遇に陷つても、よく經濟界に身を措いて、一身の生活には困らないだけの覺悟と働きとが無ければなるまいと考へる、

振袖を着て泥遊び

といふやうな貴族的敎育を受けたものは、一朝不幸に遭遇した時には、如何する事も出來ないのであるから、今後の女子は經濟界に身を處し得るだけの覺悟と働きとを持たせるやうに敎育するのが宜からうと考へる、

今後ます〳〵社會の狀態が進むに從ひ、生活の方法いよ〳〵困難になる、その半面では奢侈の風がます〳〵盛んになるし、經費を要する事ばかりが增加して、中流のものが家庭を造るのは非常に困難になるであらうと考へる、殊に戰後の疵がまだ癒らないので、謂ゆる澤山の國債といふものを償還するに就ては、女子も半肩入れなければならないのであるから、餘程の覺悟を以て奮發しなければ爲らぬのである、

家庭内に於ける實際の損得

吉川喜達

日常われらの身に取りて何が一番心嬉しいかといふに、氣樂といふ事に越したものはあるまい、その最上の氣樂といふ事を實際に感ずるのは家庭より外無いのである、それと云ふは屈托が少ないからであらうと思はれる、

社會の險惡より隱るゝは家庭なりと西人の誰やらが言ひし如く、世間の人前では如何に暑くても假初に出來ないが、家庭では悠然と打ち寛いで、團扇片手に思ふ存分の涼を納れることが出來る、又結構な招待を受けて山海の珍味を列ねられても、家庭で小さい膳に向つて手料理の惣菜を味はつた方が遙かに旨いものである、

かく家庭は便安で心置きない場處であるから、窮屈を感じた冷汗も、此處に歸れば忽ちに乾くのみならず、眞面目臭さに疲れた頭腦も一時に洗ひ清められるのである、誠に我等は家庭のある爲に、啻に百年の壽を保つばかりでは無く、これに依りて親子の恩愛も、夫婦の親情も、總て一家骨肉の間柄といふものを蜜のやうに甘く續いで行くことが出來るのである、併し物事といふものは一利あれば一害ありで、家庭が斯くまで氣隨便安な場處であるだけに、又限りなく情弊が醸されるのである、

氣隨便安といふ裏には自墮落に流れ易いといふことは兎角免れないので此が大に心の駒に鞭つべき急處であるが、この急處を緩めないやうに爲るといふ事は六づケ敷しものと見えて、手綱の締つて居ない實例の二三を擧げて苦言を呈すると同時に、聊か損得勘定をしてお目に掛けやう、

起臥の時間

毎朝床を離れる刻限が果して一定して居るかと云ふに、昨日は六時に起きたが、今朝は七時であつた

といふやうな事は決してあるまいか、夜は十時の時計が聞えるや否、一家總立ちとなりて、必ず寢に就く用意は、御客でもある時は別として、毎夜間違なく行はれて居るであらうか、甚だ疑はしい、

食事の時間

三度の食事の中、比較的朝と晩は正確といふまでは行かないまでも稍一定して居るが、正午の時が打てば、直ちに一家の者が御膳に着かれるやうに、日々寸分違はずに行はれて居らうか、食事の間には必ず不時の間食を執らずに極つて居らうか、客があれば、時刻の如何に拘はらず、酒肴を命ずるやうな事は無いであらうか、之も何うやら一定し兼るやうである、

訪問の時間





自分が客となつて他人を訪問し、又は來訪の客に接する時間や日が定つて居るであらうか、それから來客は兎も角として、自分が他へ行つても、用向不相應に時間を潰しはすまいか、

主婦の部屋

男子の部屋は大抵極つて居るが、主婦たる者の部屋が定つて居らうか、假りに其は定つて居るとしても、小兒の遊ぶ部屋が定つて居らうか、座敷であれ、また主人の机や仕事場であれ、或は又臺所であれ、家の中到る處に小兒の翫具や紙片などが取亂して居るやうな事はあるまいか、主婦の裁縫所も茶の間も同一ではあるいまか、

掃除の勤怠

一家の掃除が内外ともに怠りなく、その都度〳〵に行屆いて居らうか、毎朝の分は勿論のこと、其他風立ちて塵埃の甚だしい日には、必ず臨時に掃除を爲るか、一週間若くは少なくとも一ヶ月間位に戸棚の上、欄間の間、簞笥の後などが掃除せらるゝか、塵芥は一々一定の箱に、紙屑は一々籠に投れられるか、便所の如きも、時を定めて怠らず掃除されて居うか、庭廻りの草も度々取去られて、人目に汚穢しい所を見せるやうな事はあるまいか、

勞働の役割

一家の勞働する役割が判然と定つて居らうか、例へば、或者は庭廻りの掃除、他の者は床の上の等き拭き、他の者は家具の整頓といふやうに、おの〳〵其分擔が設けられてあるか、又臺所の仕事にも、或者は專ら煮炊きのことを、他の者は水汲みの役、器皿の洗ひ役といふやうに分業が行はれて居るであらうか、

この外履物を脱ぐ所にも、客人を通す昇降口と、家人が常に上り下りする口に依りて分けてあるか、よしや分けられないまでも、客人の昇降口には、ゴロ〳〵と家人の下駄や靴などが脱ぎ棄てられてはあるまいか、外出するには、一々不斷着を丁寧に片付けらるゝか、外出して歸れば、外出用の着物は一定の時間餘焰を除いてそれ〳〵の始末を附けられるか、主人の帽子の置所、杖や傘の置所、手拭の掛所、布巾や雜巾の置所などが毎時も一定して居て、暗がりでも探し得らるゝまでに整頓して居らうか、

斯樣な工合に數へ立てゝ來ると、却々二頁や三頁では書き盡すことは出來ないのであるが、併し家によりてより以上に整頓して規律正しく行はれて居るであらうが、又家によりては其二三すらも如何かと思ふのである、殊に前に揭げたものは重に有形に屬するものであるが、この外無形のチヨツト目に見え無い所に大層な遺ち溢れがありはすまいかと思はれる、たとひ有形にせよ又無形にせよ、夫等の諸點の中の一つでも見落しがあるとすれば、日々の事であ

るから、

その損失は意想外

で、一年中、否、一生涯には取返しの附かない事になるのであつて、

是は理屈では無い實際問題

である、今更事新らしく云ふ迄もないが、手近い處が家庭教育の上に多大な關係がある、小供の寢る時、食べる刻限が一定して居るなどは、何よりも一番に小兒の精神に影響する、尤も小兒の年齢や身體の狀況に因りて一概には云はれないが、例へば、夜の八時に寢に就かせる事に定つて居れば、たとひ如何なる面白い遊びをして居らうとも、時計の八つの音を聞かば、直に寢衣に着替へさせて、お寢みなさいの挨拶で床に入らせるやうにし、又午後に與へる菓子なども三時と定めて置けば、無闇に其他に強請るものでも無ければ、宵から寢るなどゝいふ事のあるもので無い、何うも放縱な小兒の家庭を檢べて見ると、室内の裝置は日々に異るといふよりは、寧ろ取亂してある家庭に育つた者の方が多いそれは、自然に其亂雜な家庭の樣子が小兒の心に惡い感化を與へたものである、

一體規律の益ある事は、單に小兒の教育上のみでは無い、家族間にも亦大層利益がある、一家の仕事が手分けてさせてあれば、或者は非常に忙しく、或者は手を束ねて安閑として居るといふやうな事は無い從つて、

恨む者も怠る者

も無い、又外出には一々出先を知らせて隱し立てを爲るといふ事がなければ、若しも急用が出來ても直に用が充る、第一分擔して置けば、誰が其役目を盡さないか又は竭してあるかゞ分かるばかりで無く、其責任を果した者は、よしんば遊んで居ても心に咎める點が無いから、自然一家といふものが圓く治つて行くものである、

それから世間と交際する上にも大なる利益がある毎時も家の内が整頓して居るから、何時不意に來客

があつても匆々する事も要らなければ、賓客に不快の感を與へるやうな事もない、それに時日を定めて置けば御互に無汰足や不在を喰ふやうな事も無く、或は書信の往復にしても、サッサと始末を附けて行くから、お互に用も早く辨じ、且つ先方の心持を惡くするやうな事も無い、

ツマリ物事の有形無形に關はらず、凡て極りを良くする、少し堅い言葉で云へば規律を守るといふ事は、約めて見れば

時間、勞力、金錢の三點

の上に非常に利益があるので、換言すれば、家の繁昌するも衰頽するも、この規律を守ると否らざるとに基因するのである、而して之を守るとか之に遵ふといふと大層億刧に聞こえるが、最初

その習慣の附くまでの間

だけで、それも自分の心から必ず實行しやうと奮發して掛りさへすれば、少しも太儀なものでは無い、左様すれば終ひには夫を成し遂げねば物足りないやうな感じの發るものである。

女子の職業撰擇法

手島精一

女子には如何なる職業を授けたものであらうか、それは手藝が良からうとしても、その手藝中の如何なるものが最も女子に適するやと云ふ事に就ては、是まで隨分世間でも考へても居り、又研究もして居る樣子であるが、餘程これは六ケ敷い問題で、その人々の生計の度にも依り、又それ〳〵の事情等にも依るのであるから、直ちに一概に之が一般に良いと言ひ切る事は出來ないが、私は今日まで世間の女子が行つて居る中で、マア造花、刺繡、編物などは良い方だらうと考へる、で、是等の手藝は、その女子が其技藝に熟し、且又その方法さへ充分に講ずる事が出來得たならば、優に一家を立てゝ行くことは出來るが、裁縫だとか何だとか云つたやうなものは、

成程女子には無論必要なものではあるが、マア内職としては差閊なからうが、職業として今日それを成り立たせやうとするのは、少と困難であらうと思はれる、

然らば今後の女子は如何なる仕事をしたら最も有益であらうかといふ問題になるが、まづ私の考では、今後の女子の採るべき職業は、私は事務員が最も適當ではあるまいかと思ふ、何故といふに、女子は頭腦が緻密で、且つ徴兵の心配は無し、私は最も適當な職業であらうと考へる、現に女子共立職業學校などでも、一人外部の事をして居る男の事務員があるだけで、その外は皆女子が内部の事務を掌つて居るが、却つて男子よりも或點に於ては都合の良い事がある、

その他にはタイプライターを取扱ふ役であらうと思ふが、これには多少英語と速記とが出來なくては成し得られぬ仕事であるが、是等も今後の女子の職業としては、實に好箇の職業であると思ふ、現に外國などでは皆このタイプライターを取扱つて居るのは皆女子である、が斯ういふ仕事は殆んど女子に限るやうである、

尤も西洋では、重に女子の職業といふと、紡績、機織の女工、その外シャツ、帽子縫り、又は器械を使つて靴の釦を作るとか、電燈球、傳導機と云つたやうなものを作るのが多いやうであるが、それ以外で最も多いのは各商店の賣子である、西洋では大抵な小賣商に於ける賣子は皆女子がやつて居る、わけて米國などは最も多い、衣服、文房具などの商店の賣子は殆んど女子の仕事と定められてあるやうである、それから次は小學校の教員で、西洋では小學校の教員と云ふと、大抵は女子で、女子が十中の七八は占めて居るといふ有樣である、

日本の女子と手藝の關係をいふと、日本の女子は手藝には最も適當して居る、否、寧ろ日本人の指頭の達者なのには、外國人は迚も及ばないのである、それは何故かと云ふと、私の考へるのに、一つは、

箸を持つて飯を食べつけて居たり、又は軟らな筆を自由に使ひつけたりして居るから、それで自然手の器用といふ上に、間接に直接に利益を與へて居るのであらうと考へる。

それから女子手藝品の內地の需要、これは販賣の方法と相待つて行くものであるから、その設備さへ十分に出來て居れば、必ず需要はあらうと思ふ、のみならず、この需要といふ事も、或程度までは賣方の如何に依つて賣捌けるもので、現に彼の職業學校などでも三越吳服店の陳列場に學校で出來たものを送つて居るが、忽ちの中に賣れて了つて、今では殆んど其供給が不足で困るといふ有樣であるから、この需要といふ事は、その設備さへ完全して居るならば、必ずある事は疑は無い。

併し外國の需要といふ事になると、チヨツと爾う容易は行かない、これは矢張一工場で、一律の下に製作したもので無くては、どうも賣捌くといふ事は六ケ敷からうと思はれる、で、西洋などで外國へ

輸出するやうな物は、重に女子はドロンウオーク、これは引いた仕事といふやうな意味で、リンネンの模樣を、その模樣のあるとこだけの糸を引拔いて現はす仕事である、此仕事の外、刺繡、陶器のやうなものを取扱つて居るが、要するに外國の需要といふ上から云つて見ると、ツマリ內職的、家內的の職業では迚も駄目であると思はねばならぬ、

されば今後の方針と云つても、由來何事に拘はらず、その人を得ないと仕事といふものは出來ないものであるから、私の理想では、マア一體今日の日本の女子がモー少し常識を備へて、そして智識を貪らないやうになり、人に媚ず、人に侮られず、さうして凛とした所があつて、世の中に立つて男子と同じ仕事をしても優にゆかれ、また立派に男子と同等に仕事を行るやうにしたいと思つて居るのであるが、併しまだ何うも日本の女子は、其所まで發達して居ない、それに男子も女子を輕侮する傾がある、是等は孰れも十分注意を拂はねばならぬ事と思ふ、

歐米大學の女子生活

廣瀬潤吉

歐洲の大學では女子も男子も一緒になつて講義を聽くのであるが、是は男女同權といふ點から來たものであるか、但しは經濟の上から、女子と男子と學校を別々に建てるのは澤山に金が要るといふ點から來たものであるか、それとも他に何か深い考へから起つたものであるか、何うもまだ其邊は判然と分らない、けれども男女混交で聽講すると云ふことは、我等日本人の目には異樣に感ぜらるゝのである、尤も我國でも、先年早稻田の大學では講義を公開して、女も男も隨意に聽講を許した事がある、その時は隨分澤山の女學生が聽きに來たといふ事であるが、まづ之は我國に於ける男女混交の聽講の開山で、ツマリ卒先して歐洲の例に倣つたものであらうと察せられる、で今少し世の中が進んだら、女學生も共に講堂に立つやうになるかも知れ無い、大部世の中の底には左樣いふ聲も聞こえるやうだ、が、併し現今の鹽梅では急にしない方が良からうと思はれる、

英國の大學に於ける女學生は却々開けたもので、彼のオックスフオード大學では、

僅かに一學科を除く外は、何れの學科でも出席聽講する事を許されてあるから、盛んに女學生が這入り込んで來て、平氣で聽講して居る、而して日本の女學生のやうに、イヤに耻かしいと云ふやうな身振をして居る者は一人も無い學校の方でも二百名近い講師が、大部女子を優待する所から益々盛んになる計りである、但し女學生は試驗を受けてもビー、エー即ちバチエロー、オヴ、アーツの學位までは受けらるゝが、それ以上の學位試驗を請求するの權は與へられては居らない、これは他のケンブリッヂ、ヴイクトリヤ、ウエールス大學等でも大概同樣である、流石に英國は女權の擴張して居る國だけあつて、女子の學識も進んで居るやうに見える、併し夫が大學生の女子ばかりでは無い、

高等女學校でも其他の女塾でも一般は發達して居るのみならず、學問に中毒られる者は極めて少ないやうに見受けられる。

獨逸でも矢張り同樣に男女混合で、日本から行つた留學生なども、彼地の女學生と交際を結んで、男女混交で東京會など、いふ會を起して、時々會合して交歡する者が少なくない、一體獨逸の大學は、英米の大學などに比べると餘程六ヶ敷くなつて居つて、大學へ入る前には必ず大學の豫備門の課程を履まなければ爲らぬ事となつて居る、その修業年限は九ヶ年といふ長期で、米國のエール大學やハーバート大學の卒業前の課程と高等學校の課程とを合せたやうなものであるから、なか／＼此豫備門を卒業するといふ事は困難で、從つて大學へ入るには非常に勉强しなければならぬといふ事が察せらるゝのである、それで少し大きな都會には私立の大學豫備校があつて、其所の教授を受けて居る、これは每冬期のみ女子の爲に特に講義を開くことになつて居るので、勉强の女生は、此所で大學へ入る準備をして、而して初めて大學の教育を享けることになるのである

全體彼方の女學生は一般に體育を重んずるのであるが、殊に英國の如きは力を入れて居つて、體操科の不成績は操行の缺點と同樣に見做されて居るのである、で、英國の女子は一般に體格が能くて、その擧動も活潑である、

寄宿舍の有樣は如何といふに、素より其學校の目的や組織に由つて多少の相違はあるが、概して云へば皆よく整頓して居つて、外見は如何にも立派に見えるが、その寄宿生の風が何となく男子のやうで、女子らしき所に乏しいので、日本の女學生とは大層違つて居る、もし是等の女學生が、將來敎師とか又は技術家とかになつて、一生獨立の生活を營むものとしたならば宜いかも知れないが、苟くも普通尋常人の妻となり、人の母たるものとしたならば、聊か慮へものであらうと想ふ、尤も家庭に宿れる女學生は大抵中等、階級のものが多いやうであるが、稀に

は富貴の家の女子も、その母の考へからして、多少世の中の辛酸を嘗めさせた方がといふ希望からして入れて置く者もある、ケムリブッヂ、オックスフォードなどの寄宿舎には、隨分身分のある者、或は諸外國の貴族方などの來て居らるゝのも尠なくは無い、



塾の女學生が尤も樂しんで待つて居るのは春、夏、冬の休業で、これは年少の生徒等が何時來るなど、待ちわぶるのみでは無い、半白の年長教師なども、待ちに待つて、殊に休業日數の長い夏期休業などを、此上もない樂しみとして居る、尤も長い夏期休業も、大抵滿二ケ月か、若くば夫より少し長い位の所で、高等女學校は四十日より五十日位、春期は二週間、冬期は十日間内外である、

夏期休業中は、塾によつては悉く生徒を歸省せしむるのもあるけれども、また其望に任せて滯留せし

めて置くのもあつて、格別遠くから來て勉强して居る者の外は、大概歸省する、時としては敎師と生徒が共に旅行するといふ活潑生もある、一體歐洲人と旅行とは附きもの丶やうで、男も女も小兒も老人も大同小異で、轉地して新鮮な空氣を呼吸し、精神上および身體上の營養を爲る者が多い、近來は大都會の者が海水浴とか避暑旅行とかを爲るやうになつたのは、畢竟此風を學んだものであらうが、英人のそれに比べて見ると、日本の遣り方などはまだ〳〵實に幼稚なもので、迚も御話にはならない、

米國の大學でも矢張男女は同じ講堂で講義を聽くのである、カリフオルニヤとスタンフオード大學では、女子の數は男學生の三分の一を占めて居るといふ有樣である、尤も其中には隨分オールドミスも多いが、大抵は二十歲より二十四五歲位の女子が多い、オールドミスの中には、地方の高等女學校の先生等が其筋の許可を得て一ケ年間位勉强に來る者が多い、是等の女學生が勉强する所を見ると、大抵は文科の方で各國の國語などを修め、偶には敎育、心理、歷史等に出席する者もある、彼等の服裝は日本の女學生などよりも一層立派であるが、要するに之は富の程度が高いからでもあらうが、一つは競うて美を衒ふ風に基づくもので、甚だ悅ばしい現象とは云へない、英國なども格別であるが、米國の女學生も餘り行儀が良いとは云はれない、此點からは我國の女學生の方が幾分增しかと思はれる、例へば、講義を聽きながら、頰杖を突いたり、敎堂の上へ腰を掛けたり、敎場や圖書館でムシヤ〳〵物を食べたりするやうな不作法なるは、日本の女學生の迚も想像にも及ばぬ所である。

是等女學生の食事は、朝は紅茶或は珈琲に牛乳、麵麭と牛酪、および魚、雞卵、冷肉、鹽肉等の如き物を一種で、獨佛等の諸國では、朝は肉類を食べない換りに、チヨコレート等の飮物がある、晝は肉と

野菜と二皿位で、晩は何は此上にスープを加ふるともある、すべて調理法は手輕で且つ質素だけれども、衛生に付ては十分に注意してある、これらの食物の外に、午後四時から五時の間に、

丁度日本のオヤツ

と云つたやうに茶を喫んで、その茶受けにはバタを塗つた薄片の麵麭とか、又はビスケットの類を食べるのである、

以上述べ來つた所を約めて云へば、歐米の大學に於ける女學生は、少しく輕佻の傾きがあるやうだが、學問を勉强するといふ事に付ては、男子と一つ講義を聽く事が出來るといふ自由を得られると同時に、總て實用的に學問する、別言すれば、己が獨立し自活せんが爲に勉强するので、毫も外見を張るとか又は遊興的に學ぶといふ者は一人も無いのである、

長壽の秘訣

醫學士 日置正一

先頃萬朝報社で日本全國內の長壽者を募集した所が、一番年嵩なのが百七十幾歲といふ長壽者を知らせて寄越したものがあつたので、其社でよく〳〵調べて見た處が生死不明とかで、とう〳〵百十一歲になるお婆アさんが一番の長壽者と極つて、それで態々社員は懸賞の金牌とかを持つて、その長壽の理由を聞きに出掛け、其本人の話だといふ事が其紙上に連載せられてあつたが、別に取立てゝ言ふ程の事も無いやうに見受けた、所がその後、同社の社員が、豫て人壽百二十五歲說を主張して居らるゝ大隈伯を訪ふて長壽者懸賞の事に及ぶと、伯の曰はるゝやう、成程其社で懸賞を贈つた百十一歲の婆アさんや爺さんは高齡者には相違ない、併し其他に必ずしも我日本全國內に長壽の者が無いとは限らない、といふものは、如何に紙數を澤山に發行する萬朝報でも、

急度日本の隅から隅まで、津々浦々に至るまで行き及んで居るといふ譯には行かない、さすれば其行屆いて居ない處に如何なる長壽者が隱れて居るか分らないと、是までは至極生眞面目の御說であるが、引續いて言はるゝやう、予が人壽百二十五歲說より見れば、百十一歲はまだ若年である、そして一體予が人壽百二十五歲といふのは、

　肉體的のものでは無く精神的

の生命をいふのであると遁げられて、これは巧みな說明で、これでは百二十五歲どころでは無い、佛敎で謂ふ所の人壽五百歲說でも千歲說でも勝手に云へるのであるが、

　それでは普通の人に解らない

第一標準が示されてあるやうで、その實それは無い、何故なれば、大隈伯の說は精神の活動にあると云はれた丈で、その活動の狀態等に至つては少しも說明せられて居ない、多分大隈さんは自分が道樂の政治とかいふ方面から云はれたのであらうが、それが無いから死んだものと言ひ切る事も出來まいと思ふ

併し其樣な事は如何でも宜しいとして、余は此に普通世の中の人が誰でも出來る所の長壽の秘訣を述べて見やう、否、御傳授いたさう、

一に睡眠、二に運動、三に節食、これ長壽健康の藏の鍵なりとは泰西に於ける衛生家の格言であるがその三つの中でも睡眠は健康の第一秘訣で、誠に實き造化の攝理といふべきである、我等が日常生活しつゝある間に、絶えず精神と體力とを消耗しつゝあるのであるが、その減乏は睡眠によりて恢復せらるゝのであるから、我等は毎夜七時乃至八時間の睡眠によりて、

　毎日新らしき活力

を其精神と肉體とに得るので、恰かも新らたに生れ來りしやうに爽快なる心地を得て、再び活動の世界に入るのは全く睡眠の御蔭と云はねばならぬ、

　されば古への哲人も、安眠を以て千金に比べ、また朝の爽快を以て此寶に喩へられた、實に其通りで、

旨き眠りは石の寢床を金の褥となし、睡眠不足の朝の心地は惡魔の巣窟に導かれた想ひがあるのでも分かる、かく睡眠は人間生活上に至大の關係があるにも拘はらず、世人の多くは睡眠の時間と時期とに無頓着で、求めて不攝生をしたり、求めて不愉快を爲やうとするのは眞に愚の至りといふべきではあるまいか、

故に人たる者が若しも健全で永遠なる生活を希望するならば、それには適當なる睡眠を取らねばならぬ、延命長壽の秘訣として、世にこれ程重要なる手段は無いのである、睡眠の不足程生活の消費を速かにし、生命を短縮し、老衰せしむるものは無い、が、之に反して睡眠の徳は、生活の運轉を休息せしめて、日々消費せし所の精力を恢復し、而して體内の不用有害物を驅除するのである、加ふるに近頃發見せられたる生理學に依れば、われ〳〵の有機體が目の覺めて居る間は、吐き出す炭酸の量は、遙かに吸收する酸素の量よりも多いのである、而もそれを如何にして之が平均を保つ事が出來るかといふに、即ち夜間睡眠せる間に過分の酸素を吸收して、翌日の用に供するものであるといふ事が解つたのである、かく大切な睡眠も、餘り長きに過ぐる時は害のあるものである、先づ一般に適應せる睡眠時間は、六時間より少なからず、八時間より多からざるを以て程度とするのであるが、是に就て注意すべき數項の要件があるから、左にそれを略述しやう、

第一は場處で、閑靜で闇黑なるを最良とする、閑靜で闇黑であれば、ます〳〵精神を休息せしむる事が出來るからであるが、若しも喧噪で明るいと安眠を妨げるから宜しく無い、

第二は空氣の流通で、寢室には常に新鮮なる空氣を流通せしむるやうになし、廣く、高く、なるべくは晝間人の住はない所で、夜間は煖爐などを用ゐない部屋を撰ぶが宜い、窓は夜間の外は常に開放して、蒸發すべきもの、例

へば、花瓶、水差等の類を室内に置いてはならぬ、殊に室内は密閉せぬが良い、けれども止むを得ない場合には窓だけを開いて置かねばならぬ、

第三は飲食

で、睡眠する前に滿腹してはならぬ、さればとて空腹も宜くない、若しもあまり空腹であつたならば、一二時間前に少量の冷たい食物を取るが良い、爾うすれば眠るにも樂であれば、翌朝起き出づるにも快いからである、

第四は身體

で、これは云ふ迄も無く抑壓しないやうに、眞直に右側を下となして横はり、頭は少し高めにして眠るが良い、もしも關節を屈曲して寢るときは、身體に角度を作り、爲に腹部の血液の循環を妨害し、大いに睡眠の目的に違ふことゝなる、

第五は精神

で、凡て心配をしたり、又は仕事をするなどは一切廢さなければ不可ぬ、例へば、寢處に於て讀書する

などは、習慣とは云へ有害のものである、何故なれば、身心共に休息せしむべき時期に於て、更に精神を働かし始むれば、その起されたる働きは容易に止まないのみならず、終夜腦裏を去るものでは無い、或は身體が疲れて就眠しても、精神が尙ほ働いて十分睡眠する事が出來ないからである、但し眠りを催す爲に、殊更に難解い書物などを讀を、俗に謂ゆる眠り藥になる本は差支ない、

第六は時間

で、世間には往々にして晝夜を問はずして、如何でも關はず定めの時間だけ睡さへすれば十分であると信じて居る人もあつて、彼等は意の向ふに從つて勉強し、又は快樂に溺れて夜を更し、而して翌日の午前を恰も深夜のやうに眠るものがあるけれども、これは實に誤解の甚しいものと云はねばならぬ、成程睡眠の時間は夫にて可いとしても、その利害といふものは晝夜によつて異なるのである、即ち午後十時より十二時までの睡眠は、その利益が他の時間に二

倍するのである、
その理由は、凡そ人たるものは夕刻に近づくに從つて、その脈の搏ち方が速くなる、而して熱のあるやうに感せらる丶、
これは黄昏熱と稱するものにして、總ての人にあるものである、この原因は、日々新しき滋養分の漸次血液に加入するのと、他の一つは太陽が沒すると同時に、大氣に變更を生ずるに基づくものである、而して此熱の働きは睡眠を促がすのみで無く、またその體內に吸收せし不用有害物の蒸發を盛んならしむるものである。そこで此働きの最も盛んなる時期といへば即ち黄昏熱の最高度に達した時、即ち太陽が最も遠く我等より離れたる眞夜中の十時より十二時までである、然るに此尤も働き多き眞夜中に仕事をしたり、又は精神を奮起して、大切なる熱を他に用ゐるならば、我等の血液を更新し清淨にする蒸發の働きを妨げ、たとひ翌朝安眠して睡眠の時間だけは充たしても、既に蒸發の時を過去りたれば、睡眠の大切なる働きを爲す事は出來ない、從つて蒸發が不十分で、遂には病氣を喚起するやうになる、例へば、僂痲質斯の如きは夜業者に免がれざる疾病である、その他眠の爲にも害があり、胃腸の



爲にも宜しく無い、それ故に人は夙く寢て早く起きるやうにするがよい、これは長壽健康の第一秘訣で、之に次ぐものは適度の運動、節食等であるが、それは殊更に説明する迄でもあるまいから、賢明なる諸孃の實踐に委せて置かう、

夏の夕の注意

千輝泰明

凡そ世の中に夏の夕べの雷雨ぐらゐ小氣味の良いものは少ない、實に炎帝が日一日と暴威を逞うして、ヂリ〳〵と金をも鑠かす晝の暑さの堪へ難さに、投げ出すやうに身體を欄干に凭せて、恨げに仰ぐ東の空に一發の黒綿のやうな雲の峰が崩れかゝりて、見る〳〵中に天一面に擴がつて、その奥の方から癇の健のやうな閃電、つゞいて遙か雷聲が轟くよと思ふ間もあらばこそ、やがて二粒三粒豆のやうなのを先驅けに、屋根も拔けるばかりの大夕立、それに連れ

て吹きわたる青嵐が、面を拂ひ軒端の風鈴を騒がす心地善さは、實に何とも言ひ得ない快を覺えるのである、されば南洋邊の熱帶土人は

この雷雨を御醫者樣

と崇め、生命の親とも敬つて居るといふが、然もあるであらう、この夕立は、啻に堪へ難き夏の炎熱を拂つて身心を清涼爽快ならしむるのみならず、空中に浮遊充滿して居る不潔の塵埃や、不健康の病毒や臭氣等を撲滅して洗ひ淨めて呉れるから、之に依つて恐るべき疫癘までも免れるのである、

實に自然界の機關は、考へれば考へる程上手に出來て居るもので、夏の日熱は地上の水を蒸發させ、水は其熱を自分の形を變へる手段に取つて、

目に見えぬ蒸氣と化け

この蒸氣は空氣に交つて居て、上から來る所の日熱を喰止め、それが爲に自分も空氣も共に膨らんで上へ〳〵と昇り行き、上へ行くにつれて膨らむと同時に一方では冷えるので、とう〳〵その一部は雨とな

つて降つて來る、若しも人間の眼が、空氣や水蒸氣や、その他細微な塵埃の運動變化まで仔細に見ることが出來るならば、河や海の水が蒸氣になつて上つて行く工合から、それが冷えると共に其所の細かい塵を核に小さい雨粒になる工合、また集つて雲を作る塩梅、その雨粒へだん／＼水蒸氣が凝りついて大粒になり、而して落ちて來る樣子、それから塵埃や水蒸氣の運動變態につれて空中に電氣が起り、その電氣が電雲に鬱積して雷雹を起す工合、空中電氣の作用で空氣を變化し、それで非常に消毒の効のあるオゾーンといふ瓦斯を拵へ、その瓦斯が空中に浮游して居る色々の病菌を撲滅し、毒物を變化する工合、水蒸氣や雨粒が地上から立つて行く腐敗產物の悪い臭氣を吸取り、塵埃を附着させて落ち來る工合、是等の大活動を目撃して、その機關の如何に巧妙なるかに驚くであらう、それのみならず、日熱の爲に空氣が膨らんで動けば風が起り、風が吹けば身體の熱を除つて呉れる、何故

風が身體の熱を除つて呉れるかといへば、風が身體の汗を蒸氣の形にして奪つて行くからである、

一體汗でも水でも蒸氣の形になるには澤山な熱が入用で、この熱が人の肌から除る爲に涼しく感ずるのである、自然の風が無くて身體の汗が立つて行かない時には、扇を使つて其苦熱を拂ふか、さもなくば水で身體を拭く、これは單に冷たい水で冷すのみでない、この水が立つて行く時に肌の熱を奪ふから涼しいので、其證據には湯で身體を拭ひても同じく涼しいのである、足へ熱を持つて重い折に燒酎を吹く、燒酎は水よりも一段と涼しい、それは燒酎は水よりも一層揮發やすいからである、

山國の朝夕は海岸地方と違つてメッキリ凌ぎ良い其理由は、第一空氣が乾いて居る、空氣中に水蒸氣が少なければ何うしても冷え方が早い、これは水や水蒸氣の暖り難い、冷え難い性質と、それから空氣中に水分が少なければ汗が引き易いからである、殊

に東京などの海岸地方は空氣が濕つて居る、晝は此水分が日熱を途中で吸取るから、山國に比べれば一日中で一番熱い時刻が一時間位は後れる、が、さて夕方になつて日熱の來方が少なくなる、山國の空氣は早く冷える、海岸地方の空氣は其中の水分が容易に冷えないから矢張むし／＼と熱い、夜中までも扇が放せない、この理はまた夏と冬との氣候にも同じで、山國の方が年中での一番熱い日も一番寒い日も、海岸地方よりは一週位は先立つて來る、それから空氣が濕つて居れば汗が引き難い、これは勿論のことで、空氣が十分濕つて居るから、丁度腹一杯食べてる人が御馳走を前に置いても箸を取兼ねると同じでこの上に汗の水分を水蒸氣にして取ることを好まないので、熱は肌に籠つて堪へ難いのである、

　右の如くであるから、夕立もない風もない折の海邊の夏の夕べは、實に張合のないもので、風呂にでも行く、水で身體を拭く、庭に水を打つ、この水を撒くといふことは、熱して居る土地を冷す工夫で、この水が熱の爲に立つて行く時、多量の熱を奪ふので、

　家の周圍の空氣が冷える

から極めて有効であるのみならず、見た所だけでも涼し氣で、それと共に庭の草花や植木には缺くべからざる必需品になるのであるから、打水は夏の夕方の大切な仕事の一つである、

　廣々した庭や、海に面した家ならば兎も角、東京などの普通の住居では、夕立も無い夏の一夜も家の中に辛抱することは難かしい、第一身體の爲にも宜しくない、そこで夕飯の片附けもソコ／＼で戸外へ出る、廣い道路、橋の上、公園の木の間でも散歩する、程よき散歩から歸つて休息するならば申し分は無いが、茲に一つ注意を要することは、戸外へ出ると、

　見遁がせぬ誘惑物

がある、それを見ると何うも我慢が仕切れない、ツイ引込まれる、そこで歸つてから腹の工合が變だ、

下痢が始まる、醫者へ驅けつける、などゝいふ事になると大變であるから、これは極々注意しなければならぬ、その誘惑物とは氷水や其一類である、

臺灣の美人

菅谷久次郎

處替れば品換るとかいふ如く、この美人といふ事に就ても一様には行かない、皆それ〴〵國々に依つて異る所か、微細に觀察する時は、同じ東京の中でも山の手邊と下町では違ひ、また職業等によつても區別がある、そこで臺灣は我領土となつてから最早十年以上も經つのであるが、其所では如何なる女子を呼んで美人と稱するかと云ふに、まだ餘り多く內地の人達に夫が紹介せられて居ないやうであるから今茲に少しく其お話をして見やう、

偖臺灣の土人が女子の美醜を論ずるには何を標準とするかといふに、內地に於けるやうに其天性の容色等を基礎とするのでは無い、

專ら纏足の大小に由つて判斷せらるゝのである、故に此標準こそは美醜を定むる尺度とも云ふべきもので、これに種々の差がある、乃で彼等が絕世の美人と稱する者の足は、

二寸五分乃至三寸

にまで縮めたものであつて、普通の女子は三寸から四寸までの者としてある、而して四寸以上五寸の長に延びた女子は、醜いとするのみならず、卑しい者として擯斥せられ、貴婦人や淑女の間に交はる事は出來ないものとしてある、斯ういふ風であるから、若しもそれ以上の寸に伸びた者は、頭から下婢といふ名を下して、他日嫁に行くとしても、勞働で其日暮しをして居る苦力即ち內地で云ふ日傭稼ぎの者か或は水呑百姓と云つたやうな貧しい農夫の妻となるより外は無いのである、

次は顏面であるが、是もまた內地の人が美といふ

型とは餘程その趣を異にして居るので、

圓面と云つて

西洋人が好くマルポチヤといふよりは一層圓い顔の者を美人として、瓜實顔などゝいふのは殆んど眼中に置かれて居ない、而して眉は小さくて三日月形に生えて居るのを麗とし、目はパッチリといふでは無く、小さくて横長の方を貴とび、鼻は其先端の鋭くない小さいのを貴し、口は大きからず、唇は厚くなく、額の生際は彎形をなして居るのを美とし、富士額などいふものは度外どころか、額の美を損するものとして居る、それから全身の姿は、

瘠せたるを貴び肥滿せるを嫌ふ

の風習であるから、妙齢の女子などは孰れも天然の眉が美の標準に外れた形であるとすれば、之を細く剃りつけて蛾眉に作り、富士額のものは彎形に毛を拔いて更め、而して只管に圓顔に容ることに腐心して居る、

それから頭髪の形は種々樣々であるとは云ふものの、自ら其所には區別がある、

その區別は年齢が標準

で、五六歳から十二三歳までの女子は麵線髻を結び、十四五歳から二十八九歳までの者は螺仔髻を結び、十六七歳から三十歳位までの者は蘇頭髻を結び、尚ほ十五六歳から二十八九歳までの者が船髻を結び二十歳前後より四十歳位までの者は龜髻を結び、三十歳前後より終身まで圓頭髻といふ形のものを結ぶのである、

それに女子には洗頭といふ事がある、これは文字の上から見ると頭を洗ふのであらうと思はれるが、

然うでは無い、

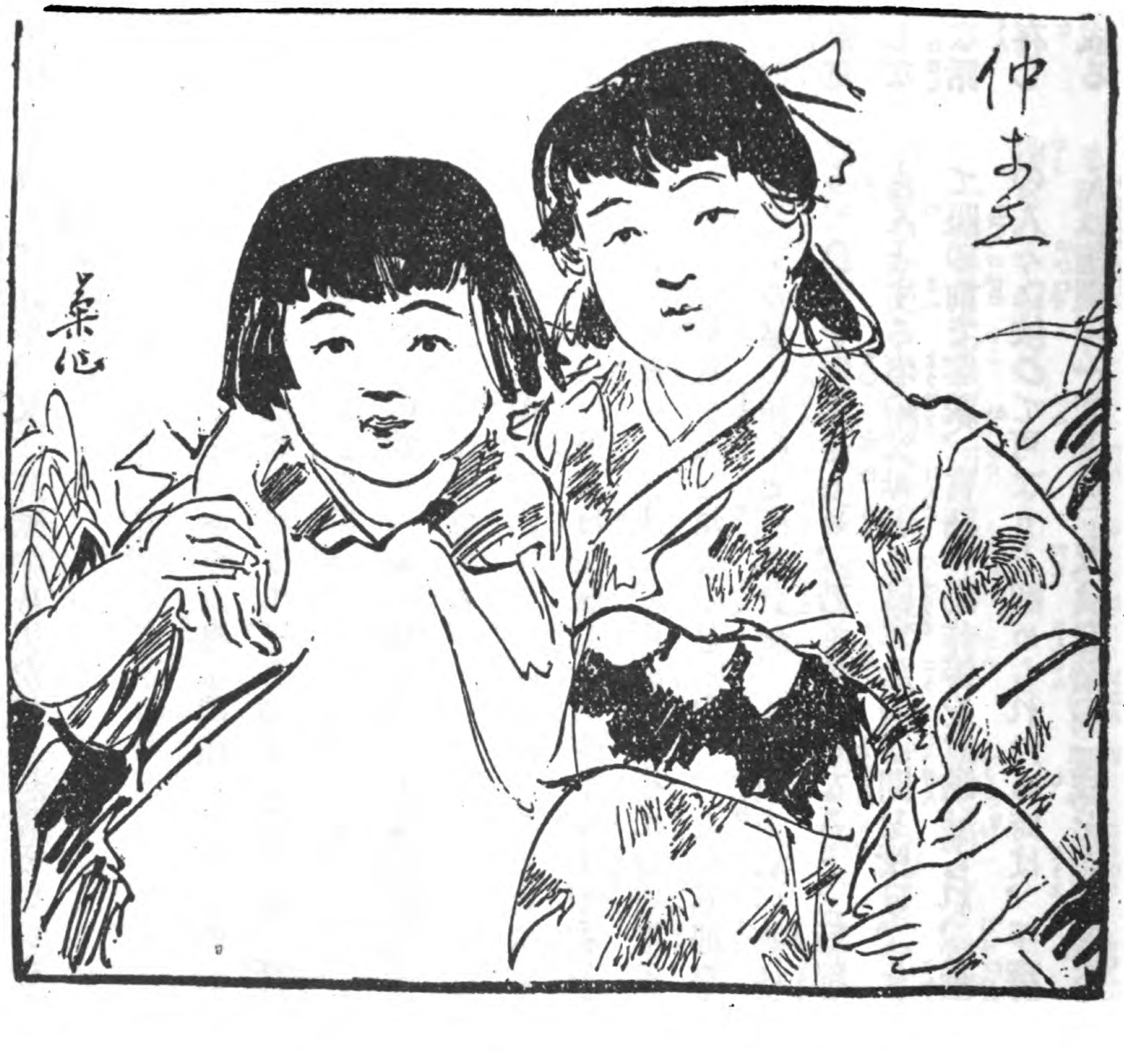
内地の梳るといふ俗語

である、一般に毎朝寢床から起き出ると、先づ纏足の布を釋きて新なるに巻き換へ、その釋きたるものを洗ひ淸めて後、蘆薈油の髓から採つたものを髮に塗り、頻りに梳つてから夫々の髮を結び、顔には白粉を施し、唇には紅を點じ、全く粧が出來てから

で無ければ人に顏を會はせるといふ事はないこれは上下貴賤の差別なく、女子たる者は必ず爲なくてはならぬ事となつて居る、で、可笑しいと云ふよりは寧ろ滑稽に感ずるの一事は、

乞食でも女子は化粧して居るのである、

次は衣服の事であるが、平生女子の着用するものは、下に衫と褌とを穿ち、上には神衣といふ短衣を着けて居る、併し儀式の時は綢襖といふ衣服を着け、恭裙といふ禮袴を纏ひ、而して花靴といふ禮靴を穿ち、大頭髻といふ冠を戴く事になつて居るが、その色の好みは、少壯の女子は紅色薄紅色または綠色を主として、少し年老つた婦人は靑色若くは藍色を尙び、衣料の緣邊は素靑緞と云つて無模樣靑地の緞子を用ゐて居つたが、近時支那內地の婦人好みの色が流行して來て、老幼の差別なく



粹で華美でない色を愛し、緣邊は繡花緞と云つて模樣織の緞子を用うる事となつた、殊に中流以上の婦人は相互に奇巧を鬪はす事となつて來た、

これは身分に應じて品柄に上下はあるが、金屬又は石類にて製したる手環を手に箝め、脚環を脚に纏ひ、頭には香氣のある種々の生花や金銀などで製したる簪を挿す中に、夫のある女子に限りては紅色のものを挿し、その上へ耳には耳鉤耳環を懸ける事になつて居る、

彼地の習慣として早婚を爲す者が多い、その年齡はと云へば大抵十五六歲で、夫を撰ぶのは兩親の鑒識に依るのであるから、隨分生涯を不幸の裏に送る者も尠なくない、何故かといふに、兩親が其娘を他に嫁せしめやうとする折には、女婿となすべき新郞その人の才識や、又は門地の如何などを調べもしないで承諾するのである、それでは如何にも散漫な話のやうであるが、併し其中に自ら一つの希望が存して居るので、それは至極簡單で、先方の家には成るべく舅姑や、又は其家から出た叔父叔母といふやうな者が無くて、

そして家產の富有なるものを目指すのである、それは專ら聘禮と稱して贈金の多きを貪るのが僻となつて居るのであるから、斯樣な事情の下に結婚を許諾せられて行くとすれば、娘はツマリ父母の爲に一個の賣買物として取扱はるゝと云はねばならぬのである、

右の如く父母が自由に娘の婿撰びをするとは云ふものゝ、結婚に就ては矢張媒介人があつて、初めその媒介者が嫁の家に來て、庚帖といつて嫁となるべき者の生年月を記したものを請取り、之を新郞たらんとする者の庚帖と照し合せ、更に賣卜者の許に至りて良否を判斷せしめ、乃で善いとなると、新郞たらんとする者の父母若くば尊族の訪問を受け、そして眼の前で容貌、言語、動作等を試驗せられ、是等の人々に依つて可なりと認められたる時は、手環若くば指環の一對とか、又は金簪の一枝を贈與せらる

ゝので、謂ゆる結納である、是で漸く婚約が成立つて、更に黄道吉日を撰びて結婚の式を擧ぐるのである、

袋物の話（口繪參照）

女子高等裁縫專修院長　小出新次郎

一口に袋物といふけれども、なか〳〵其種類は澤山あるが、古代は如何なる物を指して袋と云つたかと云ふに、彼の風呂敷をも總稱して袋と呼んだ形跡がある、例へば、草花を人に贈る時に、その根の方を風呂敷で包んで、そして其上を打紐などで縛つた事が流行したのであるが、これは現今でも行はれる、乃ち其草花を包んだ物は謂ゆる現今の風呂敷で、それを其時代には花袋と稱へたのである、今も或場合には唱へる、斯ういふに袋といふ意味が、

包むと云ふ事と併用

されて居つたやうに考へる、而して單純の袋の方にも隨分優美で、一點の非の打ち所の無い巧妙な物が作られて居る、

一體昔は少し大切な物は、何でも袋に納れる習慣があつたので、例へば、篳篥とか横笛とか云ふやうな物までも、既に木にて作られたる鞘と稱ふるものが立派に有るので、その中へ納れさへすれば、最早その上に袋の必要は認めない筈であるにも關はらず厚物なれば金襴とか錦とかいふやうな物、薄物なれば古渡り物などを使つて袋を作り、そして二重にも三重にも包む習慣があつたのである、

同じ燧袋でも、義經好みとか、又は稚足姫好みの燧袋といふものになると、赤地の錦や金襴の類を用ゐて作らるゝのみならず、その製法の如きに至つても、何處に一點の非難すべき箇所もなく、實に高尚で優美で且つ巧みなものである、

この袋といふものは餘程以前から流行したもので、從つて其製法に就て苦心したものである事が分かる、と云ふものは、筆袋一つでも、當今のものは

甚だ存在で、チョッと根の方を四五寸ばかり袋に縫つたゝけであつて、それで表面だけを覆ふのであるから、言はゞ略式である、これを本式に云へば、全體を背割にしなければならない、そして表面は重り合ふやうにして、その上から數ヶ所を揚巻か何かに優美な紐結にするといふやうな工合に作られてある、

それから守袋にしても、劃然と何れにでも當箝るやうな其型に原則といふものが定められてあるのであるが、此事は餘り世間の多くの人が御存知無いのか如何かは知らないが、

此原則の應用者が尠ないそれで完全な格好の物を得やうとするのは、謂ゆる木に縁つて魚を求むるよりも至難な事と云はねばならぬ、隨分世の中には之が師匠とか教師とかいふ方は澤山にあるが、併し其立場からして此原則の根底より應用せらるゝ者は曉天の星よりも稀であるから、僅少な日子や短時間で、その子弟たる者に自由自在なる働きを爲さしむべき所の應用の智識を與へると云ふ事は六ヶ敷いのである、

この故に責任を知る教授者は、須らく其原則を根底から探究して教授するやうにして欲しいと思ふのである、

然らば夫は如何いふ風にするのであるかと云ふに例へば、檜扇形なれば其形相當に、また船底の守袋にもせよ、或は丸形若くは茄子形等、それ〴〵多少の差はあるけれども、大體に於ては左まで異ふものでは無い、即ち何れにしても其體若くは渡りといふものがあるから、その體なり渡りなり、何れか其一方を標準として置いて、それから出は體の何分の幾らとか、渡りは何分の幾らといふ風に極めて置いて、そこで縦横の巾などを定め、ひいては何十分の幾らといふ工合にし、それから切込み、丸み、搔落しといふ風にさへして行けば、それでこそ始めて完全な形が出來るのである、

右のやうな工合にして其方法の一片の標準を定め

て敎へさへすれば、その他の部類や、大きい物は大きい物、小さい物は小さい物として、形の上に於て少し位の差はあるけれども、兎に角自由自在に造り得らるゝのである、之を知らないでは何時までも完全なる物を得らるゝ期は無いのである、

其他補綴込みでもハギ合せでも、皆それ〴〵原則があるのであるが、夫等を一々話すと長くなるから省くとして、

魚鳥等の形物

を作るに當りては、出來得る限り寫實的の方針を採らねば不可ぬ、例へば、一つの龜形を作るには、初めに龜の甲羅の龜甲形は、眞中が幾つで兩端は幾つ幾つあるといふ風に其數の勘定をして掛るといふやうに爲れば、出來た物と實物が符號を合せたやうになるから、自然實物敎育の裨益ともなるのであれば、凡ての場合に於て夫等の智識を與へるやうに敎授しなければならぬ、餘りに緣遠い怪異な物や、又は實物と似ても似つかないやうな物を敎へるのは、單に乙女等が智識の發達を妨げる



のみならず、ツマリ智識の統一を缺いて散漫せしむる原因となるものであるから、敎師とか師匠とかいふ方には能く其邊に注意せられて、責任ある敎授を施して希ひたい、それと同時に讀者諸孃も十分この事に心を配られて、餘り不思議なものなどは拵らへ無いやうに爲さらねばならぬ、

因みに口繪に掲げたる袋物の種類および名稱を擧ぐれば、

右側上より一、船底守袋、二、弦袋、三、小物袋、四、兩掛覆輪、五、檜扇形守袋、六、右は燧袋、左は龜守袋、左側上より一、丸形守袋、二、刀袋、三、鏝袋、四、合採袋(ギヤッチオル)、五、上は横笛袋、下は篳篥袋、六、補綴込み合採袋、



夏の歌

伯爵 東久世通禧

夏雲

こゝろなくうきたつ雲も夏來れば
　空しきそらに山つくりけり

曉の月

夢のごと消えにし君を思出でゝ
　有あけの月をながめつるかな

竹の風

露にさへたわみやすきを今年生の
　竹のなかばに風わたるなり

樹蔭水

柳かげ流るゝ水のしたはしき
　夏のけしきにはやなりにけり

夏の露

こぼれてはまた結びつゝ涼しきは
　夏のあしたの竹のしら露

家庭に於ける心理學の應用

高島平三郎

第十二　判斷　下

判斷の教育　前にも話しましたやうに、判斷と云ふことは人の知識の中でも最も大切な働きでありますから、子供を育てる者は何時も子供に適當なる判斷をさせるやうに氣を付けなければなりませぬ、それには自分自から事が正しい判斷をして事を決する時にはチャンと其據り所のあるやうにせねばならぬのであります。併ながら總て知識に關係しまするとは感情に關係することゝ違ひまして、唯自分がやつて見せるとか話して聽かすとか云ふことばかりではなりませぬ。眞に子供の心から其事を悟らせると云ふことをせねばならぬのであります。それで平生學校でも又家庭でも子供に爲せますることに就て、どう云ふ事が判斷を養ふに都合が好いかと云ふことをよく考へて置きまして、其機會を得る度によく其の心の働きを養ふやうにしてやらなければなりませぬ。

先づ第一に學校や又は家庭でしまする事の中で一番子供の心を養ふのに都合の宜いものは何であるかと云へば、手習することや繪を描くことでございます。手習を致しまするには必ず一方に手本と云ふものがありまして、其手本を見てそれに似せて文字を書くのであります。それに似せるにつきまして、手本の字の形、或は筆の勢、或は筆の跳方、又は止め方とか云ふやうなことゝ、又自分の其處に書き現はしました所の文字と比べて見ることが大變に必要でございまする。總てものを比べて見てそれが同じで

あるか違つて居るかと云ふことを知る心の働きは皆判斷であると云ふことは、前にもお話をした通りでございます。

手習を致しまする時には、必ず此判斷の心の働きが現はれるのであります。それ故に子供が手習を致しまする時にも、亦皆さん方が御自身で習字を爲さる場合でも、自分の書いたものと手本とどの點が全く一致して居つて、どの點が間違つて居るかと云ふことを一々よく比較をして行くと云ふことが非常に大切なことであります。何遍繰返して手習を致しましても、此比べると云ふ働きをよくしない者は決して手が進むものではありませぬ。何故に手が進まぬかと申しますれば、詰り判斷の働きが確乎りと働いて居らぬから、何處が惡いか何處が宜いか、次に書く時には何處を改めなければならぬかと云ふことが分らぬのであります。それ故に手習をすると云ふことは、唯字を奇麗に書くとか、或は達者に書くとか、又字を覺えるとか云ふやうな實際の利益ばかりでな

く、知識の上から申しますれば、唯今說いたやうな大切な判斷力と云ふものを養ふことが出來ます。

それから又、ヂッと坐つて落付いた事をすると云ふ習慣を付けて置くことは最も人の修養の爲になることであります。それ故に家庭に於て忙はしく暮して居る人でも、たまには昔の人の書いた法帖或は肉筆などを手本として手習をすると云ふことは殊に心の修養として、又知識の働きを開く上からして大事なことであります。私の尊敬して交つて居る人に長州の三浦梧樓と云ふ人がありますが、此人は皆樣の御存知のやうに、嘗ては陸軍の中將をせられ、後には朝鮮の公使となつて色々な事件に關係して有名な方でありますが、此方が大層佛敎に歸依されまして、熱心に佛道を信仰されたのであります。其時に私が參りましたら、御經を寫し始めたと云ふことを申されました、併ながら其經文などを寫されるのに、通常の人がしまするやうに、たゞ紙に普通の字を書くのではなく、非常な小さな筆を持つて細かく文字を

書くと云ふことを努めて居られたのであります。是は勿論昔の人の書いた御經の文字などを見て、正しくそれのやうに書かうと云ふことも努めるのでありますけれども、又一には細かい文字を書きます時には全く心をそれに寄せまして、其文字を書いて居る時には、一切他の事は考へない、即ち妄念妄想と云ふものが起らないから、其方面の事より他には何にも心に起つて來ないと云ふ有様になるから、其爲に細かい文字を書くと云ふことを申されましたが、是等が唯今申しました純粹に判斷するの働きと云ふばかりでなく、自分の心の修養の爲に最も適當な方法となりまする。それ故に家庭で自分を修養して行かう、自分の粗忽で落付かないと云ふやうなことを悟つた人は努めて手習をするとか。又細かい字を書くと云ふことを努めることを御勸め申す次第であります。

又繪を習ひますることも前のと全く同じことでありまして、其判斷の働きを養ふと云ふ上に付ては少しも違ひはないのであります。併ながら繪の方になりまずると、一層御手本と違ふことがよく分ります。何故と申しまするると、繪と云ふものは物の形を現はすものでございますから、若し御手本のやうに形が出來て居ないと非常に可笑しく見えて、到底其物の眞の有様を現はさないやうになりますから、誰が見ても何處が違つて居ると云ふことが知れるのであります。例へて見ますれば、鶴の繪の描いてある御手本を見て之を習ひます時には、若し其嘴が御手本よりも餘程短かければ、殆ど鶴と見られなくなる。或は又水仙の花が描いてある御手本を見て、之を寫しまする時に、能く氣を付けて御手本の通りに描かなければ、時としては六ッの花瓣を五ッにして仕舞ふと云ふやうな失敗を釀しまして、出來上つた時に全く水仙と見えないと云ふやうなことがあるのであります。字の方は色々込入つたものになりますと、僅かの違ひは之を認め悪いのでありますけれども、繪の方になりますと、其形を直ぐに比べることが出

來ますから、一層比較をし判斷をすると云ふ爲には良き方法であると思ひます。

　普通には繪を描くと云ふことは、畫工にでもなる者か、其他紋を描くとか、圖を引くとか特別の仕事をする者でなければ必要がないやうに考へて居りますけれども、決してさう云ふものではないのでありまして、一體物の形を寫すと云ふことは人の本能として自然に備はつて居るものであります。それのみならず何事をするのでも、物を見て其形が直ぐに手に依て寫し得られると云ふ風に練習して置くことは人間としての生活上必要のことでありますが、それに加へて唯今申上げましたやうに、文字と同じく判斷と云ふ知識の高尚な働きを養ふことが出來るのでありますから、學校に於て普通學の中で子供に繪の描き方を敎へると云ふことは大切なことは申すまでもなく、又家庭に於ても習字と同じやうに、自分の修養とし、嗜みとし、或は高尚なる娯樂として御手本を見て繪を描いて見るとか、或は實際の物を見

て寫して見るとか云ふやうなことは宜からうと思ひます。

　それも必ずしも立派なものを御描きなさるとか、或は展覽會に出さうとか、斯う云ふやうなことを望むのでありませぬ。自分の知識を養つて行くと云ふ上にするのでありますから、專門の畫工の外は必ずしも立派なものを作出すと云ふ必要はないのでありますが、一般に中流以上の家庭には是等のことも學ぶやうに致したいと思ひます。殊に婦人方は忙がしい生活の中で斯樣な優美の樂みをすると云ふことは非常に美しいことであると思ひます。自分の庭に斯う云ふ花が咲いた、自分の作つた牽牛花に形の變つたものが出來た、斯う云ふやうなものを見て其儘に寫して、さうして其花の大きさ形、或は咲いた月日、或はそれの培養方と云ふやうに、詳しく書いて置きましたならばそれが學問の爲にもなるし、又それが後日の思出でにもなり、又之を離れて居る朋友や或は親戚の人に知らせてどの位樂みを増し實際を知ら

せることが出來るか知れないのであります。斯う云ふことも皆比較と云ふ心の働きで、それと同時に手を動かし眼を使つて行くと云ふことが初めて出來ることでありますから、今御話致しました、書方、或は繪の書方と云ふものは決して疎かに爲さらぬやうに望みます。

次には又裁縫をなさると云ふやうなことが大いに判斷の働きを養ふのであります。全體裁縫をすると云ふは女として大切なことであると稱へられて、昔から女は針縫をしたり、料理をしたりすることが女の仕事であるやうに言はれて、必ず當然として之をやらねばならぬやうになつたのであります。成程裁縫をすると云ふことは今日の社會ではまだ婦人にとつて大變に大切なことでありませう。併しながら世の中が段々進歩するに伴ひまして、或は裁縫をするとか、料理をするとか云ふことは女子が唯一の仕事ではない、段々男の手に移つて、男子が料理をやらなければならぬやうに世の中は變りつゝあるのであります、例へば現に亞米利加や、或は英吉利の或部分のやうな所では、料理でも決して家でやらないで皆中等以下は料理屋へ食べに行くのであります。日本では大變な不經濟でありますから一家擧つて料理屋には行かない。外國では是が經濟になつて居るのであります。又裁縫のやうなものでも決して銘々の家庭でやることは出來ない、寧ろさう云ふやうなことは非常に贅澤のことゝしてある、即ち西洋では洋服を仕立るのは皆男子の職工が機械を以てやるやうになつて居ります。或は機械を用ゐずして手縫にすると云ふことがありますが、是は最も贅澤の裁縫となつて居る位でありまして、必ずしも裁縫や料理が女子の必然にやらなければならぬ仕事と云ふことは言はれないのであります。それ故に私は必ずしも裁縫などゝ云ふことを以て、どうしても女子のすべき仕事であると云ふことを此處で主張する譯ではありませぬ。勿論日本の唯今の有樣に於ては、まだナカ〳〵女子の手から裁縫を移して、さうして一般に職人が

やらなければならぬと云ふほどには世の中が進んで居りませぬ。女子のする仕事もそれだけに進んで居りませぬから、矢張り女子も裁縫をしなければならぬでありませうが、私が今裁縫の大切なことを説きますのは、必ずしも女子の仕事として人の着る物を作る必要と云ふ上から説くのではありませぬ、詰り裁縫と云ふものが、實に人間の知識の働きを開發して行く上に必要であると云ふ點を御話しやうと思ふのであります。



床摺れの豫防法

醫術進歩の今日と雖も世間に病人の跡を絶たず、病父を持つ娘も有るべし、病夫を持つ妻も有る可し、斯る婦人の中には、其父母や夫の、長病の爲めに床摺れの出來て苦しむを見るも、其の手當を知らざる爲め、徒に心を痛むる者も有る可し。床摺れは元と。纖弱なる皮膚の硬き衣服、夜着に堪へずして出來るもの故、成可く重き夜具を避け、輕くして温を保ち得るやうにし、脊骨の末端、肱、踝節、腰等主として床摺れの出來易き處を毎日二回づゝアルコールにて洗ひ澱粉を附ける時は決して床摺の出來る憂無し、從來油を塗る人多けれども、これは却て皮膚を軟かになす爲め、反對に床摺の出來るのを助ける譯け故、斷然廢すべし。

戀愛と色彩

梶田半古

戀愛といふ文字は、單に男女間の關係上にのみ限りて用ゐらるべきものでは無くして、此の外多方面に應用して差支の無いものであらうと思ふ、否、爾う無くてはなるまいと考へる、乃で予が今この二字に就て喙を容るゝと聞いたならば、定めて讀者の多くは一種奇異の感を惹起さるゝのみならず、或は餅屋が酒屋の事を說くの嫌ひが無いかといふやうな考を浮べらるゝか知れないが、それは畢竟多く現時の世論に耳を傾け眼を觸れたるものが先入主と爲つて居る結果に外ならぬのではあるまいか、开は兎も角として、予が今此所に說かんと欲する戀愛の解釋は敢て自然主義とか本能滿足主義とか、若くは戀愛神聖主義とかいふものゝ是非を較論したり、又は長短得失等に向つて批判を試みやうといふのでは無い、否、夫等の諸說を比較論評するといふ事に就いては、遺憾ながら予は自家の專門に忙殺せられつゝあるが爲に、夫等の諸說を精讀して之が材料を蒐集するの暇が無い、假りに有りとするも、予は素より夫等に對しては門外漢であるから、憖じ生中の揣摩を下して人を誤ることを恐るゝが故に、之に對しては寧ろ緘默を守るの責務があらうと思考するので、今は夫等に就て可否等は言はない、併し予もまた社會の一員として生存して居るものでなれば、人生の爲、將又國家の爲に多少の研究は怠らないが、それは將來發表するの時機があらうと思ふからである、

抑も人といふものに男女に關はらず、古來より言ひ傳ふるが如く、老幼を撰ばず、各自等しく喜怒哀樂愛惡慾といふやうな性情を具へて居るもので、乃ち愉快の事に接すれば喜び、悲慘なる狀を見れば哀しむといふ事は、

これ人類の通有性

である、尤も人類の文野に由つて多少の差異はあるけれども、一人として夫等の性情を具へて居らぬ者

の無いといふ事だけは斷言が出來る、
既に一般の人類が夫等の性情を通じて有して居るとして、その中には高尚なるものもあらう、又卑俗のものもあらうが、凡そ人たる者が斯世に生を稟け來つて、何物より一番最初に夫等悲喜といふやうな情を動かすかといふに、云ふまでも無く、
音響と色彩との二種
で、未だ音樂の何物たる所では無い、琴が如何なる音のものか、尺八が如何なる響を發するものであるかをも解せない幼兒でも、耳底で餘り甲走つた音響を發すれば厭忌がり、程好い音響であれば夫に聞き取れて居るといふ鹽梅であるし、色彩の側で云つて見れば、
陰性の色彩よりは陽性のものを喜ぶ
といふ傾がある、その厭忌がるといふのは之を惡むので、その喜ぶといふのは即ち之を戀愛するのである、その證據には、生れて未だ數月ならざる嬰兒でも、赤い色の物を見せれば之を凝視るのみか、覺束

ない愛らしい手を出して之を捉へやうとするが、之に反して黑い色の物であれば左程注意を惹かない、
少し話が前後したが、凡て色彩には陽性、陰性、陰陽兩性の混じたもの、この兩性の混じ方にも、陰性が六分に陽性が四分、或は陽性が七分に陰性が三分、或は陰陽等分といふやうな各種がある、此の外に陽性と陽性、陰性と陰性との混じたものもある、そこで赤といふ色は陽性のみで、陰性は少しも混じて居らぬが、紫となると陽性の赤と陰性の藍とが混つて出來、また陽性の黄と陰性の藍とが交はれば綠といふ色を顯はす、斯樣な工合に種々の色彩は成立つのであつて、通俗に云へば其調和の好いのが人に好かるゝのであるが、
その色彩と人との關係
に就ては一樣に言ひ切る事は出來ない、何故かといふに、或特殊の嗜好といふ事を除きて、世間一般の上から言ふとしても、其人の年齡、其地の氣候、或は身體の肥瘠、皮膚の色合等より割出さなければな

らない、例へば、昨今のやうな暑い氣候の時は、成るべく日光を反射する白ッぽい色の者が宜い、けれどもお巡査さんや軍人の制服のやうに眞白なのは、男子は兎も角として、女子には餘り褒めたものでは無い、のみならず若しも顔の色が黒くでもあると、全で印度人宜しくといふ風で、何うも照映が好く無い、去ればと云つて餘り燻んだ黒ッぽい色のものを被て居ては暑苦しさうで、これも見榮えが無い、そこで白地の中形模樣などが賞用せらるゝのであるが、同じ中形でも男女により、又は年齢の長幼等によりて異はなければならぬ、若しも夫が同一であつ



たならば、實に社會は乾燥無味に陷つて了ふのである、人類には先天的の好尚があつて、その好尚は漸を以て向上する、言を換へれば、人文の進むと共に一般の嗜好も增して來る、これが乃て美術の發展を促がすので、之を究極すれば其物を戀愛するに基くのである、故に聊か東西その趣を異にしないでも無いが、それでも若い者は自ら若いもの向、年寄は自ら年寄り向の物を擇んで用ふるけれども、其中にも自然其人の被て居る色彩に因て略其人の性格を推斷する事が出來るのである、概して陽性の色彩は一般に愛せらるゝので、殊に

或一部の婦人社會に於ては甚だしい、併し夫は彼等の職業上さうなくてはならぬのであるが、一般世間の女子たる者が自己の地位、性格、姿容等をも顧みないで、別言すれば、自己といふ者を忘れて了つて、頭の先から足の爪尖まで彼等の奴隷となつて居る者が尠なく無いとは實に嘆はしい次第ではあるまいか之を半面より云ふときは、色彩に對する嗜好の度の低いといふ事を自白して居るものであらうと思ふ、固より其人が擇びて着けたる色彩は、自己の嗜好戀愛に基きたるは今更繰返すまでも無いが、その色彩を撰擇するに方りては、如何に彼の色斯の色を愛するにもせよ、多少時流を斟酌するにもせよ、

　每に自己を本位として

色彩のために眩惑せられないやうにしなければならぬ、倘ほ親切に言へば、色彩其者をして自己に服從せしむるやうに努むることゝ即ちワザトラシクならないやうに撰擇を施し、而して自己の品位と性格とを失墜しないやうに心懸けねばならぬ。

裁縫實驗談

牛山孝八

裁縫實驗談など大仰に云ふでも無く、他家に奉公して居た時分には少々位の綻などを縫つた事はあるけれども、五十餘歲に至る今日まで、滿足に一枚の着物所か襦袢さへも纏めた事は無いのであるから、倘更斯樣なお話は出來ないのであるが、少し物心を覺えるやうになつてから、何といふ譯もなく衣服や襦袢等の、

　積り方及び寸法

といふやうな事に就て趣味を感じたのであるが、去迚自分が奉公先の主家の商賣とは緣の遠いことで、是ばかりは自分でも解らないので、その解らない内に趣味を有つて、男の裄丈は大凡そ幾ら〳〵、女物は大抵何寸〳〵で、衿下は幾らといふやうな事を覺

え込んで了つたのである、それ故に、動ともすると女子として、彼所此所を駈け廻つて其樣な事を訊いて歩く者を見ると、實に苦々しい事に思ふ、

一體私などは謂ゆる舊弊時代の者で、況して男の事であるから、兎角裁縫などゝいふ事には無頓着であるが、まだ近年までは女の手技といへば裁縫の事に限られた位で、女子として裁縫の技の出來ない者は、恰も車の片輪の無いものと等しく、女子の不具者とまで輕蔑れた程で、女子には如何しても知らで叶はぬ事となつて居たのである、所が近年は女子の教育も盛んになつて、種々の學問を學び、裁縫その他の技藝も授けらるゝのであるが、それが學校を卒業しながら、衿下は何寸か、衽下りは何寸のものか、甚だしきは此反物は何う裁つたら良いかなどゝ云つて持廻るに至つては沙汰の限りと云はなければならぬ、それに就けても思はれるのは、斯樣な婦人が一家の主婦となつたならば、家庭の不經濟は噓かしの事であらうと、實は餘所の疝氣ではあるが、頭痛に堪へないのである、後日人の妻となる所では無い、現に私の近所にも左樣いふ妻君があつて、時折質問に預る事があるが、その都度先方の御亭主に氣の毒であるとの同情の念に堪へないのである、

私は未だ奉公時代から、自分の衣類は、今も而うであるが、決して見立てを他人に托すると云ふ事は仕ない、而して買つて來れば直ちに總體の寸尺を當り、それより袖は何尺何寸、身頃は何丈何尺と積を立て、尚ほ衿は何尺、共衿は何寸と見積り、若し共衿が長ければ何寸だけ身頃の方へ廻すといふ風に確かりと見積の立つた所で、必ず袖長と身頃の長との部分には、凡そ二寸位づゝ鋏を入れて遣る事として居たから、最早仕立屋で如何する事も出來ない、假りに共衿が一寸か一寸五分位長いとしても、そんな僅かな布片は先方だからとて如何する事も出來ないから、まづ其儘に着けて寄越すといふ事になる、これは大層狡猾やうに考へるが、決して

左様で無い、兎角市中の仕立屋といふものは、夏物なれば布地ばかりであるが、冬物になると、布地は云ふに及ばず、その他に眞綿や小袖綿まで誤魔化すので、實に油斷も隙も爲つたものでは無いが、併し私が前に述べたやうに爲て遣れば、如何に横着を爲やうとしても餘地が無い、從つて再度縫ひ換へる時にも十分縫込みがあるから不格好にならない、尤も夏物と冬物、それも取つときと平常着で異ふけれど、まづ大抵、

　夏物は短く冬物は長く

縫込みを見積つて置く方が宜いといふものは、言はゞ夏物は冬物に比べて命の短いものであるが、之に反して冬物は着る時日も長く、洗濯こそ夏物のやうに度々爲ないけれども、將來何度も澣洗濯をして作り代へる上に於て、縫込みが澤山あれば其都度それを下して調寶する事が出來からである、

　一體裁縫といふものは、前にも云へるが如く、私は自ら針を取るといふのでは無いが、その針を使ふといふ事は仕立上りの上に於て格好の出來不出來に關するのであるから、決して之を忽がせにする事は出來ないが、先づ夫より前に、

　見積りを立てるのが專一

で、之に就てツイ此頃の事であつたが、今年十二歳になる少女が夏繻絆を拵へて呉れといふので、早速自身で呉服屋へ驅け附けた所が、丁度八尺許りの有布があつたので夫を買つて來た所が、家内は不審相な顔色をして居るから、成程當り前の繻絆なれば九尺要るのであるが、之は有布八尺であるから、筒袖にすれば充りると云つたら、成程左樣であつたかと云つて笑つた事ですが、裁縫を爲るには、

　この胸算用の積り方

に熟すると否とは、大層有布を求めるにも、否、一家の經濟上に損得のある事であるから、女子としては此位の事は心得て置かねばならぬ事と思ふのである、單に之は小布を求める時ばかりでは無い、平常内に在つて彼と此とを繰廻す時にも必要な事である

避暑の注意

ドクトル　鈴木清義

避暑の注意など、今更らしく云はなくとも、讀者は先刻御承知の事でもあらうし、また此事に就ては是まで耳に胼胝の入る程聞き飽きて居らるゝであらうが、サテ世の中の事といふものは妙なもので、平凡と思ふ事程兎角抛擲に爲りたがるもので、バチルスは又その隙を窺つて惡戯を爲やうといふのであるから、日に三度食べる米飯のやうで、別に變つた味が無いにもせよ、また其間には捨つべからざる所が無いでも無からうと、實は自分獨り定めで、聊か時節柄平凡な事を繰返して見やうと思ふのである、

取り立てゝ云ふまでも無く、毎年夏になると何故箱根や伊香保などいふ温泉場が繁昌するのであらうそれは湯が身體の藥になると思ふからであらうが、一體湯といふものは、今日の學問上から云ふときは、ホンの一時の誘導法、喩へば、肩が凝つた時按摩を爲るやうなもので、言はゞ一時療治に外ならぬのであるといふ事であるが、多くの湯治客の中には夫位の理屈は承知して居る者もあらう、併し中には萬病を治癒するの効能があるものと誤認して居る者もあるか知れないが、兎に角夏になれば夫等の土地が繁昌する事は爭ふべからざる事實で、それが而かも難儀な思をして山坂を越え、飲食調度等に不自由を忍んでも出掛けるとは、サテモ不思議な次第ではあるまいか、それは畢竟温泉場に附屬した種々の効能があつて、それが、

　直接又は間接に健康を益する

からであらうと考へる、尤も往々却つて不健康の因を蒔く者もあるが、夫等は論外として、

一體温泉の在る所は、大抵里を離れて山奥とか、或は人跡稀なる海岸などで、從つて山は峨々として翠微滴るばかり、水は潺々として碧瑠璃を湛え、若くば波は碎けて銀片を散らし、風は嘯いて自然の音樂を奏でるといふやうな場所で、景色が雄大である

のみで無く、空氣もまた新鮮で清涼であるから、一年三百六十五日都門紅塵の裏に齷齪として居る人が偶に斯様な處へ行けば、氣分が爽快になつて、一時浮世のごた〱を忘れて了ふ、是が避暑の効であり、又身體の薬となるので、約めて言へば、

煙霞療養の奇効

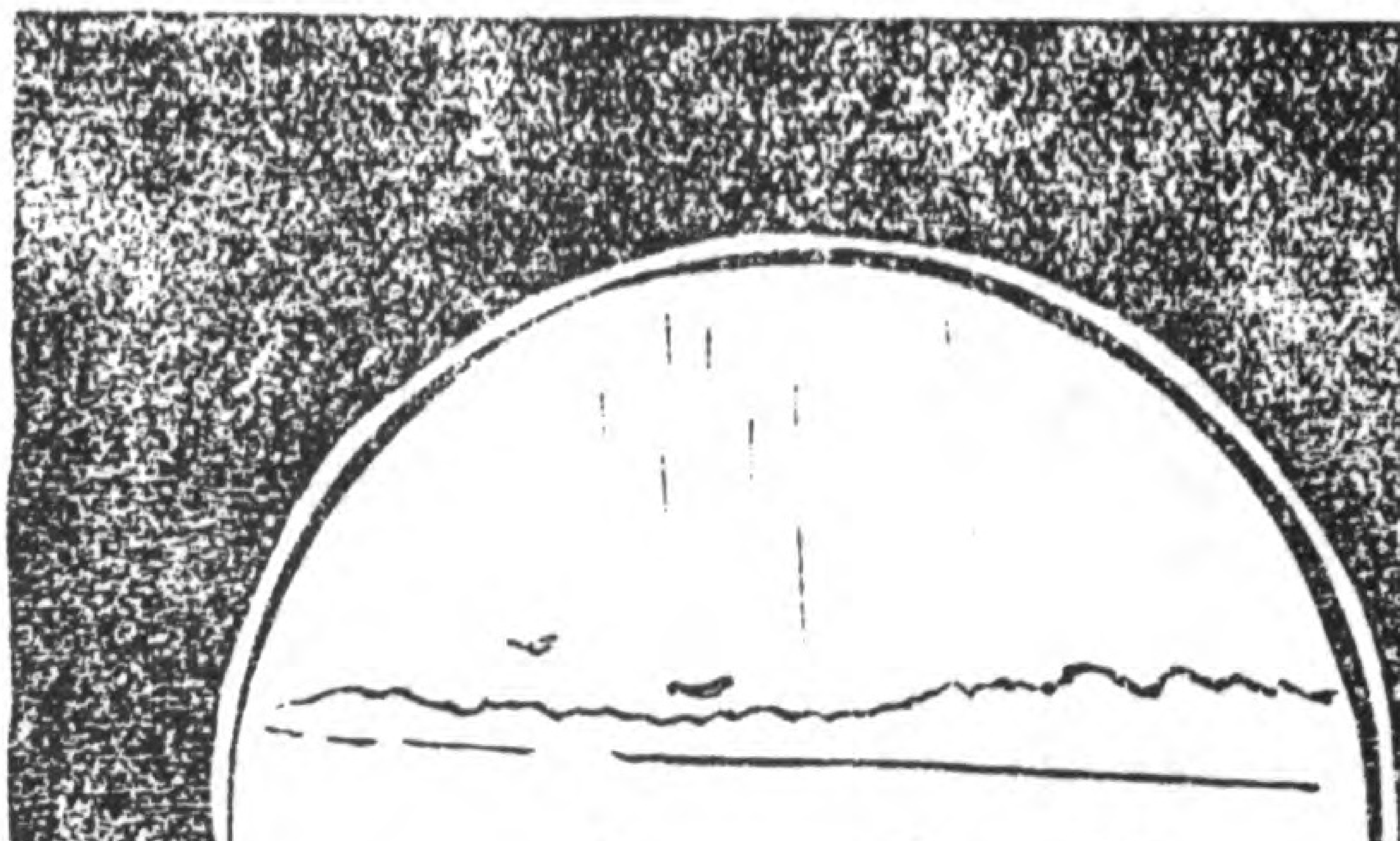
があるのである、

或大家の說に、温泉の療病に効用あるは、主として泉中に含有する成分及び温度に由ると雖も、亦土地の高低、地質、氣候の稠度及び寒温、風の方向及び強弱、雨量、光線、電氣、森林の有無、山嶽、海濱、家屋、交通、生活法、散歩、遊戯等、即ち外物及び精神上の關係、浴用法、服用法等の宜しきを得ざれば其奏効を期すべからず云々と說かれたるが如く、温泉の効用は甚だ複雑である、とは言ふものゝ、要するに温度の作用と電氣作用、壓迫作用及び化學的の作用で、身體諸機關の新陳代謝を盛んにし、而して精神と體力とを回復して、全身の諸器官能を容易

ならしむるに過ぎない、尙は細言すれば、皮膚の毛孔が膨脹して血液の運行を速かならしめ、動悸を進めて脉の數を増し、呼吸は程好くなつて且つ深く長くなる、かくして身體内部の血液が皮膚に循るから、自然と内臓の鬱々した血を去つて、體内諸機關の官能を壯んにして、全身一般の爽快を覺えしむるやうになる、乃で精神もまた大に安靜になつて來る、のみならず、皮膚の垢も自然と洗はれて來るから、老廢の表皮が取れて汗腺の分泌を促がす、これがまた體内の新陳代謝を旺んならしむるのであるが、併し自分が好いた温泉だからとて、それで効能のあるものでも無ければ、去年彼處へ行つたから今年は此所といふ風に自儘に擇んだとて、それで果して健康を裨けるものではない、必ずそれは行く前に一應醫師に健康診察をして貰つてから出掛けるのが安全である、

何故なれば我國は有名な火山國で、従つて温泉の數も非常に多くして、北海道および臺灣樺太を除き

て、既に是まで世に名を知られた所の温泉は、約そ四百三十有餘ヶ所といふ多數に上つて居る、尤も此中には大同小異のものもあるが、何に致せ夫等多數の温泉の中には、自己が其時に於ける健康の如何に由りて不適當のものが無いとも限らぬ、それはチョット素人考では解るものでは無いから、矢張餅屋は餅屋酒屋は酒屋といふ工合に、專門の醫師から診て貰つて行かないと、折角の湯治が病氣を釀す原因となるやうな反對の結果を招ぐ事となるから、是は呉々も十分注意をしなければならぬ、



有らゆる温泉を化學的の性質に從つて區別して見ると、

第一は炭酸泉で、之に二樣あつて、純粹の炭酸泉と稱するものは、食の前後に呑めば胸が透き、入浴すれば便秘を能くするから、病後の出養生などには宜しい、他の一種はアルカリ泉といふので、之は炭酸の外に硅酸を帶て居るもので、胃加答兒、消化不良、慢性腸加答兒肝臟病、婦人生殖器の慢性加答兒、氣管支炎、加答兒、慢性肺炎などに効がある、而して攝津の平野及び諏訪山、肥前の嬉野等は前者に屬す

るもので、豊後の湯の平、但馬の湯島、伊豫の道後などは後者に屬するものである、

第二は硫黄泉

で、酸性にして、主として硫化ソヂユーム、鹽化ソヂユーム、及び各種の鹽類を含有して居て甚だ厭な臭がする、丸で腐れ玉子のやうである、併し間々無臭のものもある、大概の硫黄泉では銀の指輪や時計などは忽ち黑色に硫化さるゝので硫黄分の多い事が分かる、私が二十年程前、此事は上州草津の温泉で實驗した事がある、凡て硫黄泉は疥癬、濕疹、乾疹挫瘡などの皮膚病に効能があるのみでは無く、この外梅毒、骨膜炎、關節炎、僂麻質斯等にも効用がある、而して伊豆の修善寺、箱根の蘆の湯、上州の草津、仝伊香保、伊豆の熱海、肥前の温泉岳の湯などは大抵之に屬するのである、

第三は鐵泉

で、これは鐵氣であるから、著しく澁味を有つて居て、諸種の成分と共に酸化鐵を含んで居る、故に泉底および附近の地には赤錆色を附着すとある、又含鐵炭酸泉といふのは、普通の炭酸泉に鐵を含有させたもので、婦人産後の貧血、白血、硫黄病、ヒステリー、ヒポコンデリー、神經痛、神經衰弱等に効能がある、そこで箱根の各湯、上州の四萬等は夫であるが、伊豆の修善寺は多少含鐵泉の中にも加へらるゝのである、

第四は鹽類泉

で、これは食鹽、苦味、石膏、芒硝、沃度等を含有して居て、その分量の多少に由りて効能にも亦相違がある、併し主なる効用はと言へば便秘、逆上、痔疾、ヒステリー、心臓病、レウマチス、胃加答兒、子宮の炎症等に宜しい、殊に其沃度泉は腺病、肋膜炎、梅毒、子宮膣カタル等に著しき効驗がある、而して此種の個所は、箱根の宮の下、攝津の有馬および庫湯、伊豆の伊豆山、伊勢の鹽湯、加賀の山中、越中の小川、能登の和倉、但馬の湯村、下野の鹽原上野の磯部等が此鹽類泉に屬するのである、

以上略述したるが如く、その温泉と病症とに由りて撰擇を異にすると同時に、兎角我國の人は湯治場へ行くと懶怠くなつて、大抵湯に浴つては終日寢て暮す傾があるが、何うか成るべく奮發して、雨天の日は止むを得ないとしても、晴天の時は少し位過度と思ふ位、毎日近所近邊を散策する事を日課のやうにして、入浴は晝夜を通じて三回乃至四回よりは多く爲ない方が身體の爲である、

國益蠶の話

中村那可子

蠶を養ふといふ事は單に我國のみでは無い、世界到る處に行はるゝのでありますが、まづ外國の事は措置きまして、年々我全國内で之を飼ひ、その造りたる繭から取つた生絲を外國へ輸出するのでありますが、その額は多くの輸出品の中で第一番に位する、それを金高に積ると毎年約五千萬圓に上るのであります、この五千萬圓といふ金があれば五艘の一等戰闘艦を製する事が出來る、是といふも明治維新の後、申すも畏きことながら、吾國母陛下が此事を御奬勵遊ばさせられたに基くので、今年なども先頃國母陛下には、畏くも西ヶ原の養蠶傳習所へ御臨幸あらせられ、親しく其模樣を覽はせらるゝといふやうに、毎時も此事を大御心に掛けさせ玉ふと拜しては、た〳〵吾等は感泣の外は無いのでありますが、措此くまで國益の第一となる養蠶の事に就て、之が關係地方の者は能く其事を承知して居られやうけれども都大路の眞中に住んで居る者には、如何なる順序のものであるか、また養蠶家の苦辛は如何許りのものであるかと云ふ事に就て、既に畏き國母陛下すらも親しく御承知あらせらるゝにも關はらず、其お膝下に居る者が知らないとありては、實に面目次第も無い事と存じ、聊か此所に其お話をして見やうと思ふのであります、

サテ此蠶といふものは太古から家の内に飼はれた

ものではありません、蠶といふ蟲がもと〳〵天産の者でありますから、矢張今でも家の外で天然飼に爲る方が良いといふ説が行はるゝのみならず、極小部分では之を行つて見ますが、何分鴉や雀などいふ鳥の爲に荒されるので、十が十までは屋内で飼育されます、私の小供の時分までは春蠶と申して、春一度だけ飼育したものでありますが、明治維新の後になりまして、彼れは何年の頃からでありましたか夏蠶と申す事が流行出し、それから又何年か經て秋蠶といふ事が流行出し、最後に四化生と申して秋蠶の後に飼育する事が流行つて來たのでありますから、最早今日では

一年の中に四回だけ飼育

せらるゝ事となつたのであります、併し手順は何れも大同小異で有りますから、春蠶としては少し時候遅れでありますけれども、秋蠶としては少し早く、夏蠶としては上簇即ち成繭に近いのでありますから、まづ順序として春蠶の事を述べたならば、他は推して知らるゝであらうと存じます、

造化といふものは能く仕たもので、春の四月頃になると桑の木もそろ〳〵と芽ぐんで來る、それと同時に養蠶家は桐製の箱の中から卵紙と云つて、之は去年繭の中から生えた蛾が產み附けた紙で、横が約七寸、縦が約一尺二寸位のもので、それに一面細かい蠶となるべき卵が附着して居ります、之を蠶室へ持つて來て設けの棚へ載せ置き、温かい外氣に觸れしめて發生を促がすのであります、かくて十日程も絶つと、その卵の中から蠶が孵つて來るので、その孵る間際になると、蠶兒の體は殼の外から青く透き徹るやうになつて一面に青味を帶びます、養蠶家は之を稱して、

催青と呼ぶので

すると間も無く細い毛のやうな蠶兒が蠢動し出すので、之を毛子と名けますが、この毛子が悉皆出揃つた所で、掃立紙と云つて、美濃紙凡そ四枚を綴合せたものゝ上へ、

羽箒で掃ひ落すのであります、何に致せ其名の如く毛のやうな細い小さいものであるから、ウカと指頭などを觸れやうものなら、忽ち何百疋といふものを押し潰して了ふので、そこで鳥の柔らかな羽で拵へた箒を用うるのでありますが、その卵紙一枚から孵る數は、

三萬乃至五萬頭

に上るので、一枚の數が是であるのに、それを十枚二十枚掃き立てるといふ事になつては、その忙しさも思ひやらるゝのであります、

毛子を悉皆掃立てたならば、次は其上に豫て臼にて細かく搗き碎きて篩にかけて造り置きたる籾糠を大抵毛子の體が沒する位を度として、薄ッすらと振り撒き、その一端より徐々に羽箒にて輕く攪拌し、而して之を別の紙の上に取分けて丁寧に擴げて置くと、凡そ二三十分も經つと毛子は悉く籾糠の上に這ひ出ます、そこで初めて第一回の食物を與へるのでありますが、春蠶の時分には俗に桑のメドと稱する桑の木の芽を給する便があるが、夏蠶以下には其便宜がありません、尤も春蠶でも桑の木の發生の模樣で爾う行かない事がある、其時は極柔らかな桑の[illegible]を撰んで刻んで與へるのでありますが、この桑の葉の刻み方は當才より繭を作るに至るまで、

蠶兒の年齢に由つて相違

があるので、等しく養蠶家の苦心する事であります、先づ食初に與へる桑の大きさは五厘乃至一分位を程度とするのでありますが、二日と經ち三日となるに及べば、一分五厘以上二分乃至二分五厘と大さを増し、尚は蠶兒の成長して、二齢三齢四齢と進むに從つて漸次大きくして行かねばならぬが、此所に注意すべき事は、毎時も桑を與へる時には何處も彼處も不揃の無いやうに一樣に給れなければならぬ事であります、尤も此の桑の寸法は、蠶兒の小さい中は爾うでも無いが、成長するに從つては、却々澤山の桑の葉を一枚〳〵揃へるなどゝいふ事の出來るものではない、其所は熟練に依るので、その熟練と之に加

ふるに一分篩二分篩三分篩などを備へて置いて其缺を補ふのであります、

毛子に桑を與へるにしても、掃立てから夜の十時位までに五回程、成るべく一定の間隔を置いて給るやうに、その翌日よりは晝夜を通じて八回位に給桑する、是は初眠に着くまで此通りに爲て行くのでありますが、その給桑に就て最も注意を要するのは、

一定の時間と一定の分量

といふ此二つであります、若も此二つを忽がせにすると蠶兒をして病に罹らしめ、甚しきは斃死せしむるに至るものであります、

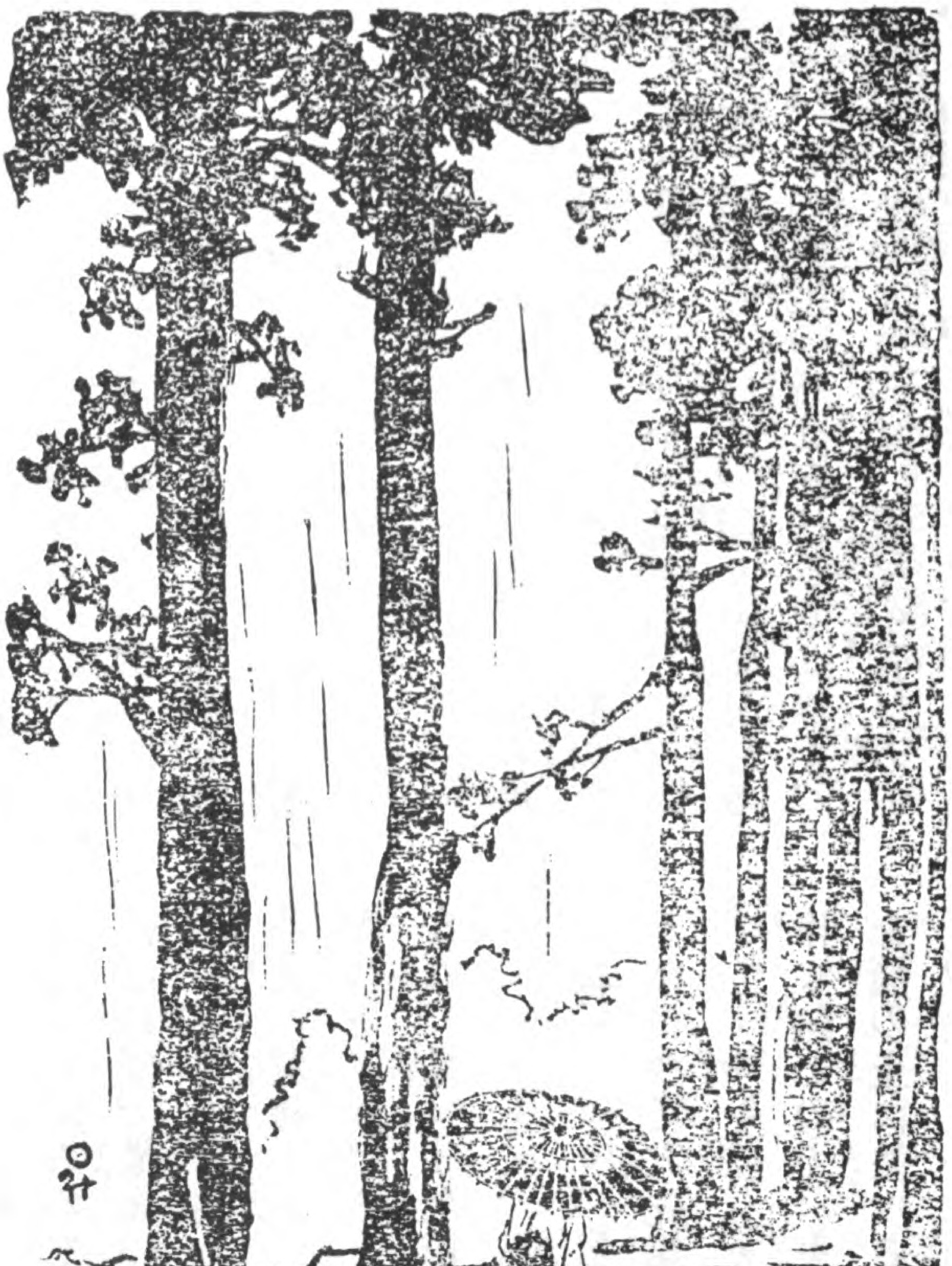
それから分箔と申して、蠶兒の發育に應じて、漸次に坐席を擴げて遣る、その擴げると云つても蠶の一坪といふのは凡そ四尺四方と云ふのでありますから、是まで一坪のものは二坪に分ち、二坪のものは三坪に分ける、是を分箔即ち坐席を擴げるといふので、その時に、

除沙替といふ事

を爲て遣るので、之は蠶に第六日目に行ります、所によりては此事を蠶沙替、床替、裏替、跡立など、申しますが、それは最初先づ籾糠を蠶座の上に彼等の體が隱れるまでに撒て、其上に刻み桑を振りかける、すると蠶兒は悉く籾糠の間から這出して頭上の桑に取り附く、ソコデ又次の桑を遣ると、蠶兒はまた其上に這ひ上るから、此時蠶沙の持上らないやうに注意して、手で徐と籾糠の部分より蠶と桑とを一緒に捲き集めるのであるが、時として其籾糠を撒た上に、細い麻にて作られたる細かい目を持つて居る網のやうな、俗に蠶沙除と稱するものを覆ひ、其上より刻み桑を振り撒き、蠶兒の悉く此上に載つたのを見斗つて他に移す方法もあります、

第七日目になると餘程食慾が減じて來る、最早そろ〳〵眠に就くのであるから、第八日目に朝一度給桑したなりで止めて置きます、やがて蠶兒は活動を休止して殆んど眠つた體であります、故に其途の者の通語で、

初眠または獅子の休みと申すのですが、此折蠶兒の有様は如何といふに、蠶沙に絲を吐いて體に纏ひ付け、そして足の爪を之にかけて體を支へ、や丶頭を擡げたなり安靜して身動きも致しませんのみならず、此くして一晝夜といふものは少しも桑を食べないのでありますが、其實是は蠶兒が舊皮を新皮



に脱ぎ代へるので、その模様は、やがて膜質の部分に丁字形の裂目を生じ、二三回身體を藻掻くと見る間に頭を出し、次で胸や足といふ風に全身を脱出し而して再び活動するのでありますが恰も其間は眠つて居るやうに思はれるのであります、次で二眠乃至三眠まで、何れも初眠の時の如く漸

次に舊皮を脱して新皮に代へて行くことは同様であるから其説明は略するとして、其色合を申せば、初眠前は眞黒な蟻のやうだが、起きると夫が藤紫に變じ、二眠以上は段々と白の中に青味を帶びたやうな色に變じて參ります、そして一眠から二眠の間は大抵一週間位づゝで、既に四眠より起きて、齢を重ねること五つ、日を經ること約三十日となれば、蠶兒は發育して、

身長約一寸七分胴圍約六分

となるから、その食量も却々多大で、最早此時には桑葉は刻まずとも其儘遣るのみならず、上簇間際になると枝附きのまゝ與へるのでありますが、この四眠後は養蠶家の最も多忙なる時で、能く寢食を忘るゝと云ひますが、この繁忙の時は忘れるでは無く、實際その隙が無い、といふものは、蠶兒の食ひ方が烈しいので、その喙む音は、

全で雨が降るかと思ふ

やうにサハ〳〵といふ音がするばかりで無く、まだ

一順與れ終らない中に、最早最初の者は食ひ盡すといふ、その忙し加減は實に想像外であつて、何れも眼を眞赤にし、腹は脊に着くといふ様な思ひをして驅け廻つて居るのであります、斯くて八日目の十時頃になれば、最後の蠶沙を取替へて、最後の桑葉を給して養育の爲納めとするのでありますが、その代り一方に蠶籠の上に簇と云つて、蠶兒が繭を作る時の支柱となり足代となるものを拵へて遣らなければならぬ、是には島田簇、折簇、百足虫簇などいふ種類がありまして、島田簇といふは、菜種の殼や麥稈、竹枝、オドロ、鼠モヤ、豆殼、稻藁などで、苞のやうに折つて其先端を括り、頭の所を輕く打いて平たくし、中を膨らめたるもの、打簇といふのは一番雜作も無いので、夫等の材料を折りて連續せしめ、之を籠の上に並べるのであります、百足虫簇といふのは、讀んで字の如く一筋の繩に夫等の材料を横に經はして百足虫の形として籠に仕附けるので、是等は農事の閑散な時に用意して置くのでありますが、之

を籠に仕附け、蠶兒の體色が透き徹つて、尻の所に蠶糞が一粒位になつたものを撰り取つて簇に上げて遣るのであります、

すると蠶兒は諸所自分の氣に入りたる場所を撰び廻り、此所ぞと思ふに到ると、やがて筋肉の作用に依つて吐糸管を動かし、網の目のやうに左右に糸を吐き掛け吐き重ね、大約二晝夜で繭となるのでありますが、繭を結んでから二晝夜で黄白色の蛹に化し、後また二晝夜で蕉色と變じ、かくて五六日を經れば皮膚が強固となるから掻取るので、それから尚ほ數回の手數を經て漸く我々の肌を被ふ所の立派な衣裳等に成るのであります、

好きなものと嫌ひなもの

男爵夫人　目賀田逸子

人の心の異なることは猶ほその面の如しとか申します通り、私が好きだからとて、それを人樣に強いやうと云ふでもなければ、又嫌ひだからとて夫をお廢止なさいと云つて、何も他人の嗜好を禁めやうといふのでもありません、固より之を好み彼を嫌ふのは人々の自由でありますから、それは御隨意に取るなり捨つるなり御勝手に任せるとして、

私の嗜好は園藝が一番で、この園藝にも自ら二通りあらうと存じます、それは單に觀賞的のものと、専ら實用的のものとに分れますのみならず、尚ほ委しく申しましたならば、觀賞的を兼ねたる實用的のものと、一向に實用的のものといふ風に區別しなければなるまいかと存じますが、マア爾ういふ六づかしい話は措置きまして、

私は同じ園藝を好むと申しても、中には單に花や香のみを賞するものもありますが、何方かと云へば、成るべく短日月の中に成長して果實を結び、小は以て一家を利し、大は以て國を益するといふやうなものを最も好みますので、諺に桃栗三年柿八年、梨子

の馬鹿めが十八年といふ事がある、その中の桃や栗や柿のやうに速かに成熟するものが好きなので、成程梨子などは實を結べば一個幾何といふやうに直段は高くて利益があるか知れないが、年月から割出して見れば桃や栗のやうに速く成熟するものゝ方が利潤であるから、寧ろ私は梨子を捨てゝ栗や柿の方を取るのであります、

私が好きだといふ園藝の中でさへも斯く好き嫌ひがあるのでありますから、定めし廣い世の中には私と嗜好を同うせらるゝ方も尠なくはあるまいが、併しまた女だてらになどゝ輕侮せらるゝ方も澤山あらうと思ひます、けれども園藝に對する私の嗜好は、何も初めから人の入智恵や煽動に基いたものでは無く、自分が何とは無しに之を愛するやうになつたので、言はゞ私の心が園藝と適合したものであらうと存じます、サテ斯樣に嗜好が傾いて見ますと、在來普通の花卉果樹は勿論、人樣が何處に斯ういふ珍らしい種類があるとお話になると、出來得る限りは手

を廻して夫等を蒐めて居りますので、中には大學の植物園にも無いやうな花卉も集つて居ります、

何に致せ私が園藝を愛し之を嗜むといふのは前に述べましたやうな主意でありますから、前年韓國から歸ります時などにも、如何にも彼地の棗は實が大きくて珍らしいので、豫て出入りの植木屋に吩附て伏せて置きました苗木數十本を持ち歸り、もしも素人の手で種無にしてはならぬと思つて、半數以上は薔薇新(駒込動坂の名高き植木屋)へ托し、その餘は庭前へ植えて置きましたが、幸ひに枯れもしないで成育いたしますが、何も之は私一人で之を樂しまうと云ふのでは無くして、追々は世間に擴めて共に樂しみたいと思ふからであります、之はホンの一例でありますが、花卉果樹に限らず凡て私は一人で樂しまうといふ了簡は無いので、成るべく夫を增殖して、多勢のものと樂しまうと心掛けて居るのであります、

此く自分が好きな替りには、當今は大部接木や苗

伏せなどいふ事も巧者になりましたから、滅多に物を枯らすといふやうな事は御座いませんが、隨分手數も掛つて五月蠅やうなものゝ、その成熟を見る事の樂しみは又別で御座います、併し其爲か身體は達者で、手の先などは此通り日に焦けて居りますけれども、まだ感冒一つ引いた事は御座いません、

妙なもので、見やう見眞似で、既や婚嫁ました二人の娘も、まだ家に居ります娘や男兒も、矢張り私に似たのか、又は始終我が植木を取扱のを見てかい、ぶれたとでも申しませうか、接木は難かしう御座いますが、鉢分けなどは却々上手に遣ります、それにもと〳〵下女や下男は、私が此園藝を遣るために備ふたのではありませんから、よく〳〵暇でも無ければ夫等の手を煩はさないのであります、それでツイ先頃の事でありましたが、俄かに夕立が降つて參つたので、あの庭先にある多くの鉢物がまだ小さい苗木でありますので、雨に打たせては大變と、下駄を穿く間も無く、裾をからげ、頭から浴衣を冠つて一生懸命に椽の下や軒下に運びましたが、爾ういふ時には却々忙しう御座います、併し斯ういふ風でありますから、自然身體の爲にも良いのであらうと存じますが、ツマリ是は園藝の餘德で、

謂ゆる間接の利益

であらうと存じます、それに斯事は迚も家の中に引込で居ては出來ないので、何うしても外へ出るので、從つて新鮮なる空氣を呼吸し、時としては太陽にも照りつけられますから、身體の虛弱な方などには至極好い運動にもなり、普通の方では大層衞生の爲になるだらうと存じますが、何も私は亭主の好きな赤烏帽子で、無理に人樣に御勸めをしやうといふのではありません、今日まで自分が實踐した處が斯うであると云ふ事だけをお話するに止まるので御座いますから、其邊を御混同の無いやうに願ひます、

次に私の嫌ひなものは何であるかと云ふことに就ては、この以前もチヨットお話をした事がありますが、何が嫌ひと云つて、

芝居の見物位嫌ひ

なものはありません、その所作等は暫らく置き、天井や四方に窓や換氣口があるにしても、兎に角多勢の人々が集まつて居るので、その人々が吐いた息は、迚も四方の窓や天井の息拔位では十分に之を清くする事は出來ないのでありますから、私などは直ぐにその炭素の爲に頭は痛んで來る、胸は嘔吐て來る、氣分は遠くなるといふ工合で、迚も見物して居られません、それに始から終まで狹い處に坐つた限りですから尙更堪りません、それ故に私は之を嫌ふのでありますが、併し時々慈善演劇などの塲合には、その切符だけは受けまして、他に芝居の好きな方に行つて戴くやうにして居ります、と云ふものは、折角切符を買ひましても、其儘に反古にした處が能事の無いのみか、握り潰して居ても詮の無い事でありますから、それより芝居の好きな方に呈れば、啻に其人が喜ぶばかりで無く、それを催した方々の主旨にも叶ふことゝ思ひますので、左様いたして居ります、

夫も是も自分が嫌ひだからとて、何も人様の嗜好までを妨げるには及ばない事であると思ふからであります、併し年齒の往かない子女に芝居見物を爲せると云ふ事だけは、子女の敎育上大いに考へねばならぬ事と存じます、私は是まで此事に就ては絶對に見物させないと云ふ主義を取つて居りますが、是とて敢て他に强いやうといふのではありません、

處女時代の處世法

岡田勢津子

世の中の事といふものは、何に限らず左様良い事ばかりは無いもので、謂ゆる一利あれば一害あり、喩へば、一枚の白紙でも裏あり表ありで、如何も思ふやうには行かないものであります、それ故に、まづ其中で害の少なくして利の多いものを取るといふやうに致さねばなりませぬ、と云ふのは、例へば、衣類で見ても、一時パツト人の目に立つ程の美しい

ものは、まだ夫程年數も經たないのに早く傷み、又色合によりては褪め易く、地質の傷むことも格別であります、茶や鼠がゝつたものは美麗ではありますが、何うも爲に宜しくありません、と申したからとても、年若な人の如何にも昔めいたのも面白くはありませんが、餘り流行を追ふのも不爲であります、のみならず、その人品の程も推しはかられて奥ゆかしくないものであります、



當時は幾らか下火になつたやうでありますが、尚ほ世の中の或一部には白粉を禁ぜよとか、頭髪は油なしの束髪に結ふが良いと云ふやうな聲が聞こえるやうでありますが、これは餘り極端な説では御座いますまいか、もしも左様で無いとすれば、斯くの如き説を爲す人は、遂に顔も洗はないでも宜いといふやうに爲らうと思はれますが、それでは娘盛りの美を

競ふ時期に、蓬々とした髮をして、垢だらけの顔は如何なるものでありませうか、斯うなると何れ首や顔の掃除も行屆かない上に、襟の邊に垢の溜つて居るものも厭はぬやうになるのは勢の止むを得ない事であります、古への人は、

首面よろしく掃除すべし

と教へられたのみならず、尙ほ之を說き砕いて、顔を洗ふは心を淸らかにせんが爲なり、髮を梳るは心の理らんことを欲するが爲なり、白粉を塗くるは心の和らぐを思ふが爲なりと、かくまで親切に說かれてあります、實にその通りで、やがて外部を掃除するのは內部を掃除する種となるのであります、

我國の婦人と西洋の婦人とを比べますと、西洋人は一體に色が白く、我國の者は一般に黑い、それでも西洋人は白粉を塗るといふ事である、されば我國の女子も、學生の時代は兎も角として、普通一般の婦人が之を塗る事は左まで止めるにも及ぶまいと存じます、尤も私こそ白粉を塗けて居りますといふやうに濃厚と粧ふたのは褒められません、又西洋婦人が髮に油を附けないからとて、あながち日本婦人も其眞似をする方が良いと思つて束髮にせよなどゝ云ふけれども、彼方の婦人は帽子を冠るから油が着くと汚れるから、自然束髮のやうな者に爲つたのであらうが、併し絕對に油を用ゐないといふのではありません、矢張香油といふものを着けるので御座います、而して婦人の帽子には種々の裝飾があるから、何の仔細はないが、日本の女子は、

頭髮そのものが飾り

となつて居るので、全く彼方とは趣を異にして居るのであります、假りに束髮にして油を附けないとして、其上に帽子を冠つて、下が日本服では如何なものでありませうか、何うもポンチ繪にでもありさうに思はれます、尤も是までのやうに餘りコテ〳〵と油を塗けるといふ事は、頭や髮の衞生の爲にも宜しくないので、是は少しく改めねばならぬと存じますが、全きり油を塗けないでは日本風の頭髮は纏らな

いので、是非油を用ゐて後れ毛や散り毛の仕末をするやうに爲なければなりません、もし又何處までも西洋風に仕た方が宜いといふならば、第一家屋の構造から仕替へなければ爲るまいと思ふが、金のある方は出來るとしても、迚も我國に於ける富の程度では、それは言ふべくして、

一般に實行は出來ない相談と云はねばなりません、凡て何事も餘り飛び離れた上の方や、又餘り下つた低い方の事を標準として論ずる事は出來ないもので、先づ其中邊を取つて標的を建てなければならないものであらうと存じます、若し之が誤つて居ないとすれば、日本今日の有樣ではまだ〳〵夫は爲し得られるものでは無い、強て之を爲し遂げやうとすれば、必ず弊害百出は免れないのであります、

例へば、衛生に就て見れば、西洋人は肉食をするから強いのみならず、根氣も良いといふので、誰も彼も酷工面までもして、やれ牛肉の玉子の牛乳のと、無暗に洋食熱に狂して了つて、野菜は纖維があるから不消化だの、イヤ滋養分は無いのと輕蔑して、野菜を食する者は牛か馬のやうに罵つたのであるが、その唇のまだ乾かない中に、豆には滋養分があるの、大根は消化を助けるのと云ふやうな風で、是から先き尚だ如何變化するか分らないのであります、

一體世の先輩たる方が、昔と違つて開けた學問を爲さり、或は實地彼所へ往かれて面り實見せられた處を、輙もすれば歸朝の後、直ぐにも之を我國に應用しやうと試みられる所から、或は筆に或は口に喋々喃々と唱導せらるゝのみならず、御自身で之を實行せらるゝ方があると、人といふ者は珍らしい物好きなものでありますから、彼の方の言ふ事だもの、彼の方の實行せらるゝ事だもの、よもや惡い事はあるまいといふやうに早呑込みをして、善惡を問はずして之に雷同するので、前陳のやうな矛盾を來たすのではありますまいかと、私は窃かに憂ふるので御座います、

固より私とて何處までも舊弊を頑守しやうと云ふのではありませんが、極小さい考が、雪の降る國と降らない國と、田畑の多い土地と少ない土地と、海濱に沿ふた場所と山間と、斯やうに比較して見ましたならば、同じ我内地の中でも自ら衣食住に相違の點が無くてはなるまいと存じます、それも金持は知らぬ事、まづ中產の者が金持の眞似をして、山間に居りながら毎日海の魚を食膳に上せ、水呑百姓に毛の生えた身上の者が多額納稅議員ともなるべき資格を有する大百姓の暮しの眞似をしたりすれば、忽ち我身代を潰して了ふのであります、

誰しも不味いものは厭で、綺麗な衣服を着たいといふのは普通の人情であるが、蟹は甲良に似せて穴を穿るといふ諺の如く、人々その分に安んじて無理をしないやうに爲なければなりませぬ、

よく此頃の新聞には、毎日のやうに青年の男女が大切の父母の遺體を傷ひ、或は損する者がありますか、よく〱その大根を尋ねて見ますると、衣食住

等を外にして、或一種の方面に向つて無理を仕過ぎた者のみのやうに思はれます、言ひ換へますれば、畢竟情のために捕虜となつたのであります、それといふも自信力が薄弱で、世の誘惑に打勝つことが出來ない結果に外ならぬとは云ふもの丶、寧ろ自ら理性を晦まして文字の爲に讀まれるからであります、元來文字は一種の符號に過ぎないのであるにも關はらず、それに自分が吊り込まれるとは實に情けない話ではありますまいか、

世間の人が金錢の事を云つては卑しいと申しますが、之が無かつたならば忽ち我等は生計を營む事が出來ません、のみならず、その出納を記すに當りては、必ず何千何百何十圓といふ風に符號を記さなければならないのであります、たとひ此に何萬圓といふ風に書いてありても、左まで人は心を動かすものではありませんが、それが肉とか慾とかいふ字になると、直ちに心を動かすとは如何なる理由に基づくのでありませうか、結果自己に確固たる信念が無い

からであらうと考へられます、靑年は復び來らずと古人も言はれました如く、實に靑年時代は大切なる修養時期でありますから、文字に誤られないやうに心掛けねばなりません、

磯めぐり

石榑千亦

指を僂ぐれば今ははや五つとせの昔とはなりぬるが、この程ゆくりなくも篋底を探りければ、日こそ違へ月を同うするものから、そのかみを偲びて寄することゝはなしぬ、

總の國海上の磯めぐりして來むと、兩國停車塲に來りしは、月は八月、日は十四日の朝なりき、師の君は雪子の君、文綱の君、綱子の君三人を伴なひませり、この他には横山の君と三浦の君となりしを、三浦の君は障る事ありて後よりとぞ、

稻田の風馳せゆく汽車を追ひて開け放したる窓を訪づれ、心地いはむ方なくすが／＼しきに、龜井戸過ぎ小岩井ゆき、市川來り、中山迎ふ、行くと來るとます／＼興の湧くに、暑さゝへ忘れはてにけり、

津田沼なりけむ、がや／＼と姦しく囀り入來る女一人ならず三人までなるに、先づ暑ぐるしさを覺えぬ、入るやがてそこら睨めまはし、乘れる人の手荷物片付けよがしに、狹や／＼と顧みいふなり、膝ゆづろひ席を與ふれば、それには會釋もせずに寛ぎすはり、荒々しう扇子づかひする、見るから憎げなり、女らしうやさしう作られたる扇子、散らしたる金砂子も爲に剝げ、白とはぎあはせたるその紺背の色さへあせぬべき不幸をかこち、鬼をひしぐ丈夫もかばかりむごうは扱ふまじ、骨も肉もはなるゝ苦しみを物とも思はざらんに、かゝる人の手とならむ人よ、いかなる憂目にかあふべきなどかこちぞすらむ、

暑くるしくぬりたる白きもの、あまり黒からぬ縮れたる髪に映えたり、年には似合しからぬ花の簪、これは都の流行なりとぞ、さても今日を晴と卷上げ

たる髪に濡れるは、何の油にかわゝらむ、鳥なき里の蝙蝠傘はあせたる絲の地色に草花のはで〳〵しきをぬひとりたり、嫁きの折のねだり物にやあらむ、房つけたる帯揚げの端ふさ〳〵とおしたれ、透綾の衣の袖、これ見よとか絶えず回はし振るよ、さてもそのもたる絹糸の袋の中には何物か潜むらむ、知らず佛か、そも〳〵また鬼か、

こゝにわれ等はひそかに議りて、尊號奉らむと誰なりしかのいひ出したる、

村夫人

と稱へいはむといふ、あまりに新熟語ならずやといふに、村夫子といふこともあれば、その對語にとて爭ひもやみにしなりけり、

稲毛にて去りぬ、海氣館わたりいかなる祟かおこらむと恐し、さるにても一汽車おくれし三浦の君は、かねてこの災をや知り居られけむと、俄に羨しうなりぬるもおかし、

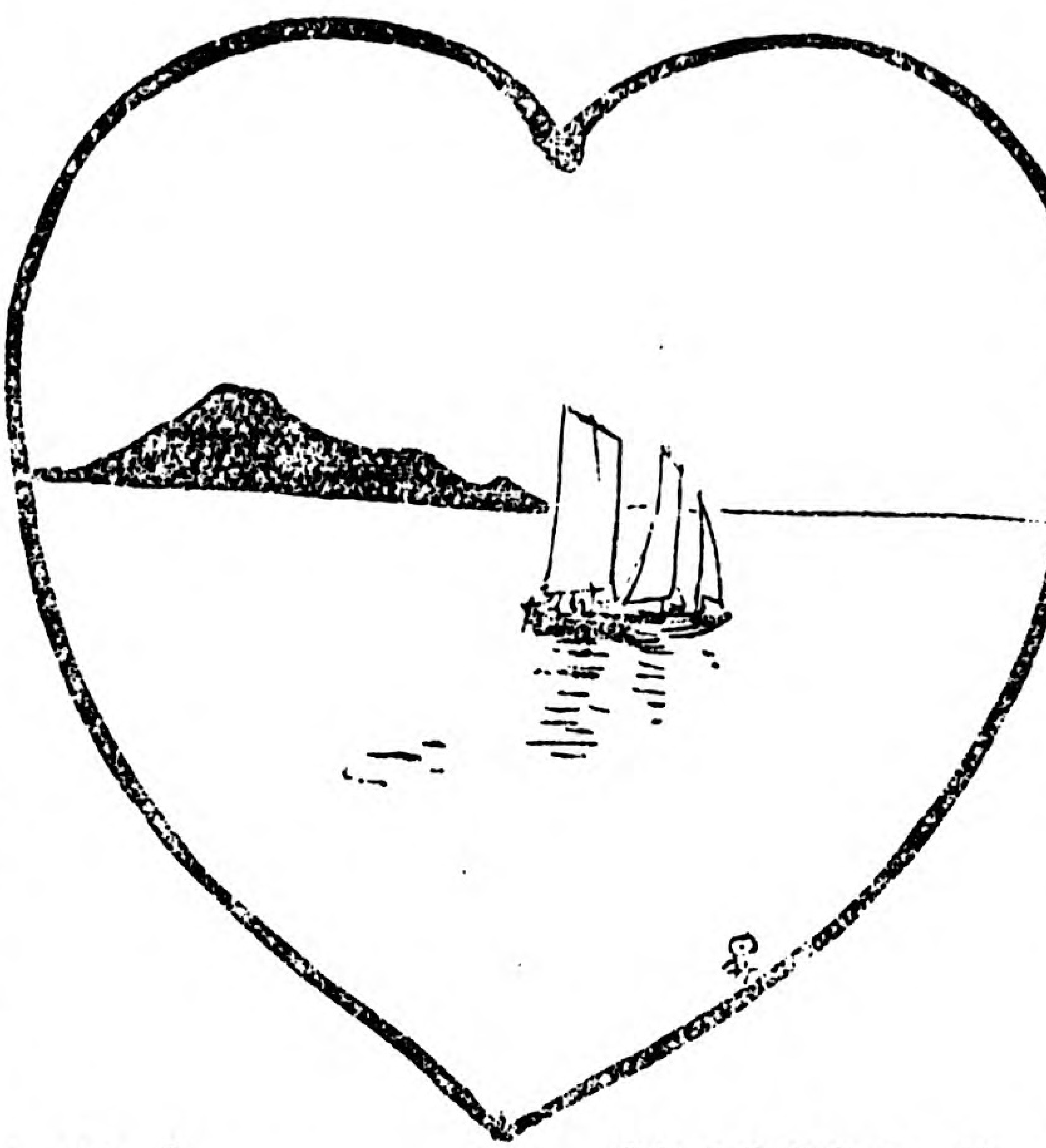
枝を連ねて生たてる椰の二本、塵の浮世の外にたちて、風はふくとも雨はふるとも、その二葉を合せなむか、いかに強き手力男も、引破りえぬが如く、二本ならびたゝば、いかに烈しき雨風の力も何條ことかあらむと、其陰立ならす人々の、常に談ふ事なりき、

幾年か早く生出し一本は、まことに然くさかえて、何の災もなくて、久方の空蔽ふまでになりにけり、さるを園の中より分たれて、巽庭に移されし一本よ、いかなる隙かありけむ、枝葉の茂もとの如くならぬを、いたく口をしきことに思ひわづらふなる、

朝な夕な清き汀に打よする波の如く、いつも〳〵新しき濁なき雨にあはゞ、自からその養ひとなりて、本の如くいや増にさかえなむと、數多の年を安房國なる鏡の浦に移されしを、去年の春もとの庭に復りて、事なくて一夏一秋を過ぎ、この冬は暖かなる山懐になどいひおきてたりしを、世は鮮き風雨にとさされて思ひに任せざりき、梅雨の頃より暑さ烈しく、火焔の中にあるが如くなりしに、つゝみありとて俄

に小田原の濱邊もとめて、今日の今頃しも汽車にてものせられむとぞ、小田原なる山祇海神の靈よ、希くばこのたゞ二本の一本なる若き梛をしも、わが子わが孫神かしづかむやうに、清き暖き息徐にふきかけ生したゝしめ、もとつ園なる一本の梛の樹と榮えを爭はしめ給へ、それしもなほ得ずとならば、永久に今よりもあしうなし給ひそなど、繰返し〳〵思へば、汽車の中物靜かに八街わたり軋りゆく車の音のみぞ耳にひゞく、松林、萩生など、木草のよきほどに植えられたる





庭を見こして、浩々と夜晝をわかたぬ大刀根の河、帆舟棹舟の上り下り、川口に起伏す岩も碎けとよせかへるは波濤、さては川をちなる常陸の波崎、自からこれ畫、人もし他所より眺めなむには、われら亦、畫の中の人なるべし海の上の涼しさを集めて、河の水に潮けを洗ひ、清めに清めて、惜しげもなく樓上に運ぶ風の心地よさ、稻田ふきしもなほこゝのには劣れりけり、まして都の眞晝時よいかならむ、納むれば嚢と送らむ、車にてもわ

らば殘れる友にわかたましなどいひあふ、

浴をへて坐に復へれば、江に釣りし鱸の洗ひ、鰕のふらい、氷よりつめたく冷えたる麥酒、四時間半の汽車の疲勞、いづこにか去りて跡なし、

佐倉わたりより、今幾つ停車場わらば銚子ぞ、今何時間たゝばと、頻りに問はれし文綱の君、膝を枕にしての夢よりさめ、飯岡、猿田わたりにては、やゝ飽きの色を面に見せて、母君こまらせられし綱子の君も、まづ來ませりし兄君に迎へられ、俄かに勇ましうけなげになり、列よく並べて、箸とりたまへり、

藤島夫人來ませり、三浦の君遂に來まさずなりぬ、

川より海より、さては町の端々より目じるしとなれる飯沼山觀世音は、自からこゝの公園となりて、銚子、本銚子、西銚子の人々が、子等をゐての杖曳ところとぞなりける、さては氷店、植木店をはじめ、物賣る店軒を連ねて賑はし、赤く塗りたる堂、稍形は異なれど、塔のある所、かの淺草の小さきをこゝに見るなり鬼、建なをさんとて竹矢來結ひ、石するたる、佛の勢はしも、時の如何にも關らはざるらむ、

庭を後に出づれば田中玄番氏の醬油釀造場の前に出だたり、いはゆるひげ田醬油をつくらむ樣見ておかむと賴めば、藏に導かれぬ、二百幾つと數ふべき五十石入の大桶、大きなる箍と箍とすれあふ斗、列よく並べて、幾筋にもなれる中を眞直に一筋の道とほれり、何れの藏も〳〵皆同じやうなる中に、この桶よりも一まはり大きなる桶の地に埋められたる藏あり、この藏には必ずしめ場も伴なひて、寂かなる中に、點々と滴り落つる醬油の響をきく、その他の藏は室屋になれり、八千石つくり出づべき麹の蒸さるゝ所なるべし、

麥豆のさばかり多くなり出る地にもあらず、鹽のつくらるゝ地にもあらず、このひげ田をはじめ、山サ、山ナなど、名にきこえし醬油所となりけむは、全く暑さ寒さをとゝのふるかの黑潮の賜ものなるべし、犬吠の岬をめぐりて洋の下くゞりゆく、隱れた

る大きなる恩人にむかひて、あまた度頷づくべき也、薄ぐらき楯の間を縫ひて出づれば、木石に數寄を凝らしゝ庭あり、目うつりのよきに、しばし四阿の椅子に身を寄せぬ、

こゝを出でゝ藤島の君の假住居おどろかしぬ、黍蜀黍の垣なせる中に、白瓜黄瓜などの造物のやうに轉がりたる畑あり、その幾畝町かを過ぎて、曲れば同じやうなる畑の中に、簾垂れたる一棟あり、何となく芝居めきたらずやなど談らひつゝ入る、川も見るべく、森も見るべき小高き地、川より來り森より來る風は、常に夏を掠め去りて、颯々たる秋の聲に、かの松虫鈴虫のしらず〳〵音をや立てつらむ、瀧壺に盥うかべし眞晝時も、この綠の蔭にあらば、遂に夏を知らざるべきを、夕風だちては瀧水浴びむもとて、犬の走せゆく後めぐれば、都にあらば一本にても物珍らしからむ松、所せきまで立ならびて、高くなり低くなれる岡の上を、とさまかうさまゆき〳〵つゝ、めぐりて本の庭に出でぬ、さすがは野田氏の別墅なりなど感じいひつゝ辭して門を出でゝ、田中の小道にて、師の君横山の君と三人、濱へと志して右へ、藤島の君、雪子の君、御子たちは、かの芝居めきたる家へと志して左へ別れ去る、われらは稲田を漸う低き〳〵方へ、かなたには松林を漸う高き〳〵方へゆく、夕靄につゝまれはてゝ水のみひとり遠白きに、月のほのかなる影に、月もて追ゆきしかなたの影はやう〳〵薄くなり、暗くなりて、遂に一かたまりの黑き森の影をとゞむる頃、蚊遣の町に出でぬ、

屋の上に貝殻のせたる磯町は、昔ゆかしき明日の星祭にとて、新竹屋並に立てはやし、五色の短冊形にきりたるをつけたり、中には時の心にかられて、國々の旗などかけたるもありけり、星に捧ぐる眞ごゝろをさきて、御國の勝をよろこぶ人のすさびなるべし、

薪をかもちて來にけむ、野菜をかもちて來にけむ背に負籠の空しきを負ひて、空車ひきたる男と、聲

高にかたらひつゝゆく少女、手には眞桑瓜のむきたるもちて、話のひまひまを口にしつゝ步むなり、荷は賣り盡しつ、肩は輕くなりつ、もて來し物の價の幾らかを割きて、かひ得つるこの瓜よ、かの口には江の鱸も及ばず、麥酒も及ばぬなるべし、

化粧せぬは婦人の恥なり

馬塲武夫

犬や猫などゝいふ動物は別に化粧をするといふ事は無く、たゞ生れたまゝの毛皮であるが、それでも多少彼等の心裡といふも可笑しいけれども、その心裡に美を愛するといふ觀念のあるものと見え、彼等が交尾期になると、俗に毛嫌ひと云つて、自分の好かない雄牡には靡かない、是等の動物を去ること餘り程遠からぬ野蠻蒙昧の民は如何であるかといふに

最早それらになるとズット動物よりは立越えて、決して生れたまゝでは無い、固より我々の眼からは殆んど半文錢の價値の無いもので、或意味からは迚も化粧の名稱を下す事は出來ないのであるが、それでもそれぞれに兎に角化粧を施して居る、

之に依つて見る時は、人類が化粧をする、別言すれば

美を愛するは先天的の性情に因るもので、又尤も高尙なる德性であつて殊に婦人に於ては貞操と慈愛と並びて重要なるものである、この心即ち修容の美德といふものは、人格を高雅に進むる處の性能を有して居るものであるから、之を等閑に附し去るといふ事は婦人の尤も愼しむべき事である、

それにも拘はらず、世間は往々之を誤解して、修容即ち化粧は無益徒勞の事のやうに思ひ、鏡に向ふ少女を見ては惡樣に罵るのである、會て一時世間を賑はし、今尙ほ其說を把持して居る者の尠なからざ

る、女學生白粉禁止問題の如きは、慥かに此誤解から來たものであると考へる、

頭髪を梳つたり、紅粉を裝ふたりすれば、直ちにそれを以てお洒落だとか、又はオメカシだとか云ふて、一に花柳社會の專有物の惡風かのやうに云ふものがあるが、それは大なる間違である、何も古い事を持出す迄も無く、又何うしても其古い習慣を保守して行かうと云ふ了簡では無いが、たとひ古い事でも良い事は保存して置くの必要があらうと思ふ、我國でも昔時は、宮中の女官達が紅や白粉を用ゐないのは、謂ゆる弔祭凶禮の時に限るとしてある、常には決して之を忽にする事は許されなかつた、又支那などでも殊に此一事を重く云ひなし、歐米では正式の宴會を初め、招請訪問などに至るまでも、必ず華やかに飾り立てゝ行くのが禮としてある、それで主人側の方でも

殊更に化粧室まで設備して置いて、客の修容に供へて居る、かく修容の美風といふものは古今東西共に其揆を同うして居る事は解かる、

人類には斯く先天的に修容の美德といふものが賦與せられてあるにも拘はらず、之を忽緒に附して外貌を修めない時には、成長の後必ず不檢束の習癖を有するので、その顏容は無精らしく、その衣服はだらし無く、その家庭は不整頓で見るに堪へざる不體裁を極むるやうになる、西洋の諺にも、美麗を尊み四肢鼻口を清潔にして、清淨なる衣服を着け、頭髪をよく理めたる少年少女は、後來美麗なる家屋に住し、精巧なる珍寶を以て其身を纏ふ運命を有す、といふ事がある、是はさもあるべき事である、

然るに近時女學生風と稱へて、行燈袴は至極結構だが、聊か男學生にかぶれて磊落を衒ひ無頓着を粧ふ者がある、之は嘆はしい事で、夫等の輩は頭髪も理めず、衣服も殊更に垢附きたるを自慢として、實に亂暴極まる風を敢て爲て居る者がある、實に以ての外の了簡違ひで、よく〳〵顧みれば已の放逸無慚

をさらけ出すは勿論、人に對して無禮であらう、一體女子として趣味も無く慚る色の無いといふのは是に越したる暴戻はあるまいかと思ふ、こんな事で如何して將來母となり、將又主婦となつて美しき家庭を形造つて行く事が出來ませう、實に氣遣はしき次第と言はねばならぬ、

尊者の前には襟を正すといふ事がある、その襟を正すといふ事は取も直さず身繕ひして容儀を整ふる事で、之に依つて先方を敬するの意を表するのである、然るに將來の主婦となり母となるべき、而かも現在にありては最も高潔で淸秀であるべき女學生の身でありながら、蓬ぎのやうな髪をして、垢染みた着物で耻ぢもせず、平然どころではない、昂然として講堂に入るといふは、啻に教師に對して無禮なばかりでは無く、學校までを侮辱するもので、實に言語同斷の沙汰と言はざるを得ない、

此く云へばとて、予は徒らに厚化粧をせよと勸むるのでは無い、又おメカシなさいといふのでも無い

物には程度といふものゝあるもので、修容に付いても自ら其程度に注意して、

その精神を失はぬやうにして貰ひたい、動もすれば此修容といふ事を小楯に取つて、お洒落に流れオメカシを専らにする者が無いにも限らぬから、學校や家庭では宜しく其程度を考へて監督を怠らぬやうに在りたきことである、併し此程度といふ事は六ケ敷いと云へば言ふものゝ、また左のみ困難なものでは無い、私の考ふる所を述べて見れば、大凡左の三件に重きを措けば差支無からうと考へる、即ち

一、淸潔を主とすること、

二、驕奢に流れざること、

三、高潔温雅なるべき事、

まづ此三點を忘れないやうにさへすれば決して他より後指を指され、又は輕侮さるゝやうな事は無い、けれども無暗に修容の化粧のといふ美名の下に、野卑なる或一部の惡趣味を傳播したり、又は華奢贅澤

の風を作るのは宜しく無い、殊に夫が爲に時間を徒費するなどは斷じて避けなければならぬ、

凡て化粧するにしても、強ち古風を守るにも及ばず、又餘りに新奇を衒ふのも宜しくない、多少は時の風をも斟酌して

餘り極端に趨らぬが宜い

然るに世間には、昔氣質の婦人は昔を尊び、當世の若い婦人は殊更に新奇を喜ぶといふ風で、孰方も片意地の仕方で中正とは言はれぬ、

時物の變遷といふものは自然の趨勢で、この變遷といふ事は、換言すれば活動といふ事であつて、恰かも春の次には夏が來り、秋が過ぎれば冬となる、而してまた一陽來復して春となるやうなものであるから、少しは時流も趁はねばならぬが、それに頭を突込んで動きの取れないやうな事ではならぬ、流行といへば即ち移り變りであるが、變遷とて全く日本服が洋服に爲るといふのでも無ければ、洋服に島田髷を結ふといふやうに變るのでは無い、歷史は繰返すと云はるゝが如く、流行もまた繰返さるゝもので當時は少しく廢つたが、明治の今日に元祿模樣が流行し出すかと思へば、次には桃山風が流行するといふやうに繰返さるゝのである、而して其流行なるものは誰が爲せるのかと手許へ切込んで見ると、誰でも無い、即ち各自の心である、その各自の心から割出した流行なるものに自分が自分で頭を突込んで自由の取れないやうにして居るものが鮮なく無い、

その時流を趁ふのも強ち惡いとは云はぬ、けれども餘りに突飛な非淑女的のものがある、之は予が甚だ左袒する事が出來ない、是も一面から云へば修容であり化粧であるだらうが、予の謂ゆる化粧なり修容なるものは人格を高潔にするの程度に於て施すべき事を望むので、それさへも行はぬは婦人の恥づべき第一であるといふのである、

夫婦らしからぬ夫婦

田邊徹

夫婦らしからぬ夫婦とは甚だ異な標題であるが、隨分廣い世界の中には色々な夫婦がある、例へば主人と家來らしき夫婦、他人らしき夫婦、兄弟らしき夫婦、親子らしき夫婦、その他まだ澤山ある、そこで此夫婦らしからぬ夫婦といふのは其中の一つであつて、別に細説するまでも無く、側から見て夫婦らしくもあるが、又夫婦らしく無い所もある、それかと云つて、夫婦で無いかと云へば立派な夫婦であるといふ、實に吾人の常識を以て判斷し得られざる、尤も此標題に適切なる事實がある、幵は英國近代の大文豪カーライル氏夫妻の生涯こそ、眞に之を説明して餘りあるのである、

文人が初戀に失敗した話は少なくないが、カーライルも亦その一例に漏れないのである、氏は一千八百十六年、その齡二十二歳の時にカークカルヂーの

文典學校で教師を勤めた居た折、圖らずもマーガレツト、コルドン孃といふ美なる一少女を見初めた、其後二人の交情は蜜の如くであつたが、しかし好事魔多しとでも言はうか、此に忽ち思ひ設けぬ故障が起つた、それは孃の叔母が如何しても許婚をしては爲らぬと孃に命じた一事で、之が爲に二人の間は其局を全うせずに裂かれて了つた、最も此孃はカーライルが、後年その著サルトル、レザルタスといふ書物の中に美人でもあり、才氣もあり、眞面目でもあるが、併し陰氣な變心し易い乙女として描いたブリユーマインの本體である、即ち篇中に、

ブリユーマインは、有らゆる女並に乙女の中にありて他に異なりて見えき、その程の好さは地上の光りの中に星の存するが如く、最も氣高き乙女である、男は一朝その晨の星の薄れ行き、且つ暗赤色となれるを見き、女は聲を震はせて言ひぬ、二人は此後遂に復相見ることなかるべし、

と云つたのは、その當時の光景を想起して書いたの

であらう、いよ〳〵二人の間が手切れと爲つた時、孃からカーライルに贈つた告別狀がある、それには君の才幹は時節到來と共に世間に知らるゝ日があらう、天才は君を豪い人に爲るに違ひ無らうけれども尚其心を優しくして、温和な氣風を養ふやうにしたまへかしとの忠告があつて、斯ういふ文句が聯ねられてある、

善德は君をして敬愛せらるべき御方樣となし候やう相成り申し候はん、されば親切温順なる擧動に依りて、君と常人との間の甚だしき懸隔を御排除相成り候やう念じ上げ參らせ候、



と云ふのである、却々適切な忠告である

その後二十年の星霜を經てから、カーライルは不圖倫敦なるハイト公園で前のマーガレット孃現時は加奈陀のノーヴアスコシア州の知事バンナーマン夫人に邂逅して、互に深く言葉こそ交さざれ、夫人の眼には矢張當初のトーマス其儘だと映じたに違ひ

ない、

千八百二十一年、カーライルが二十七歳の六月、友人エドワード、アーヴイングの紹介で、是より二年前に世を去つたウエルシユ醫學博士の息女、ウエルシユ孃といふ其頃二十一歳の淑女の教師と爲つたこのウエルシユ孃こそ後年カーライルの妻となつたので、其初はアーヴイングに師事し、後には其情人と爲つたのである、實に若い男女に注意が肝腎だとは此事である、そは兎も角、ア氏とカ氏との因緣は亦誠に淺からずであつた、ウエルシユ孃はカーライルの妻と爲つて後、アーヴイングの事を思ひ起して述懐した事がある、

妾もし彼の御方樣と結婚いたし候ひつらんには、斯く罵り叱り候聲は、必ず聞かで相濟み候ことゝ存じ參らせ候ものを、

と、生憎ア氏は最早他の孃と結婚したので、ウエルシユ孃は俄かに秋の扇と打捨てられたのである、其所へカーライル氏が來て、頻に獨逸文學の研究を勵

まして居た失戀同士の間柄ゆゑ、當分は何方も陰欝で、過去の記臆と悲痛とを忘れやうとして居たのと何方も一たび踏んで見た途の山なり、川なりで存外容易無く、又平坦で無いのを心に覺えて居るから、再び其道を辿らうといふ考は暫らく出なかつたのとで、二人の間は無事であつたが、その間に春も立ち秋も暮れ、やがて一千八百二十三年を迎へ、カーライルの齡二十九歳、ウエルシユ孃が二十三歳と爲つた時、孃から左の如き書束をカーライルに贈つた、

妾は君を愛し參らせ候、あらゆる妾の心の中にて最善の感情は君を愛し參らする一事に籠り居り申し候、然はあれど君にして若し妾の兄君に渡らせられ候はんには、妾は君を兄弟同樣に愛しまゐらせ度存じ居り參らせ候へども……君の妻……決して〳〵左樣には御座なく候、

と、之に對するカーライルの返書は、

御身は一人の妹の格にて此身を愛し下され候も、結婚は成させられず候由、此身も愛といふ言葉の

あらゆる意味を盡し申し候て御身を愛すべく、且又御身よりも、此身はいよ〳〵増して結婚致し申さざる考に候。

と云ふのであるが、抑も男女が相愛して居て結婚せぬと云ふ誓紙も可笑いが、其誓紙の反古紙とならなかつた例は滅多に無い事で、果して三年の後二人の間には婚約が成立つて、其年の十月十七日に芽出度華燭の典を擧げたのである、此時カーライルは三十二歲、ウエルシユ孃は二十六歲であつた、

此に最も奇なる事には、二人共大の恐婚病者であつたので、それはカーライルが二十八歲の時に斯ういふ書面を友人に贈つた、

是等天才を有し候女性は、之を導くに其法を誤り候へば最も恐るべき者に御座候、小生もし結婚致し候やうなる場合到來候へば、小生の內助者と致し候て斯る女性の一人を得度ものと存じ居り候、尤も然る場合には小生等の生涯は、地上に在りては極めて不安不恰當なるものと相成り……蜂蜜と苦蓬と、最上の怡樂と最上の痛苦を併せ到り候ことに之あるべく、一時は青天白日を仰ぎ候やうなる好天氣に遇ひ候かと思ひ候へば、又忽ち烈風霜雪に和し到り候て、電掣雷擊と共に恐るべき暴風雨を以て相續ぎ候やう……都て同季節に悉く之を混淆しまゐり候て……晴天を見候日は常に最も少なかるべきやう相成り候事と存じ居り候、

と、その恐婚の狀恰も掌を指すが如し、而してウエルシユ孃は未だカ氏に嫁かざる以前、その女友達が結婚期が近いたと聞き、急ぎ左の如き書を寄せたのである、卽ち

御許樣には近々御結婚遊ばされ候由御知らせ下され、妾はたゞ〳〵驚愕の聲を放ち候外これ無く候此く申し上げ候へば、御許樣には妾を心狂へるものと思召遊ばされ候はんも存じ申さず候へども、御許樣の行衞も定かならぬ空中に御身を踊らせられ候て、ひた投げに投げさせられ候やうなる御振舞を拜見いたし候ては、胸も潰るゝ思之あり候事

是非も無き次第にて、斯る場合に御壽き申し上げ候は、妾には却つて天意の誘惑を受け候やう存じ參らせ候、是まで妾の承知いたし候處にては、初て結婚いたし候節……其戰の始まり候前に、爾ちの神になり讃歌相唱へ候て……凱旋の鹵獲の如き風をいたし候こと今日の習慣に候へども、此事たるや、妾には稍無意味、稍神を褻瀆いたし候事の如く存ぜられ候（中略）慥に結婚は二個の人間の死するまでは、善惡共に相互に羈束いたし候事と覺らる可く候、

と、斯くも未婚の當時に於ては極端なる恐婚病者が、出雲の神の引合せとは云ひながら、結婚するに至つたといふのが、抑もの不思議である、

斯る恐婚者の寄合があるから、いよ〳〵結婚といふ場合に其恐怖が實境となつて來た時、之を恐るゝのは敢て異しむには當らないが、常人の眼には殆んど其理由が分らない位なものだ、カーライル夫妻も此場合に斷頭臺に上るやうな心地がしたものらしいが、頗る可笑い趣がある、ウェルシユ孃は嫁入支度をする時に、オー恐ろしい事だといふ、カーライルは心甚だ臆し、テンプラドン迄旅行をしやうと云ふ時、弟のジョンを伴れて花嫁の馬車に同乘したいと申し出た、その羞恥方といふものは一通りではないが、花嫁の書翰を以て斷然之を拒絕した、

妾の道の一寸もジョンと同行いたし候義は御斷り申し上げ參らせ候、

と、それは然かあるべきである、で、カーライルの心配は何は一層である、と云ふのは、それは花嫁が結婚の儀式を厭ひ、嘔吐を催すべき事だと言つたのである、之を甚しく氣に掛けて力を落して居たものゝ、倩考へた處が詮の無いことゝ思つたが、遂に斯う書いて花嫁に遣つた、

結局われらは此差迫り候儀式に付心を勞し候事多きに過ぐる義と信じ申し候、

如何にも其通り、誰が結婚の式場で嘔吐を催したものがあらう、飛だ餘計な心勞をしたものだ、カーラ

イルは是でも尚ほ心中の煩悶を排することが出來ないものか、心を落付けるには煙草の援を藉らなければならなかつたと見え、更に左の如く書いてある、
扨いよ／＼結婚のため旅行致し候道すがら、卷煙草三本相喫し候事だけは御許し成さる可く候、そは今回まさかの時に當り候て、此身の安心を得る爲に候、
恐婚も此に至つては、寧ろ滑稽と云はんよりは可憐である、併しながら相互にオツ／＼の中に結婚も濟んでから、新夫婦はエジンボローに新世帶を張つたのである、既に是だけでも餘程常人と異つて居るのだが、是よりは尚ほ一層常軌を逸して居る、その譯は次號に讓らう、

眞珠の話

高橋安次郎

大部近頃は寶石入りの半襟が流行するとか聞きましたが、その中には眞珠も縫ひ込まれるとかいふ事であるから、時節柄眞珠の御話を致しませう、

この眞珠といふものは昔はたゞ天然産のものゝみであつたが、晩近學術の進歩と共に人爲を以て之を養殖する事が行はれるやうに成つたのであるが、一體この眞珠は眞珠貝から出るのが通常であるけれども、時としては他の貝類の中からも得ることがあるそこで眞珠貝は何う云ふ風にして養殖せらるゝかと云へば、八十八夜から貝が漸次に大きくなつて、土用に入る前になると產卵期となり、貝は各〻石塊に附着するので、その着いた貝を見ると殆んど罌粟粒ぐらゐの大きさである、それが日を經るに隨つて粟粒大となり、小豆粒大といふ風に段々と成長するので、土用前に出來たものは秋口になると小指の爪位となり、十一月頃になると親指の爪位になるのであるから、云はば發達は非常に早い、さういふ風にして灣の奥に附いたものを、滿一ヶ年位經つた所で、一錢銅貨位になつた頃に少し深い所へ移して遣るの

であるが、水の深さは大抵三尋位なものです、之を移す時は初め一尋位の所に居るものを、干潮の時に拾ひ上げて、而して三尋位の所へ下して遣るので、それより滿二ヶ年位は其儘にして置くのです、さうすると約一寸五分位の大きさとなる、それから滿三ヶ年位も經つたらば、極潮の變りの良い、少し沖合へ出して置く、

前にチョット述べた天然の眞珠の我國で採れる所は肥前の小倉、土佐の高尾、能登の七尾、志摩の英虞灣、琉球などであるが、その中志摩は我國に於ける眞珠採集の一番始めであるのみならず、その數に於ても第一に位して居たやうである、爾來その種を諸國へ移したさうで、明治二十四年に、もと志摩の國の生れの御木本某なるものは廣島縣の嚴島邊へ移植して、今では大層繁殖して居るといふ事である、往時の英國人は之を粉末にして、諸病の良劑として用ゐたさうであるが、人智未開の時には何處も同じものと見えて、支那では之を眼病に特効があるとして重用したもので、從つた自國に其原料が無いので總て我國より之が供給を仰いたものだといふ事であるけれども、その中で性質の良いものは矢張裝飾に用ゐたもので、その他は凡て藥用としたもので、この藥用にするに就て、眼病は前述の如く勿論だが、それよりも支那人は斯ういふ迷想を懷いて居つたのである、それは眞珠を粉にして呑めば命が長くなると同時に顏の艶が出るその上に彼等が第一の嗜好物たる阿片を喫んでも、この眞珠の粉さへ少しづゝ用ゐて居れば、決して其害に罹ることが無い、その毒は消えてしまふといふ考を有つて居たのである、

我國でもまだ夫等の迷想は脱れないものと見えて東京の眞中に眞珠散、眼病の特効藥などいふ招牌が巾を利かして居るのを見受ける、それはサテ置き、是までの眞珠といふものは皆支那へ向つて賣出して居たのであるが、今より三十餘年ほど以前から、良い品は歐米へ向つて輸出せらるゝやうになつたのみ

ならず、今日では種々の裝飾用に供して、日本の勳章の中にも入るやうになり、剩へ夫人の半襟にまで着けるといふ事に立至つたのである、それ故に光りのある圓いものでさへあれば、必ず裝飾に用ゐられて居る、併し其中で何でも仕方のない六角や八角になつたものは、今でも支那へ行つて居る、であるからして、まづ今日の所では眞珠といふものは裝飾が九分となつて居る、それであるから其價の如きも、四十年前と今日では、五倍乃至六七倍も高くなつた居る、それと一つは貝殼を獨逸のハンブルクあたりへ釦の原料に輸出するし、又身の方は乾して支那へ輸り出す事になりまして、從つて眞珠を採るのは非常に宜い商賣だといふので大變に盛んになつて、日本の海は到る所で亂獲されたから明治十二三年頃までは、日本にも相當の産額があつたが、それが段々



無くなつて仕舞つて、その產額は極僅かなもので、今では日本國中の眞珠を集めて、一人の御木本某の養殖眞珠の仕事と匹敵する程ないといふ事です、全體眞珠は、ありさへすれば隨分日本の中でも使はれるので、敢て外國の金剛石を使はないでも濟むのださうであるけれども、何分亂獲の爲に使ふことが出來なくなつたといふ事である、元來ダイヤモンドの出來る國ではダイヤモンドを使ひ、眞珠の出來る國では眞珠を遣ふといふのが順當なので、我國でも寶冠章の如きは此眞珠を用ゐてあるが、日本では眞珠を造るといふ事が不十分であつた爲に、彼の御木本某なる者は、モト〱眞珠商人であつたものだが、明治二十三年、東京に博覽會があつた時に、箕作理學博士が審查官をして居られたので、御木本某は何角眞珠に付ての御說を聞いて、成程爾うかといふので、初めて眞珠の養殖を思ひついたのであるといふことです、何にいたせ國家の爲に慶ぶべき事である、

眞珠といふ珠は、貝には何にでもある、例へば、蛤でも、蜆でも、淺蜊でも、鮑でも、その他の貝類にも大抵はある、その代貝の色を受けて來る、即ち鮑の眞珠は鮑の色を受けて來る、それで本統の眞珠貝の眞珠で無ければ、あゝいふ立派な奇麗なものは出來ない、即ち一名あこや貝といふもので無ければ眞物ではない、その他の物はみな色が違つて居るから直ぐに分かる、眞珠の珠は、貝の口元の處に附いて居るものであるが、必ず一つの貝に一つあるといふ譯ではない、六ッ七つの貝の中で漸く一つ位しか有るものは無い、かくして五つ六の中から漸く一つを探し出して、辛うじて千個も集めた中で、眞に圓い、品質の良い者は僅かに三個乃至四個位しか無いのである、即ち八方に轉がるやうな圓いので無ければ價値の有るものでは無い、圓いやうでも曲りみがあつたり、凹みがあつたりして容易に眞圓いものは得らるゝもので無いから、その値段も從つて高

いのである、

面白き數學

奥平重吉

面白き數學と云つた所が、何んな高尚な難かしい問題でも、その土臺を洗つて見れば一と一とを寄せて二となり、二に三を加へて五となると云ふことを外れては出來ないのであるが、何うも數學の好きな方といふ者は少ないもので、何處の學校でも試驗の成蹟を見ると、一般に數學の點數が低いといふ事であるが、それは一つは維新以前、謂ゆる町人今で云へば實業家を除くの外、大抵は十露盤を手にすることは卑しい事として排斥した、殊に武士以上になると、物の勘定の出來ないのが貴いとした遺習の爲であらうといふやうな說もある、或は左樣かも知れない、それは放置き、上中下を通じて必らず一家の臺所に備へ附けてあるもので、また無くてならぬ物であるが、サテ其大きさは何の位か、深さは何れだけあるものか、それで幾ら程物が入るかといふ事を能く承知して居られないものがある、それは何物であらうか、諸孃が朝晝晩と三度に食しながら御飯の原料即ち米を容れる米櫃は其一つであらうと思ふ、尤も家族の多寡、貧富の程度等に依りて大小の差はあるけれども、大は大なり、小は小なりに、之は何升入り彼れは何斗入りかといふ事を尋ねられて、直ちに之に答へ得る方は幾人ありませうか、此く問はれて初めて臺所へ駈け付けらるゝ方が無いとも限らないが、駈け付けたとて夫で直ぐに解るものでは無い併し成程と合點せらるゝと同時に、

斯樣な所にも數學の問題はあつたものをと氣附かれるに相違ない、たとひ氣附いたからとて其方法を知らなければ解らない事は一つである、

然らば如何にして之を知ることが出來るかといふに、まづ其全體の大きさを測らなければならぬ、而

して尺度は曲尺を用うるのであるが、例へば、横幅が一尺八寸、縦が二尺五寸、深さが二尺といふ風に是はすべて內法と云つて、箱の外圍でなく、乃ち內側を測るのであるから、ツマリ箱の周圍の板の厚さを除いたもので、實際米粒の入る部分ばかりで、斯く寸法を計つたならば縱の二尺五寸と横の一尺八寸とを掛け合せると四百五十といふものになる、是は何と云ふ數かと云ふに、四百五十平方寸と云つて、米櫃の底の濶さの寸法が現はれたのでなる「時としては是を四平方尺五とも唱へる、之に深さの二尺を乘け合はすと九千平方寸といふ數を得る、之で米櫃總體の容積が出たのである、

サテ米櫃の總容積を出すことは出來たが、如何して此中に入る米が若干であるといふ事を知る事が得らるゝやと云ふに、其所が數學に面白みのある處で數學を知らないものは、實際米を量つて入れて見なければ知る事が出來ないけれども、數學では其樣な手數は要らぬ、と云つた所が、種の無い手品は出來ないと同じであつて、この算術だからとて其方法なしでは出來ないのである、それには古來より出來るやうに方法が傳はつて居る、その方法といふのは別に六づかしい事でない、

一升桝の容積

といふものが定められてある、即ち六萬四千八百二十七立方分といふ事で、是だけは平常暗んじて居なければならぬ、さうさへすれば造作も無いので、即ち此六萬四千八百二十七立方分で、先きに求めた數此では九千立方寸を分に引直して九萬立方分として之を前の數で割りさへすれば桝數が出る、即ち一石三斗八升八合餘といふ答を得るのである、それ故に今度は一斗入りの米櫃の大きさを割り出すには、前の算術の仕方を逆にして、終りに開立法で行るといふやうにすれば知られるのである、

事の序でに桝の寸法のお話をして置かう、よく昔の古い桝の裏には寸法が刻り附けてあつたものだが當今の物には無いから、學校で數學の時に習へば習

ふもの丶、その外には斯樣の事に注意を拂ふ方は澤山あるまいと思ふ、尤も度量衡ともに政府の極印の無いものは賣れない今の規則であるから、敢て其樣な事は檢べるの必要は無いやうなもの丶、之を覺えたからとて別に荷になる譯でも無いから覺えて置いたとて損には爲るまいと思ふ、のみならず何時如何なる必要に迫らる丶か分らない、乃で桝には幾種類もあるが、其寸法は左の如く一定して居る、

一斗桝　縁は一尺五分、深さ五寸九分一厘、

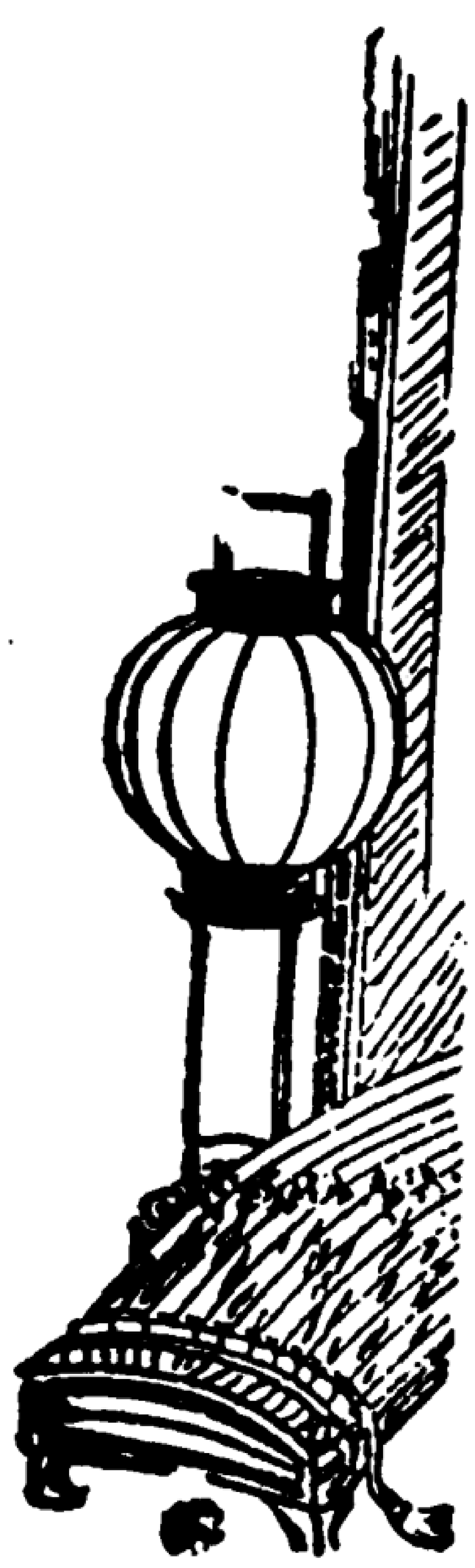
一升桝　縁は四寸九分、深さ二寸七分、

五合桝　縁は三寸八分八厘、深さ二寸一分五厘

一合桝　縁は二寸一分、深さ一寸四分五厘、

右の中一斗桝だけは上端に斜めに一本の斗梁といふものがあるから、外の割合にすると、それだけ少し大きい、併し數學上では一升桝を根本とするのであるから此事を忘れてはならぬ、前の六萬四千八百二十七立方分といふのも、實は一升桝の縱橫すなはち縁の四寸九分と四寸九分とを掛け合すれば二千四百一となる、之に深さの二寸七分を掛けると六萬四千八百二十七立方分となるのである、よく昔の塵劫記といふ算術の書を見ると、一升桝の中に入る米粒の數などの事もあるが、古人はよくも丹精して數へたものである、

尙ほ斯樣な工合で、日用のものを檢べて見ると却々澤山の數があるのみでは無い、飯を炊くにも水加減を失策らず、漬物をするにも鹽の鹽梅を誤るといふ憂は無いのである、何でも斯樣な手近い處から心懸けさへすれば、決して日用の事に缺けるものでは無い、



風の効用と避暑

理學士　梁瀬環

昨今のやうに熱い節にサツト一と吹き涼風の來た時の心地よさといつたら實に價千金である、併し此熱さから我々を蘇生らせる風は何うして吹くものであるかといふと、チヨツト答に詰る、又この風といふものは如何なる効用を吾人に與へるものかといふ此事に就ても、單に熱い時に涼しくして呉れるといふ位で、その他は多く知られて居らぬやうだ、そこでその吹いて來る模樣は後廻しとして、我等の人類社會に取りて如何なる効用があるかといふ事を掻摘んで先にお話いたさう、

風は空氣の運動であるから、この運動の爲に、某處では酸素が多過ぎ、又某處では炭素が不足して居るといふやうな塲合に、これが爲に彼と此とを融通して呉れるので、それで我等の健康を全うして行く事が出來るのである、若し此運動が無かつたならば迚も生命を保つ事は出來ない、

植物が我等の生活に必要なる事は、單に炭素を吸收して酸素を吐くといふばかりでは無い、或は食料として、或は建築用として、若くは風致用として、其他萬般の所用に應ずるのであるが、かく我等に必要なる植物の種子は、一から十まで人の手に依りてのみ運ばれ移されるものでは無い、即ち此風の力に依つて地球上に分布せらるゝので、之はチヨツト考へると虚言のやうであるが、山の近い國へ行つて見ると、其里に無い植物が偶然庭や畠の中に生える事がある、之は山の上の植物の種子が、風に乘つて來て其所へ繁殖する證據である、

それから地球上に若し風が無かつたならば、大洋や地上から上つた水蒸氣は、毎時も一つ處にのみ落ちるやうになる、さうなつては種々の故障が出來るのであるが、この風があるが爲に、諸々方々に運ばれて、

雨となり霰となり雪となつて地を濕し、植木に注ぎ、大小の河流の源となり、流れて大海に入るといふ様になるのである

それのみならず、温暖な所から吹いて來る風は、その通に場所の氣候を暖くする、例へば、冬南風が吹けば暖氣を覺えるが如し、また寒冷な場所から來る風は氣候を寒冷ならしむる事は猶ほ北風の如くであると云つたが、予はこゝに同時に、或は寒暖を調和



することもある、まだ此外にも澤山あるが、ザツト擧げても此位我等の社會に効用を為すのである

誰やらが開花の雨はこれ落花の雨

開花の風はこれ落花の風

あるひは

消暑の風はこれ凍寒の風

愛嬌もあり又意地の悪いもの

と云ひたいと思ふ。ゆゑに風といふものは、言はゞであると云ふことが出來る。それは何故であらう、風の神といふものが氣まぐれで爾うなるのであらうか、昔の繪などにある風の神といふのは、それは恐ろしい鬼見たやうな顔をして、いつも風袋といふものを脊負て居るやうなものであるから、或は機嫌の惡い時には、ひどい風を吹かせたりするか知れないが、今時の風の神は其様なものでは無い、誰でも知つて居るが、しかし誰も目に見たものは無い、諸孃の家で寒い時には火を焚かれるであらうが、其の時には風の神も風袋も其所に來て居るのである、といふのは、試みに障子を少し開けて、火の燭つて居る蠟燭を敷居の所へ置いて見られよ、その蠟燭の火は室内へ傾くし、それから夫を鴨居の邊へ持つてゆく

と、今度はその火が室外へ傾くのである、何故に斯くなるのであらうか、之は室内の空氣が熱を受けて膨脹して、空中へ上つて鴨居の方から出てゆくので室内の下の方には空氣が少なくなつて、新たに室の外から冷たい空氣が入つて來るのである、

これで風の行衛が解かるので、即ちこゝに二種の風がある事が分かるのであるといふは外でも無い、一方は室内から室外へ向つてゆく暖かい空氣の流れ他の一方はその反對で、室外から室内に入つて來る冷たい空氣の流動なので、この風の出來たのは、室内と室外との温度の異ふ所から出來たのであるから

この温度の相違が風の原因

即ち空氣を動かす本となるのであるから、何も風の神の、風袋のと云つた所が、別に其様なものゝあるのでは無い、

室内の温度が高くなればなるほど室内の空氣が昇ることが多く且つ早くなるから、從つて室外から入つて來る空氣の流動もます〱迅速になつて來る、

そこで風の力といふものが強くなるのである、つまり極穏かな風も、又暴い風も、その本を訊せば皆この關係から生じて來るのである、

毎日の天氣豫報を見ると、今日は南の風とあると思ふと、明日は東の風とあり、又西の風とあれば、次には北の風とあるといふやうに、頓と一定の規律が無い、して見ると風といふものは、吹きたい方體に勝手氣儘に吹くものかといふに、決して夫は爾うでは無い、

必ず一定の規律

があるので、そも〳〵地球の南と北との兩極は誠に寒冷であるが、之に引換へ太陽の通り道なる赤道の近傍は非常に暑い、であるからして赤道近傍の空氣は、溫度が甚だ高い爲に膨脹しては常に上昇しつゝある、之と反對で、兩極地方の空氣は溫度が低いから毎時も縮つて居る、サテその上昇した跡は如何かといふと、その下方は空氣が稀薄になつて居る、そこで寒冷な地方の空氣が南北から來て埋めるといふ順になる、併し赤道附近から上昇した空氣は其儘かといふに、さうでは無い、それは又地球の引力に引付けられて、一方は北極へ向ひ、一方は南極に向つて行くやうになるのである、それ故に風の製造場といふのも可笑いが、まづその出て來る本はと云へば、赤道附近の熱い所なので、こゝで南と北へ向うて吹く風が出來、從つて兩極からは赤道へ向つて吹く風が出來るのである、之より推すときは、地球上の風の方向といふものは

正北か又は正南

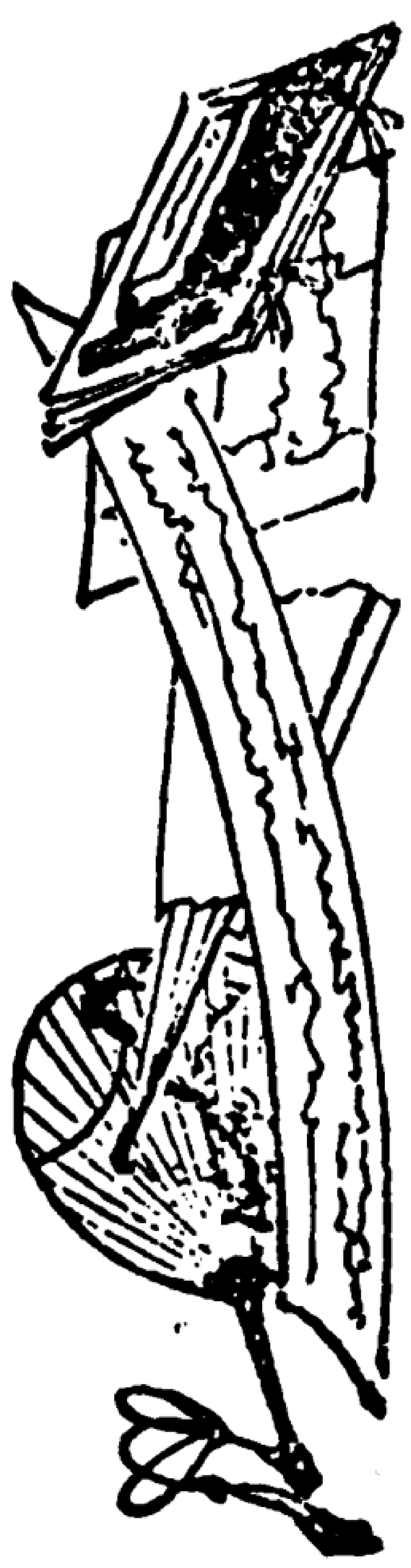
の二つの方向に限られてある筈なのである、然るに天氣豫報には東、西、南、北の四方のみならず、時としては東北とか又は西南とかいふやうな方向さへも示されてある、何うして前の推定通りに行かないで、斯くも種々の方向から吹くのであらう、實に怪しむべき次第であるが、それは

地球の回轉に基因

するので、別に怪しむ事は無いのである、
今更めて云ふまでも無く、地球は一晝夜即ち昔は十二時、今は二十四時間に西から東へ一度回轉するのであるから、地球の赤道の部の大きさが二萬五千哩あるとすれば、その各部分は一時間に二萬五千哩の二十四分の一、即ち千哩以上の速度で走つて居るので、これは子供が獨樂をまはす、それよりも速く回るのである、赤道邊の地面が夫だけの速度で走ると、その邊を取卷いて居る空氣も矢張同じ速度で飛んで行く、恰も電車に乘つて居ると、自分の身體も同じ速度で動いて居る樣に、走る所が知らるゝ如く地球は兩極に近づくに從つて其緯線の大きさが減るから、たとひ寒帶と温帶との分界が赤道の半分だとしても、二十四時間に一回轉する道理は同じであるとも、その走る速度は赤道の部分の走る速度の半分で宜い譯となる、そこで今赤道の方から、例へば北極の方へ向いて吹いて來る風は正北を向いて來る積りでも、赤道邊の東へ〳〵と行く、頗る强い速力を有つたまゝで吹いて來るから、何うしても下の地面よりは早く東の方へ、行く勘定で、北を指して行きながら東の方へ外て行くやうになる、故に實際は正北でなくして東北に向つて吹いて居る、之と同樣に赤道から南極に向ふ風は東南に向つて吹いて行くことになるのである、
されば極に近い方から赤道の方に向つて吹くのは何うかといふに、此方の部分は自轉の速度が遲いから、その邊の空氣もやはり東に行く傾きが少なくて赤道に向つて來る、すると赤道附近は速かに東へ回つて行くから、毎時も引き殘さるゝ氣味になつて、之も矢張北半球では南西に向つて來る事になり、南半球では北西に向つて來る事になる、それにしても地球上の風は、大體は定つた方向があることが知れるのである、けれども夫は大體から　ふ事で、地球上何處も彼處も同一といふ譯には行かない、それは海や、陸や、その他晝夜の工合等で種々に異なるのである、

夏になると孰れも人々が海邊に暑さを避けるのは何が爲かといへば、海邊は涼しいからである、何故に涼しからうか、晝間は海の方から涼しい風が吹いて來、夜になると陸の方から海に向つて涼しい風が吹くのに因るのである、この海の方から吹く風を海風、陸地の方から吹き行くものを陸風と名ける、かく夜と晝とでは反對の風の吹く譯は、晝の間太陽が海と陸とを照す時分に、陸の方が海よりも早く暖かになるので、陸の空氣までも温度が上つて、例によつて上昇するから、その空所を滿たす爲に、海の方から比較的冷たい風が吹いて來るので、朝の十時頃から午後の六時頃まで續くのである、それから夜になると、陸も海も晝間うけた熱を吐き出すのであるが、海よりも陸が早く熱を失ふので、今度は海の方が温度が高くなつて、そこで陸の方から風が行くのである、而して此風は夜から明方まで續くのである、

それから此風には東西南北等の方向に依つて名くるものゝ外、更に其速さに依つて種々の名稱が附せられてある、即ち疾風、烈風、暴風、强風、軟風等と區別されてあるが、それは氣象學の上からその速度に依つて命名せられたものであるが、通常は爾う區別して稱ふるものは無いが、斯ういふ區別があるといふ事位は知つて居らるゝが宜いと思ふ所より、序でに此所に略説して置くのである。



ジャム、ゼリー、ジユースの製法と其食法

吉田彌吉

大部此頃は種々の果物も出盛つて來たから、ジャムやゼリーなどを拵らへるのに便宜なばかりでなく身體の虚弱の人は勿論、左も無くとも健康體の人でも、單に生果を食するよりは衛生上にも爲になる事であるから、最も手輕な如何なる素人の方にも出來る仕方の二三を御傳授いたさう、

ジャムの製法

◎苺　採集した草苺の新鮮なもののみを撰み、その蔕を除き去り、鍋に入れ文火にて煮、絶えず攪拌して能く煮えたる頃、苺一斤につき白砂糖百匁の割に入れ、煮ること約四十分にして、そのやゝ堅くなる頃を度とし、之を罐詰にせば永く貯へて變味することとなし、若し晴天續き、又は種類によりて水分の不足なる時は、果實一斤につき水一合位を加へて煮るも可なり、

◎李　核の無きものを撰び、よく洗滌して鍋に入れ之を煮るに適宜の水を入れてよく煮、而して笊の如きもので漉し、皮と核とを去り、之に果肉と同量の砂糖を加へて三十分乃至四十分間程煮、而して罐詰にすべし、

◎苹果　皮と核とを去り、其量目を計りて鍋に入れ之に適宜の水を加へて柔らかになるまで煮、之に果實と同量の白砂糖を投じて約二三時間煮、罐詰となして貯ふべし、

◎榲桲　製法は總て苹果に同じ、但し林檎より速やかに煮るの便あると、其香味は遙かに苺に勝るが故に、苺と等分にして製すれば頗る佳味なり、

ゼリーの製法

◎榲桲　まづ榲桲の軸を拔き、よく洗ひ擦りて毛を

抜き切り、八片位となし、鍋に入れ、冷水を果肉を被ふ位までに加へ、果肉の十分柔らかになるまで煮るべし、而して後是を地の厚き晒木綿の袋に入れて漉し、下に容器を置き、その中に汁を滴下せしめ、終れば是に等分の砂糖を混じて、再び鍋に入れ、成るべく早く煮るべし、その時間は二十五分乃至三十分位にして、其表面に浮ぶ泡を汲み取るべし、後ち此果液を熱き湯にて洗ひたる茶碗、若くはコップの如き物に入れ、之を冷處に置きて凝固せしめ、西洋紙を圓形に切りて果液の上に置き、なほ又日本紙にて圓形の大なる紙を作り、卵子の白味にて密閉すべし、

◎莓　製法は榅桲に同じ、すべてゼリーを製するには、その凝固するや否やを知ること必要なり、故に相當の時時を經、之にて可なるべしと認めたらば、その少許を皿の如きものに取りて冷處に置き、その凝固するや否やを試むべし、

◎葡萄　よく房を洗ひ、一粒づゝ取り、鍋に入れ、果實一斤につき水一合程を注入し、煮ること凡そ十分、それより晒木綿の袋に入れ、一夜間その滴汁を滴下せしめ、その汁をコップにて量り、同量の白砂糖を入れ、文火にて煮ること約二十分乃至四十分にして、其間絶えず泡を掬ひ取り、他は凡て前法の如くして蓄ふべし、

ジユースの製法

◎葡萄ジユースの拵へ方は略ゼリーに同じけれども砂糖の量は液汁の半分と心得べし、而して熱したる罐に入れ、直ちに蓋または栓をなし、封蠟もしくは白蠟にて密封すべし、其他莓林檎等も同じ、

食用法

◎ジャムとゼリー　洋食にては肉と共に食し、或は麵麭に着けて之を食し、是まで在り來りの風に適する食法は、カステーラの如きもの丶中に入るれば、美麗にして味も亦頗る可なり、また餅或は飯に着け

て食する時は、病人の如き身體の衰弱せる者に在りては生果を食するよりも可なり

◎ジユース　適宜水に混和して夏季炎熱の候に飲用し、又はアイスクリームの器械に入れ、氷結せしめて食する時は、其美しさと言ひ、味といひ、實に得も言はれぬなり。

家庭に於て忘れられたる大事

遠山幸吉

世の中で人格が何うの品位が何うのと口八ケ間敷言ふけれども、それは多く實質の上から說くので無理からぬ事ではあるが、これも實質を離れたといふ譯では無く、矢張それに最も密接な關係を有つて居るのであるけれども、比較的他人に接するときは爾うでも無い、それは多少内に愼しむといふ心がある

からして頽れもしない、時としては今少し普通にと思ふ位の場合が多い、別言すれば、堅苦しい事が尠なく無い、それは何であるかといふに、平素我等が朝から晩まで使ふ所の言語である、この言語が

對する人に依りて非常に異ふのみならず、時としては大層勘違ひをして使用せられて居る場合などが尠なく無い、

淑女とか佳人とか稱せらるゝ人でも、其の話す言語が野鄙で聞き惡い時には、忽ち一言の下に其美の特性を損ずるものであるが、之に反して

流暢で明晰で、その上溫雅であるとすれば、縱ひ其人の容貌は醜くあらうともその心の程は如何に淸くして高尙であるかといふ事が想察せらるゝものである、去れば女德の一として言語が如何に大切なものであるかといふ事も推するに難くはあるまいと考へる、

一體是まで日本の言語が立派にならないで、今また曖昧糢糊の裏にあるといふものは、その原因が多

ゝ々あるであらうが、家庭に於ける之が訓練の行はれなかつたといふ事は確かに其原因の一に數へらるゝものであると思ふ、昔の武士が比較的立派な言語を使つたといふ事は一面彼等は嚴格なる主從の關係を以つて、そして儀式張つた場處に出でその一言一句は非常なる關係を有つて居つた、それ故に自然と其言葉遣ひも正しくなつたのである、で、其家庭も他の國民に比べると幾分か高尙で、立派な言語を遣つたといふ事は、今日その子孫たる士族といふ階級を見ても分かる、併したゞ比較的立派であつたといふ丈で、迚も今日專門家が理想とする言語などゝは天地の差を免れないのである、とは云へ、昔は婦人には學問をさせなかつたのでたとひ武士の家庭だからとて、その妻女は多く此範圍を脫する事は出來なかつたのであるから、謂ゆる夫唱へ婦和するといふ工合に行かないのであつた、そこで表向に使ふ言語と家庭内で使ふものとは、其間多少の差別のあつたものであるといふ事



は容認するに難くは無い、即ち妻子にも下婢にも、誰にも彼にも能く分かるやうな言葉を使つたに相違ない、サテ然うなると、勢その標準を低くしなければならぬといふ事になり、標準が低くければ自然と立派な言語が用ゐられぬといふ事は致し方のない譯である、現今文明の時代でも、高等官とか學者とかいふ人の家庭では、只の商人や工匠の家庭に比べると多少學術的の言葉が行はれて居る、とは云へ、

言語の訓練に重きを置き而して家庭團欒して歡話するといふ事は、恐らく一軒も無からうと思ふ、之は極端なやうであるが、實際は虚僞を語らないので、高等女學校や中學校の生徒達が、學校で折角立派な言葉を覺えても、家に皈れば何の効もなく、教育されぬ人の言語と毫も變らないので直ぐ分かる、

全體今日の父兄たる人に言語の必用などゝいふ觀念のないのは當然で致し方がないから、未來の國民の母たるべき現在の諸娘は十分この邊に注意して、明日よりといはず今日より此事に心を配つて願いたい、然も無くば到底日本語の改善や發達といふものは望まれ無いのである、

社會の上から見れば直接間接に言語の改良に功を與へたものがある、それは文明の利器

すなはち交通機關の設備

である、この爲には如何なる僻遠の人でも多少文明流の言語を覺えるし、また多少異つた人の言語に接する所より、大に自己の言葉の訛誤等を省みて改善するやうには爲つたが、併し斯のやうな迂遠な不規則な改良は頼みにして居らるゝもので無い、是非とも家庭の中で、比較的學理に近い言葉を教へて呉れる未來の妻たり母たる人々の力を藉らなければ成功は期せられぬのである、

當今は少し下火となつたとは言ふもの丶、その實力は諸種の方面に向つて勢力を逞しうつゝある彼の言文一致論であるが、之は文章としては如何なものであるか知らない、けれども言語に取りては至極適

切のもので、言語の改良は之に依るのが最も安全な方法であると考へる、今日までの振合で見ると、まづ是ならば子供に喋舌らせても、左程困難は感じない、尤も此外に我國には口語といふものもあるが、この口語は乃て言文一致と化するに難からざるものであるから、之に依つて言語の改良を試みたならば必ず勞が少なくして其功が多からうと自分は信ずるのである、

これは一二の例に過ぎないのであるが、隨分我國で現今行はれて居る言葉の中には甚だ不思議なのがある、即ちランプをダンプ、カラダをカダラ、チャガマをチャマガ、出たをデキタ、デキタを出た、行くをユカズ、寢るをネズなど、殆んど常識を以て解する事の出來ない言葉が幅を利かして居るのみならず、その地方では少しも怪まないのである、殊に東京の女學生間には是また一種の卑しむべき言語が重用せられて居る、何うか夫等の言語は一日も速く根だやしに仕たいものである、

併しまた言葉に依つては地方の者が遣ふからとて却々侮るべからざるものがあるのであるが、兎もすれば自已が聽き慣れないからとて無暗に影どころでは無い、その面前で笑ふものがあるが、得て爾ういふ者に限つて日本語を知らないのが多い、

一たび支那の文學が輸入してから、普通文にも又談話にも大層漢語が用ゐられて、今も尙ほ盛んである、それも敢て咎めだてをするでは無いが、殊に日本の語法を知らない者は無暗に多くの漢語を遣ひたがる癖がある、例へば、日本語で通ずるもの、即ち町を通るといへば十分であるのに通行すると云つたり、作るといへば濟むのに製作すると云はねばならぬやうに思ふことである、是は日本に立派に語尾の變化を有つて居る語があるのに、無理に漢語にするのである、そして是が日本語の發達を妨げた有力なる邪魔物である、

誰しも國力を盛んにするといふ事に就ては大抵會得して居るやうであるが、語力を盛んにするといふ

事は少しも頭に浮ばぬらしい、今より數代前の露國公使某氏は、國力の消長は

言語の盛衰と元氣の興廢

にありと云はれた事があるが、實に其通りである、固より我國も、諸外國の言語も廣く研究しなければならないが、一圖にそれのみに頭を突込んで、自分の國に結構なものゝある事を忘れてはならない、此く云へばとて、予は奈良朝や平安朝時代の古代文學を再興しやうといふ事を夢想して居るのでは無い、言語のみならず、凡て世の中の事といふものは時勢と共に推移し進歩して行くものであるから、今日には矢張今日に相當すべき言語を撰擇して、之を擴ることは單に專門家の手にのみ委せて置かないで否、專門家の勢力といふものは比較的薄弱なものであるから、それより一層有力なる諸姉の援助を假らなければ到底成功の見込みは立たないのである、それに就ても先づ手初めに平素家庭から實行して貰ひたいものである、

◉夏期化粧の注意

▲蒸す樣な暑熱に苦みながら東京の塵芥の中に住つて居るのも酷く、山間に避暑するか、海水浴に行くのは健康上にも良いには極つて居るけれど、實際三月も海邊に住つて濱風に吹かれたり山の中を散歩して日に焦けたりすると愈々歸京と云ふ日になつて出發の時とは全然變つて色が黑くなつて居る。

▲併し之は少し注意さへすれば、よし少し位日に焦けて居ても、其以上黑くなる事を防ぐ事は出來る。第一に食物の用心をして、脂肪分に富んだ肉類は成べく食べぬ樣に、熟した果物は食後時々に用ゆべく、第二には化粧品即ちクリームや、洗粉等を吟味せねばならぬ。其もクリームは普通美顔術用のもので、よく洗粉も純良なる米糠で構はない。

▲第三には水の注意で、元來水には石灰を含んだ水と含まない水とがあるから出來るなれば石灰を含まぬものを用ふるがよいので、其には普通の水を一旦沸して置て、用ふる時には之に少量の硼酸を加ふると皮膚は荒ないで濟む又同じ水でも水道の水かさなくば、川底が石か砂で見た處澄んで居る水ならばよいが。泥の混つた井戸の水や、溪川の水は化粧用としては元より健康にも非常に害がある。

▲殊に海水浴をする人は、水に這入る前にクリームの少量をライラツクの花から取つたと云ふライラツク水で融かして顔に塗込んで置き、而して直接顔を日に晒らさない樣にすれば決して色の黑くなる事や、皮膚の荒れる事はないのである。

簡易なる洋菓の製法

佐野兼吉

カレンズ、ケーク

初め卵の黄身三個にコップに二杯の砂糖を加へて練り、次に其中へ大匙に四杯のバタを加へてよく混和したる後、更にコップに一杯の水を加へて能く攪拌し、次にコップに一杯のカレンズ（豫めカレンズを洗ひて少量の粉をまぶし置くべし）を投れ、更にコップに三杯の粉と、小匙に三杯のベーキングパウダーとを篩ひかけて能く混ぜ、パンに西洋紙を敷きそれに移し、テンピにて一時間程に燒き上げ、殘し置きたる白味を十分攪拌して泡立たせ、粉砂糖を澤山に加へてドロ〳〵になし、その燒き上りたる菓子の冷めざる中に表面に一面に塗りつけ、猶ほ其上に新聞紙ラッパにて細く絞り出し色々の摸樣を畵く時は體裁甚だ美麗なり、

ジンジャー、ケーキ

卵子十個を碎き、その中にコップに三杯の砂糖を投れて一時間程攪き交せ、次にコップに三杯の粉を加へて能く攪き交せ、鍋に西洋紙を敷きて之に移し生姜の砂糖漬にしたるものを薄く切りて處々にさし入れ、テンピにて一時間程燒くべし、

レデーヒンガー

卵子の白味を十分泡にし、粉と砂糖とを加へてドロ〳〵に攪き交せ、レモン液を適宜に落し、新聞紙のラッパにて西洋紙の上に一の字に何本も突き出し其紙を燒鍋の底にのせ、其儘テンピに入れ、二十分間に燒き上げたる後、紙より剝がすには暫らく濕布の上に置き、紙を濕して剝ぎ取るべし、

ストロベリーショルト、ケーク

先づ左の諸材料を以てレヤーケークを燒くべし、即ち二個の卵子と小匙に二杯の砂糖と、外に大匙一杯のバタとを混じて能く煉り、之に少量の鹽を加へコップに二杯の粉と、小匙にベーキングパウダーと同量のベーキングソーダとを篩ひかけ、牛乳は約コ

ップに四分の三位を混じて輕く混せ、厚紙の上に圓く二枚に引きのばし、燒鍋の底に載せ、其儘テンピに入れ、十分以内に燒き上ぐべし、之をレャー、ケークといふ、此に注意すべきは、此法は下手に行ふ時はテンピの中にて温まるに從ひ溶け出し、紙の外へ流れ出る事あり、故に初めの中は二三分の深さの燒鍋に入れて燒くを良しとす、

右のレャー、ケークを作り置き、更に苺をよく洗ひて蔕を去り、一枚のレャーケークの上に一面に並べ置き、卵子の白味を十分泡にし、粉と砂糖を加へたるものを以て苺と苺との間を埋め、並びに一面に塗りつけ、その上に他の一枚のレャー、ケークを掩ひ、又その表面に右の泡を塗り附くべし、

斯くする時は多量の苺を要するが故に、略式にはレャー、ケークを一人前づゝに切り、その上に苺をつぶしてかけ、その上に白味の泡をかけて出すも可なりとす、

西洋にては此菓子を非常に上品なる菓子として珍重するなり、

チョコレート、レャー、ケーク

レャー、ケークを前の如く二枚燒き、卵の白味を十分に泡立たせ、粉、砂糖、チョコレート粉を加へてドロ／＼になしたるものを一枚のレャーケークの上に塗り、その上に他の一枚のレャーケークを重ねその上面並に側面の周圍殘らずに塗り附けて悉く褐色にするなり、此塗るチョコレートの別法は、即ちチョコレート粉小匙四杯と、砂糖をコップ四杯と、バタ大匙二杯と、牛乳をコップ一杯とを混和し、その儘十分間煮立てゝ後、水に浸けながら成し得るだけ能く攪拌し、飴の如くして塗るなり、

ジエリー、ケーク

前の如くレャーケークを二枚作り、一枚の上に苺のジエリーを塗り、その上にコヽナッツの粉末を散らし、其上に他の一枚のレャーケークを重ね、又その上にジエリーを塗り、再びコヽナッツを振りかくべし、

香と色

農學士　新野良吉

凡そ花には色あり香あり、その實も亦味佳きは、これ其樹の眞に善なるものなり、かく人も、心内に備はりて外に亦行あるべし、行の果は則ち徳の實を成す、花にして香もなく實もなからんか、その色美しくその姿優しとも、眞に愛すべく慕ふべきものにあらず、人にして徳なからんか、人格何れにか求むべき、

春光酣にして百花正に開く日は、花として色なきは無く、また秋露濃やかに置く園の千草の均しく笑み綻ぶる時は、草として美しからぬはなし、其香の最も佳く最も深き所には人々心を寄す、彼の桃季言はず、下自ら蹊を爲すと云へるがごとく、人は其色の美しきのみならず、その香の薫ずる所に從つて娛しむ、その瞬時の榮をだに、これ競ひこれ希ふにあらずや、想うて此に到れば、意强く、行ひまた著しく進歩して、徳の隆盛なるは、自ら人の行くべき軌道を指し示すなり、熾んならずや徳の果、善ならずや行の實、あはれ慕ふべきは眞に香ある花なる哉、纎手たをやかに摘む路傍の紫花は、小やかなることその指邊に隱るゝばかりなり、されどその一片だに尙棄てがたき香の宿れるを、少女や愛づるならん、かくも可憐なる花の微笑、楚々たる花の淸姿、一顧一眄に値ひせざるもの蓋し稀なり、たゞその花に悉く皆慕ふべき香の存するをば認め得ざるぞ心飽き足らはぬ。

抑も智あり情ある人の血湧き、意熾んなる時は、何れか皆花ならざる、誰か一顧一眄の値なくして止まんや、彼の葉に莖に刺ありて、わが衣裾の觸るゝだに忌避すべき薊の花も、温き日を負ひて野邊に彷徨する時は、鈴菜、菫の花の間に交りて、優に春の美を競ふに似たるを見る、これ素より朝に咲きて夕べに枯るゝ一植物の一根莖のみ、殊更に要せざれども、彼等は尙ほその一瞬時の榮もて、その天分を盡

し得たるものなり、惟人の美は、かゝる瞬時のものたる可からず、一枝の優、一瓣の嬌、一顧の値をもて滿足せらるゝものならず、生を更へても倘且つ不朽、不散、不褪、不變なる德の馨香を以て、その美を更に善に進むることを要す、花の尊としとする所はその香にあり、忘られざる香の紀念にあり、人に於てはその正しき自覺にあり、自覺して强行するにあり、蓋し人は克く已を知るも、正しく知るを得ざるなり、否、正しく知るを得ざるにあらず、正しく行ふ事を能くせざるなり、されば人は先づ已を覺り、しかして後、行に實になさゞるべからず、古人曰く、人を助くるは決して他を助くるにあらずして、これ乃て已を助くるなりと、味ひあるかな、吾人は斯くして始めて香と色とを收め獲るものと謂ふべきのみ



食麵麭製の美術裝飾

MMOB

極めて單純な材料が美術品製作に使用されて意外の好結果を見るといふことは古來珍らしい事ではありません。家庭に於ける婦人が布絹の小片を寄せ集めて色々な裝飾品を作ることなどは常に見受けられる所を以て其婦人の器用なことが知られます。今玆に予の紹介しやうと思つて居るのも全く家庭的發明といつてもよいのです。而して其材料が食料品であるといふからして最も婦人的であります。其材料といふのは白食麵麭でありまして、これを發明したのはスザン、メーヤー孃といふ佛蘭西婦人であります。同孃の製作品は佛國政府に美術品として認定せられて展覽場に陳列を許可されたといふことであります

先づ其材料の製法

から述べますれば、食麵麭の中心を集めて純粹アラビア護謨三十匁とグリスリン百匁の割合に溶かした

溶液で搓ねるのです。液を少しづゝ入れて指頭で徐り固からず柔からず、丁度お餅が油灰位が一番適當だといふ事であります。製作する物にも依りますけれども一時にあまり多量を作れば翌日になつて固結して使用されなくなる恐れがあります。初歩の人が練習に使用するには茶椀半量位が都合がよいと思ひます。

それから着色であります。花なり他の物體又は自然物なり製作する物の色彩に應じて顔料を混入するのですが、粉末でも液體でもよいのです。夫で日本畫の顔料でも水彩のでも油繪のでも手近なのを以て來てよく指頭で搓ね込んでむらのないやうにするのが大切です。

先づこれで材料の製造を終りましたから次で摸型に取りかゝる前に準備しなければならない。



道具

であります。これは別段に大したもの丶要はありません。只麺棒と小刀とです。麺棒とは西洋料理のチェースや芥子を蚕から取り出す匙で丁度日本の茶匙の少し小さいので、

竹や、象牙や、其他金屬などで出來て居る耳くぢりの少し大きいやうなものであります。此麼なものは自分で作つてもよいのです。これが備つたならば今度は

摸型

に取りかゝるのです。製作品の目的は無論花鳥等に在るのですが。第一に壺とか瓶とかいふ極めて單簡なものから初めるのです。其麼物が十分意の如く形が出來るやうになつてから複雜なる物に移るのですが一足飛びに花などをやる時は失敗します。

花の摸型

をやるには先づ初めは薔薇、千鳥草などいふ大形なのや手の込んだものでなく、三色菫、野菊、苹果花等の單瓣の花を選んで其實物に照して作ります。製作の順序を述べますと先づ

莖或は枝

から初めます。必要と認める丈けの大さ長さに材料をまとめて、莖や枝の形が不滿足なきまでになつたなら。

葉及花瓣

といふ順序です。大體の大さから粗雜とペン小刀と麵棒とで削り出して指頭にてなすつたり。輕くたゝいたり、曲げる、押す。まあこれで形が出來上つたなら其儘安置して眺めるのです。氣に入つたならそのまゝでよし。又少しはなれて見て氣に入らぬ所は注意して訂正するのです。此際に氣短ではいけません全體の形を崩して仕まふ憂があります。斯く出來上つたのを。

温度の變化なき室

に三日許り放置するのです。一體此製作をやる室は寒熱常なしでは龜裂が出來ます。二日或は三日でパンは固結します。それを待つて。

最後の着色。形直し。仕上げ

をするのです。着色は刷子で別に使用したと同種の繪具を繪畫の彩色と同方法で、成るべく自然に近いやうにする。形は小刀でなほし。仕上げには薔薇の

蜜の如き色澤を出すには指にて擦つてもよいし、又アラビヤ護謨を水に溶して塗つてもよい。

斯くて大體の製作法は述べたわけです。忍耐と熱心とを以て練習すれば花などは眞に迫つたものを作り得るやうになる。それまでに進めば他の蝶や其他昆虫等進んでは小鳥なども自分の發明で出來ます。メーヤー孃も初めは花のみを作つたが其花が餘りに眞に近いので或日密蜂が飛び込んで來て之に止まつた。それを見て昆虫の模型を始めて、飄虫や蜻蛉や黄蜂など實物と見まがふまでに作らるゝやうになつたさうです。斯様に羽翼の薄い色彩の複雑なるものをも作り得るのです、孃が製作の薔薇などは其美妙なる事自然物を超絶して居るといふ事であります。佛國の美術界では大に注目して、如何なる作物にも使用し得るとまで稱賛されました。或鑑賞家の如き此材料でもつと眞面目な作物を製作したなら恐らく天下一品だらうとまでいつて居ります。

上手ほどよいのであるが、まづ眞に近きものを作り出し得れば素人には十分です。花や昆虫や、小さい男女の摸型などが適當な取題と思はれます。只くれ〴〵も忍耐と熱心と練習とを以て、率先して傑作を家庭の美術家によつて紹介されんことを希望します

最後に製作物の取扱方法ですが。初めにパンをグリスリンで捏る時に適當の密度になるやうに十分力を用ないと龜裂などが生じたり缺損したりします十分に練れて居れば柔かな床布や、疊に落した位いでは崩れる事がありません。先づ陶器などを取扱ふ氣ならば大丈夫であります。然し硝子箱にでも入れて保存して賞翫するのが適當だらうと思はれます。

日本銀行女工取締 鈴木くめ女を訪ふ

押切鵬翼

婦人社會の大立てものを紹介することは近頃流行

の一つの様に見受けられますが私は一風變つて中流社會の賢婦人の實歷談等を愛誌諸孃に御披露致して見る積りであります、其理由は上流社會は其數少く私共にとりましていくらか有益でないこともありませんが寧ろ中流社會の模範的人物の夫れには及ばないとの考へからして不佞をも省みないで方々へ推參致し現今の女子生業等につきまして御話を伺ひ幾分なりとも皆樣の利益にもなるかと思ひますから續々紹介致す積であります劈頭第一に日本銀行女工取締鈴木氏を神田錦町一丁目一番地の寓居に訪ふ取次に誘はれ三疊の玄關より八疊の客間に入りました忽ちにして氏はいとも質素な風にて出でられ輕く挨拶せられ先づ入來の何用なるかを問はる、余は簡單に來由を語りて種々なる發問を試みたり其要領左の如し、

氏は安政六年に靜岡縣に生る此地我國の中部に位し氣候溫和にして土地豐饒なるが上に山水明媚にして風光佳絕氏の如き人物を出すもまことに故ありとでも申す可し氏が父は舊藩時代の士族なれば其家庭に於ていかに嚴格に養成せられたるかを知ることが出來るのである、

其後氏は九歲で明治維新の改革に遇ひ家事の都合上千葉縣に移轉せられたが後また東京に住むことゝなつた目下氏が本宅は大森にあらせらる、由にて只今のところは女婿の宅であるさうだ氏は其他二男を有す長男は既に工科大學を卒業せられ次男は未だ研學中の由である氏はかゝる圓滿なる家庭を有せらるゝことなれば日本人の常として閑散に身を置く可き筈であるが氏は徒食することは大の嫌ひでどこまでも自活する精神で其氣慨ときたら今日のハイカラ女學生を慚死せしめるのである氏が娛樂は旅行と寫眞術とで其精巧なることは黑人も三舍を避ける程である今や年齒知命に及ぶしかも其元氣の旺盛なる昨夏の如き富士登山をせられた其他東京附近の名所舊跡等は一として足跡の到らないところなく其實景は悉く氏がアルバムに集まつて居る、

維新以前に於ける我國の教育の有様は實に幼稚なもので、殊に女子教育に於てはわづかに家庭にて女今川女大學女四書などを教へたばかりで深く研究する者は實に曉天の星でありました、されど氏は兎にかく厳父の許で當時の風習としては寧ろ過分の讀書等をなされたのである、氏は此時代の事を追想せられほんとうに妾は悪い時節に生れました今少しく遅れて生れなば世間並の教育もうけらるべきものをと述べられた然れども氏の如き氣風はこれ或は反つて先きに生れた爲めであらう、

現今日本銀行の女工の數は大凡三百五十名を有す執務時間は午前九時より四時までゝあるが實は三時過ぎに普通の女工は退散し得る由、

執務の模様につきて、

事務を發行部と株式部と國債部との三部に區分して氏は取締として全體に關係し尚他の二室には取締補一人づゝを置く女工の中より組長次席を撰ぶ女工一般の仕事は帳簿の出し入れ他は椅子に腰かけてする仕事のみ金圓は日に二百萬圓以上も取扱ふから綿密なる注意を要するが紙幣をばたゞ大切なる紙位の考へを持たねばならぬといふことである、

他との交通

は別に要もなければ他室に行くこともなく况して男子部の方とは往復することなし電話がかゝつてきても人に頼んで聞いて貰ふので外出なども容易に出來ないことになつてゐます、

食事は

人數に比例してはせま過ぎる程のところに於て十一時より一時までの間に數組に別れて三十分ごとに交代食事す辨當は大概各自持參するも一名の婦人のパン屋さんが出入することを許さる、

俸給ですか

最初は十七錢で漸次六十錢まで増給す目下のところで五六年も立てば五十錢以上となり其他二月と八月と二回手當もありますから女の仕事としては反つてかの遞信省の判任官よりも好都合ならん、

採用試驗ですか

これは期日も一定し居らず多くは知り合ひの人に依賴して志願するが高等二年位の程度に於て珠算の寄せ算等簡單なるものを以て試みらる今では志望者も多くなり十人位採用するに五六十人もあるから戶籍の謄本は勿論の事家庭の情況をも十分に調査し體格檢査を歷て初めて採用せらるるので夫れも六ヶ月間は見習として日曜祭日等は給料なく又手當もないのである今日に於ては前申した通り多數の女工がありますが明治三十一年二月わたくしが就職當時は僅に人數十四名でしかも其人々は皆銀行の守衛等の子女で年中業務をとることなくたゞ多忙の節を見計り臨時に傭ひ入れるのだから職務に對して忠實なる考へなく他を妬むものありかた〴〵銀行でも困ると云ふのでわたくしを取締として入れたのであります、かゝる弊風をひきうけましたから或は叱り或は賞め同職の間として喧嘩嫉妬するが如きは本人の不得策のみならずひいては本銀行の威信にも關することを幾回となく說き聞かせました爲めか今では些の怨言を耳にしない樣になりました、

あゝ氏の如きは先天的に人を監督する才を有すと云ふ可きか非か、

高等女學校出身者は女工に適せず

これまで女學校出身者を使ひましたが多くは不成功でありました其理由種々あらんも要するに職務が卑き爲めに必ずしも女學校卒業生を要せずたゞ熟練にのみよりてするもの故十二三歲の頃より慣れたものの方反つて好成績である兎角學問があると之を鼻にかけ高慢となる爲めならん、

女工と結婚とについてですか

本年一月より六月までに銀行を止めた方々は大概結婚の爲めであるまた結婚してもゆきかゝり上就職を繼續するものもあります、又結婚するにも相當のところに行く樣であります、

女工と修學ですか

女工の唯一の目的は終業時早きを以て傳習所等に通

學するのでありますこれも相當に成功したものがあります故に自活して學業を修め得るを以て好都合でせう他の所では仲々そんなわけには參りますまい、

將來の女工についてですか

これまでの經驗によれば女子の發達につれます〳〵業務を擴張する必要がありますが簿記などは女子にても十分に出來るとゝ思ひますがかくするときは漸々男子の職を蠶食する樣になりますと云ひてはほゝ笑まれたり、(在文責記者)

持參金の遣ひ方

荒木暢

持參金といふと何と無く耳障りがするやうであるが、これを婚資と捻ると何うやら高尚らしく稍ハイカラらしく聞き取れるのであるが、何方にして見たからが五十歩百歩の話で、詰る所は一つものである、それを何うやら世間體の良いやうとでも云はうか、持參金と云はないで婚資などゝ堅く捻るのであるが、元來この持參金といふものは、男子が婿に往かうが、女子が他家へ嫁入らうが、貴賤貧富の度合によつて多寡の差ひこそあらうとも、必ず携へて行つたに相違ない、然るに何時の頃よりか、之を携へて行く者は女子にのみ限らるゝやうな考が世の中を支配して、今尚ほ其が勢力を得て居るやうである、それも一つは女子の側に其が多いからでもあらうと察せらるゝ、

マア其樣詮議だては何方でも宜しいとして、讀者は皆女子方であるから、矢張今こゝでも女子方の上からお話を致さう、

日一日と文明が進むと共に、社會は複雜となつて行くのであるから、女子が此世に處するの途も以前とはスッカリ變つて來たのである、乃で此多端なる世事に當つて克く其務を完うし、女子一生の間は如何にもして他人の厄介に爲らないやうに心掛けなければならないのであるが、その多き中にも、

殊に注意すべきは財產に就ての覺悟である、この財產といふものは一身を護るの唯一の武器であつて、瞬時も之を忘るゝ事の出來ないものであるから、この持參金に就ても昔日のやうな散漫な考で居つてはならぬのである、

世の女子たる者が皆孰れも生れながらにして富貴の家に人となりて、謂ゆる深窓の裡に育つて世の風波といふものを知らず、父兄の威光に因りて良い家に嫁づいて、幸ひにして其連添ふ良人が善くて、末長く幸福であつて呉れゝば、別に何のイサクサも無いのであるが、世間の實際は爾う判に捺したやうな註文通り誂らへ向にばかり行くものでは無い、良い家と思つて片附いた先方が、存外の始末で中途に破產し零落するやうな事が無いとも限らない、又善良と思つて契つた良人が存外の沒分曉漢であつたり、或は不品行で愛情の無かつたり、或は舅姑が餘りに昔氣質といふよりは寧ろ頑冥で、如何にも人情を解せないと云ふやうな事は、必ずしも無いと限られないので、是等の內、たとひ一つたりともあるとすれば、开は嫁の身に取つては大問題と云はねばならぬ、況して其等が俱に共に襲ふて來たとしたならば、嫁たる者の心は何うであらうか、固より斯る際にも及ぶべきだけの忍耐をなし克己の心を揮ひ起して其身を處せねばならぬ事は萬々であるけれども、人の身の上といふものは種々の事情のあるもので、不本意ながらも破鏡の嘆に接することもある、これ實に人生悲痛の極であるから、何人も是には同情を寄せない者はあるまい、況して其父兄は尙更の事である、去りながら單に同情一片のみでは何とも致し方が無いので、其者の身の立て方を講じて行るのが何よりも急務である、その焦眉の急に應ずべきものは即ち財產に如くものは無い、然るに一たび女子たる者が他家へ片付いてから還つて來た時には、まだその財產が父母のものであつて呉れゝば良いが、殊によると父母の自由にならぬ場合がある、殊に父母の家には嫁も、あれば若夫婦もあれば、また其間には小兒

のある事もある、して見れば其家の實權といふものは既に若夫婦の手の裡に歸して了つて、最早父母とは利害を同ふしないといふ事情があつて、財産の一條は甚だ面倒である左すれば終生兄弟の厄介になりて、父母の家に寄食者とならねばならぬが、それでは女の身として恥辱この上も無いのであらうけれども、さうかと云つて强て財産の事を持出せば、父母の家に風波を起す事ともならうから、それでは娘の身として忍びないであらうと云つて此儘に厄介になつて居るのも苦しい如何したものであらうかと、獨り涙を袖に包んで泣き明すといふやうな實例は世間に澤山ある、是に於て始めて人情



の冷熱や、世態の反覆常ない事をしみ〴〵と知るであらう、併し是は滅太に有る事では無くして、萬に一つよりは多いが、然う有るものでは無い、

一體女子といふものは、一たび他へ嫁だならば、少し古めかしいやうだが其家を自己の死場處として生涯離るべきものでは無い、斯く根底を定めて置いて、若しも種々なる事情の爲に家政が衰へたとしたならば、如何して夫を挽回し、延て子女を教養して行く事が出來やうか、斯樣な場合に主人は勿論だが殊に一家の主婦たる者は非常な決心が無ければならぬのであるが、何うも深窓の裡に育つた女子は、比較的世の中の艱難に耐へる力が無く、且つ人事の實際に馴れて居らぬから、從つて一層の窮苦を感ずるのである、斯る時に唯一の燈光と憑むのは非常準備金の外は無い、即ち婚資を活用せしむべき好時機と云はなければならぬ、

併しながら廣く世間を見渡す所が、婚資即ち持參金といふものが、然ういふ危急の場合に活用せられたといふ實例は殆んど稀で、大抵は何時とはなしに鼠が物を曳くやうに、チクリ〳〵と良人の爲に消費せられて了うか、或は嫁自身が贅澤なる身の周圍の雜用等に費盡されて了ふのが普通の樣に見受ける、それでは何も持參金の必要が無いのみならず、寧ろ初めから持つて行かない方が可いのである、

元來持參金といふものは、父母が其娘の前途を心配して、萬一の爲の要愼として與へたものである、而かも之は自分が貰つたものだから、使ふと遣ふまいと隨意であると云へば夫迄だが、その親の眞心を無にするといふ事は、これ子たる者の行ひとは云はれまい、斯ういふ事を云つては或は他人行儀を勸める樣に思はれるか知れないが、嫁たる者は婚資を持つて行つても、

危急存亡の秋の外は出さないと、堅く心に誓つて、深く簞笥の底か何かへ藏めて置いて、決して平時は良人にも子女にも知らさないやうにして措くが宜いと思ふ、

よく世間では誰某さんは幾ら〳〵持參金を持つて行くさうだなど丶吹聴し、男子の側では又それの多いのを望むといふのが今日であるけれども、抑も男子たる者が初めから嫁の持參金を當にするといふ事は、實は自己が獨立心の薄弱である事を表白するものである、言を換へれば、斯る男子は終生の苦樂を共にすべき妻を娶るのでは無い、乃ち其持參金を主として歡迎するのであるから、女子たる者が良人を擇ぶにも能く〳〵其邊に注意をしなければならぬ、元來女子が男子に身を委すのは何が爲かといふに、更めて云ふまでも無く、即ち人倫の大義を完うせんが爲であるのに、先方は愛もなく情も無く、たゞ一片の黄金を崇め迎ふるといふやうでは、末の案じられる事は火を睹るよりも明からな譯である、

假りに然ういふ男子に嫁いだとすれば、その妻たる者は取り分け要愼して其巾着の口を開けないやうにしなければならない、然るに女子といふ者は割合に意志が弱くて感情に脆いものであるから、連添ふ良人よりチョットと云はれると、知らず〳〵一時の融通をするといふやうな事は、素より夫婦の情愛上止むを得ないのであらうが、其所が心の締め處で、如何に良人から強請せられやうとも、決して非常な場合の外は厘毛とても出金をしないと斷然と刎付ける位の勇氣を有つて居らねばならぬ、

併し生涯無事平穩で過して、その非常の準備金に手を附けないで濟んだとすれば、それは子孫に傳へて矢張萬一に備へしむるといふやうにすれば、彼等もまた時ならぬ不幸に遭遇したとしても、決して悲慘の淵に沈むやうな事は無いのである、

母と妻

若宮宗卿

一家を經營して行く上に付ては、男子も女子も共に却々その責務を果すといふ事に對しては多方面に働かねばならぬのである、殊に家庭といへる上から

云ふ時は、女子即ち既に結婚した後の女子は自ら其身を兩様に働かせねばならぬ、即ち良人に對しては内助の功を捧げ、その子女に對しては教養の責に任じなければならぬので、それが當を得れば乃ては賢妻の旨に適ひ、良母の任を完うしたものとなるのであるが、その良妻といひ賢母と名くるのは暫らく其對する處に依つて其名稱を異にするまでの事で、要は一人の双肩に掛つて居る仕事に外ならぬのである、此の中良妻の事に就ては隨分世間の方々が論ぜらるゝのみならず、何れの女學校などでも口喧しくせらるゝので、多少の非難はありとしても、何うせ初めから爾う完全に行くものでは無い、その中には自然に慣れて良妻の資格も備はつて行く、けれども賢母といふ迄でなくとも、

　普通の意味に於ける母親

といふ事に就ては、良妻といふのも理論では無い實地の事に屬するのであるが、母といふ事になると妻といふよりは一層巧妙な纖細な技倆に屬するので、

世間の諺にも、

　子を持つて知る親の恩

といふが如く、實際局に當つて見なければ容易に其眞義を解する事の出來るものでは無い、學校の教師その人でも、或一部を除くの外、眞に此母たるの意義を解しては居らぬ、その眞義を解した事の無い人が、僅かに文字上の智識を假りて、彼であらう斯うであらうと揣摩した説明を試むるのであるから、如何して之を聽く者をして十分其意を體せしむる事が出來やうや、それは無理な注文と云はなければならぬ、そこで之に對する世の注文も却々少なく無いやうであるが、私の見る所では、凡そ母たる者は左の如くあらねばならぬものと考へる、

　まづ第一に母たるべきの要件は何であるかと云へば、一言にして之を掩へば、教育の有ると無いとで其適否が定めらるべきものである、再言すれば、教育を享けたる女子は母たるの資格を有する者であるが、之に反して教育なき者は其價値が無いものと言

ひ得ると思ふ、既に母たるべき此第一の要件を缺いで居るものは、よしんば幾人の子を生し、如何なる才智を有し、慈愛に富み、巧妙なる女子の手藝に達して居たとても、それは斷じて母たるに適しない者と私は推定するに憚からないのである、此く言はゞ如何にも私の所說は極端のやうであるが、一應夫等を形體上の母として認めないでは無いけれども、それだけでは禽獸と少しも撰ぶ所は無い、依つて私が謂ゆる母といふものでは無い、何故かと云へば、前述の母たる要件を具ふると否とに由つて、

子女に及ぼす利害

といふものは實に驚くべき影響があるのである、凡そ世の母たらん者は、誰一人として其子の丈夫に且つ賢くならん事を希はぬ者はあるまい、如何に情けの淺いものでも、其子を愚かな者とし、或は虛弱の者に仕たいと祈る筈はあるまいが、併しながら自己が無學の爲に子供の育て方や、又は敎へ方を知らない母親は、その心の中では爾う思はないのでありながら、而かも行ひの結果は自ら之に似寄りの處置を爲す事がある、之は理屈で無い、其例は世間に澤山ある、子供の言葉を聞いて學校を休ませながら、常磐津の稽古に遣るなどは決して珍らしく無い、男の子なれば學校を休ませても劍舞の稽古は强うるのである、

よく世間で子供は育て難いといふが、子供といふものは決して育て難いものでは無い、至つて育て易いものである、といふは、總て何物をも問はず、新たに斯世に出づる生きたるものは、皆元氣が旺んであるから育ち易いのである、試みに草木の例を以て考へて見れば、最も明らかに此理が解かると思ふ、彼の菜や大根のやうな新芽に生氣の旺んなものを見ても、又その他の草木でも、凡そ新芽の出づる所には元氣が集り、活潑にして自ら發達するの勢といふものは實に盛んなるものである、若しも中途で人が之を損傷さへしなければ、すべての物は立派に成長して、枯れるといふことは殆んど稀である、

人間の新芽とも云ふべき幼兒の成長する事は、また正に此くの如きものであるから、彼等は極めて育ち易いのである、然るを育ち難くするといふものは、畢竟母親たるものが教育の無いのに基くのであらうと考へる、

百姓が米を作るには先づ稲の作りやうを知つて居る、若しも之を知らないで耕作したとしたならば、稲は忽ちにして枯れるに相違ない、又植木屋が植木を仕立てるには、先づそれ／＼植木の性質を知り、之に從つて相當の術を施すのである、もし之を知らないで培養したならば、植木は久しからずして斃れるのである、また一羽の小鳥を飼ふにもそれ／＼の學問が要る、昨今人々が翫賞する金魚を仕立てるにも、また其飼養法を知らなければならぬのである、誰が小兒に金魚やカナリヤなどを預けて其亂暴なる手に飼養させる者がありませうや、誰が素人に花や木や、稲や麥などを托して其無知なる管理に耕作を一任して置く者がありませうや、それは爲る氣遣ひ

は無い、もし有りとすれば其無謀を笑ふに相違ない、然るに未だ全く子供の育て方を知らない母親が、天地間の珍客たり、萬物の靈妙の長たる所の此貴き人の子を育てやうとして居る、實に危き事は此上もない事である、それゆゑに育ち難いのでは無くて、不幸にして早世の多いのは、無論當り前の事かと考へらるゝのである、

まづ母が子に對する初めから云つて見れば、産前産後の心得は如何、乳は如何程の分量に飮ましむべきか、牛乳又は羊乳等の良否は何によりて知るべきか、乳母の撰び方は如何、着物の厚さ薄さ加減は如何、稍長じて歯の生え初めの手當は如何、その他食物の種類および分量、睡眠の時間、應急の處置といふやうに、常に母たる者が心懸くべき事柄は、却々言葉や筆で盡されるものでは無い、而かも能く子を有たない前から是等の事を熟知した母たるべき人は幾人ありませうか、それは別として、是等の心掛けの無い母親が子供を取扱ふのは、棹の遣ひ方も知ら

ない者が舟を大海へ漕ぎ出すよりも危險な話で、是ほど險吞な事は無いと考へる、たとひ其心は蜜のやうでも其手が刺のやうであつては、觸る所の者は其を傷ふより外は無いのである、それと一つで、何うして其子を害せずして止みませうや、世の多くの子供が育ち難いのは、畢竟その母が爲す業であると思はれる、

今は古人となられたが、曾て英國に名高きスペンサーと云へる博士は、世上で母が殺す子供は數十萬あり、たとひ殺さずとも、母が病氣にさせる子供は數百萬ある、また縱んば殺さず、病氣にさせずとも、母の手で弱くする子は數千萬ある、これ皆無學なる母が爲すのであると云はれたが、實に名言である、幼兒を喪ふたる母親が、棺の前に泣きくづをれて彼れの此のと無情を喞つのは至極尤ではあるが、飜つて考へて見れば、その子を殺したものは無情の風でも無ければ、非道の天でも無い、今し棺前に涙に暮るゝ所の母親自身である事を覺らない、



一體子供を愛すると云つても、その愛を施す所の術を知らなければ却つて災ひするので、所謂贔負の引き倒しで、母の軟弱き手は變じて毒刄となり、その溫柔なる腕は化して縲絏の繩となり、その心地好き膝は死の床となるのである、故に母として無くてならぬものは、單に親切なる愛ばかりでは不可ぬ、之は何れの母にも通有のものであるが、それよりは、此愛を當然に現はすべき智惠が大切なのである、ルーソーは曰はれた、母に要するは單に其愛にあらずして、學びたる智惠を備へたる愛に在りと說き明されてある、

抑も吾愛子の身體を傷害するのは人情に戻るの甚だしいものであるが、假りに夫は忍ぶとしても、その精神を傷害するに至つては何とも言ひやうが無い、元來人の人たるは其心の立派なる點にあるので、心が若しも其美を失つたとすれば、身體は如何に強壯でも、それは誇りとするに足らない、といふものは、表面にこそ見えなくとも、內面の心といふものに罅隙が入つて居ては仕方が無い、僞物である、僞物は完全とは云へぬ、その僞物には誰がするかと云ふに、是また無學なる母である、例へば、大人と違つて子供は見るもの聞くものが珍らしいので、時としては走つて來て、謂ゆる鬼の首でも取つたかの如く母親に告る、而かも母親は何そんな物が珍らしいかといふ風に一言の下に刎付ける、是等は子供の興起心を挫くので甚だ宜しく無い、のみならず、時としては母親たる者が、子供の心を忖らずして無暗に何か注ぎ込まうとする、丁度昔し支那の國の一人の農夫があつて、ある日の夕方大層疲れたと言ひながら家に皈つて來ると、その父親は何で其樣に疲れたかと訊ると、如何にも自分の家の田甫の苗は、餘所のものに比べて小さいから、今日は一株〳〵抽き拔て來たといふ寓話があるが、之と同じく、急に其子を悧巧にしやうといふので無理に詰込まうとして、啻に心を歪める

のみならず、その身體までも弱めるやう仕打に出づる者が尠なくない、是また母親の無學が子供の心の發達の模樣を知らないのに基因するのである、
此く數へ來ればまだ〳〵澤山あるが、賢明なる諸姉は一を聞いて十を曉らるゝ事であるから、此他は凡て御推量に任せるとして、一先これで筆を止め、折もあらば何かまた更めてお話を致さう、

季節の調理

霞袖女史

鯉の洗ひ

初め三枚に卸す前に皮を去り、片身を切る時は、脊を自分の方に向けて、庖丁を腹の方へ走らせ、他の片身を切る時は、前の時と反對に、庖丁を手前に引くやうに使ひ、一分位宛に薄く切り、之を金氣のある井戸水にて能く洗ひ、約十分か十五分間の間に四五度も水を取替へて洒せば、肉がハゼルなり、それを見斗ひ、今度は清水に洒し、それより皿に盛り、皮は熱き湯に入れると、捲くれて丸くなる、それを十分水で洗ひ、二分位づゝに切り、そして褄の換りになせば妙なり、之は云ふまでもなく山葵醤油にて食するものとす、

鯉のサワ煮

先づ鱗をひき、尾の方より切るべし、尚は委しく云へば、調理せんとする鯉の脊を自分の方へ向け、頭を左とし、一尺位のものなら、厚み六七分位づゝに、尾の方から切り、五つ切り目位の處、腹の眞中の少し上まで來た處で、膽を拔く事を忘れてはならぬ、之を拔くには水の中で、二本の指で拔き取るなり、左すれば誤つて潰しても、決して苦味の附くものでは無い、それから煮る時は、味醂と砂糖とを適宜に入れ、水は成るべく多く入れてグッ〳〵と煮詰め、火が十分に透つて軟らかくなつた處で、醤油を適宜に入れて味を附けるなり、

鯉味噌汁

鯉味噌汁を拵へるには、鱗は引いても引かないでも可い、併し鱗を引けば煮えが早い、之は煮れば煮る程旨しくなる、養魚場の魚であると、鱗を引かないでも早く煮える、天然生のものは煮えが難い、殊に中川邊りの鯉となると、河に藻があるせいか、鱗が黒くて硬いから、鱗を引いた方が良い、併し鯉の濃醤は、鱗を引かない方が法であつて、一晝夜も粉炭の極軟らかな火にかけて煮ますと、頭も骨も箸でチギレルやうになるから、鱗位は何でも無いが、之は中々實行し難い、

鮒の洗ひ

大きな鮒を洗ひにするには、庖丁の仕方は矢張鯉と同樣で、山葵醤油で食べるのであるが、肉は血合が桃色の濃い色で、之が鮒の證據で、そればかりでなく、鯉と違つて非常に生臭い、此生臭味は洗ひにしても取れない、

胡瓜もみ

總菜の胡瓜もみは、生鰹節か赤貝を入れて濟むが、客に出すには、少し奮發して他の魚を入れると可い、その魚はすべて肉の白いものに限る、それを卸し身とし、皮をひき、鹽を少し振かけおき、次で水にてよく洗ひ、それを細く小切とし、酢に十分乃至十五分間位浸け置き、のち上げて用うべし、

胡瓜の薄葛椀

大きな胡瓜の前後を切り捨て、薄く皮を剝ぎて竪に切り、腸は其儘となしおき、種子の大きなものは之を取り去り、小口切となし、鰹節汁か又は水、何れなりとも随意に用ゐて、胡瓜を煮込み、色の變りし頃、砂糖と醤油にて味を附け、葛を水にて溶きたるものを加へて薄葛汁となし、之に前にほぐし置きたる生鰹節を適宜に入れ、生姜の卸しを吸口となして用ゐるなり、

鮎の魚田

鮎を丸身のまゝ串にさし、大いなるは好き程の數を横貫しとし、火に炙り、燒けたる後、味噌を附けて乾かすべし、但し味噌の拵へ方は茄子のシギ燒の

味噌と同様にすべし、

鮎の切うるか

鮎をよく洗ひ、極薄く脊越しに切り、頭及び尾先を去り、腸及び子は其儘におき、凡そ鮎のかさ一升位なれば、鹽五合位を手にてよくむらなきやうもみ合せ、後桶におし付置くなり、但切うるか澤山に漬けたるほどよきものなり、去りながら、澤山といふともそれも程のものと知るべし、

かつをの麹巻

松魚の麹巻は、松魚の新らしきを腸を去り、腹を割り、脊骨の肉まで刀を入れ、腹より口、又皮へも薄鹽をふり、麹と鹽と等分に合せ、腹より口まで埋め、灯心草にて巻き、むしろに包み二三日經ちて、上を下に飜す、鹽よくなれたる時は、味好きものなりとす、

鰹の皮の漸焼

鰹の皮の漸焼は、皮へ少し身をつけ、たう芥子醤油又は山葵醤油付焼にして用うるなり、但し鯛、鮭、鱒の類は右の仕方にてよろし、何れも青串にさして用うるなり、

梅が香鰹

梅干を洗ひ、出しと酒にて煮、醤油少しさし、花がつをゝ入れ、扨取上て、鰹てまかにたゝき、ばら〱する程にして、梅にまぜ用うるなり、

なまり節丼物

なまり節を小口より厚く切り、赤味噌を濃く摺り、酒にてのばし、水嚢にてこし胡椒の粉を入れて煮る、

林檎の麺麭

はじめに饂飩粉を鉢に盛りて、その眞中を凹め、これに食鹽わづかと清水一合半ばかりとを加へ、能く捏ね、めん棒を以て、薄く壓し延ばし、かくすること再三再四して、大抵一二分の厚さとなし、之を陶器の皿若くはブリキの器に布きて、中に林檎の外皮と菓心とを去りたるものを入れ、處々に牛酪の小さき塊を點じて、上より白砂糖をふり、全く其包皮を覆ひて、周圍の出入を等しく正しく切り去り、火

室に入れて一時間程蒸焼にするなり、但してはあながち林檎のみに限らず、梨、桃、梅、櫻果等にても同じ製法にても拵らへ得べし、たゞマルメロの如き其菓味の硬きものは、砂糖の液にて煮て置くか、あるひは罐詰品に用ゐるときに非ずば宜しからざるものと心得らるべし、

米國少女と夏季休暇

小原　保

七十名の女學生が夏期休暇を利用して日本に來るといふ米國通信があるさうな、富の力の強大なる米國だけに其麼なことは珍とするに足らぬかも知れぬ費用を顧みない消夏法ならば別に方法を講ずる迄もないが、出來る丈け經濟的で實用的で、愉快で衞生的で興味の多い方法は何人も聞かんと欲する所だらうと思ふ、本號に於ては米國少女が自己の消夏法實行の景況を報じたる書簡に譯出して紹介しやうと思ふ。

(一)

「われ等四人は今海濱に暮し居り候われ等の生活は體面もなく其結果を御報するまでに經濟的にも衞生的にも成功いたせしものと信じ居り候、われ等四人は新鮮なる空氣を思ふまゝに呼吸し、まゝ事のやうに自ら炊事をして自ら、食し散歩も游泳も讀書も共にし大に語り大に笑ひつゝ、稚子のもとに歸りて早や二月を送り申候。われ等の家庭は室も廣く、あまりむさくろしくもあらず庭は見渡す限りの海原なるに口小言きく主婦もなく、はしたなき奴婢もなく朝夕愉快の氣に滿ちたるがわれ等の特色に候。經費とても頗る安値にて洗濯ものも他へも出さず自らすゝぎ居り候。只々肉類のみは得るに困難にて候も新鮮なる魚肉と野菜とには事缺ぎ不申、値も亦市中よりも遙かに安く殊に山苺、黒苺、オランダ苺の品多きはうれしく候。

猶ほうれしきは、附近の旅舗に御止宿遊ばされ候

美しき老婦人がわれらの生活を羨まれ同居を求められたることに候。明きたる室わるまゝこゝろよく御希望に應じ候處、初めのほどは御食事のみは旅館にて遊ばされ候ひしが食事をもとの御懇望、これも相談の上うけがひ申候。今は「ベッテー伯母様」とてわれ等の母人の如に親しく。猶ほ御辭退申し實費丈けと申し候も一週八圓づゝの御補助われ等の經費は益々少額となり申候。最後に御一報申すべきは一日ゼアン孃が散歩より



歸られ新らしき報知にわれ等の眉を動かしめしことに候。そは旅館の客人達が砂糖菓子を得がたくて困り居る事實よりゼアン孃の計劃に候。其れよりわれ等は學校にて習得し丈けの智識を搾りて砂糖菓子製造に取りかゝり候處どれも〱一斤八十錢許りの品となりて出來上り、かくてはと一時は躊躇ぎ申候も兎にも角にもと旅館に送り候。其結果は又意外にて注文山の如しとも申したき程は

て某旅館などは一日一函づゝの需要發起人のゼアン嬢大得意にて歸宅の折までには土產物をとゝのへても新刊の書籍二三部づゝ購ひ得べしなど鼻うごめかし居られ候。

來夏は大方の姉君達われ等の方法をまねばれてわれ等の如き愉快を得られしとの御報告承りたくと今より首さし延べて待ち居り候。先はうれしさのあまり右のみあら〳〵かしこ。」

（二）

「われ等仲好五人の中二人は學校果ると旅立たれ候ゆゑ殘れる三人は市を出でまじと約束いたし何かしらと面白き企をいたし候。我等のうち一人は必ず一週一日は在宅せねばならぬ定なればと、水曜日より土曜日迄を一期とし互に二人を家に招ぐことゝ致し候。

先づ妾と他の一人と過る水曜日の晝近かき頃衣類を入れし化粧袋を車に積みて友かり參り申候。行き着くや二人は兩親に向け安着の報を出し申候、友の兩親は僅か三丁位の距離に居るが面白く候はずや。其他多くの友人知人にも繪端書など贈り申候。最早われ等は友の家族にて自分の家の近くへも行きてはならぬ約束物見遊山杯ては他家よりの招待にも友の家族としての待遇實にうれしく候。

來週の水曜日は妾が家に他の二人を招ぐ日、今より如何にしてか樂しませんと心ときめかせ居り申し候。

（三）

「妾は遊覽地又は避暑地に旅行する代りに知名の都市訪問を思ひ立ち申し候。先づ其土地に到着の日は計劃に暮す定めにて地圖、遊覽案內、旅宿の僕婢等より見聞きして目錄を作るために費し申候。大體雨の日、晴の日、夕景夜景等に大別いたし、圖書館演劇、商店、博物館美術館等は雨の日の部又は夕方の部に組み入れ、舊蹟、公園、記念碑、有名なる街路、建築、舟遊、觀覽車の如きは晴天の部に編入するなど一例にて。固より定めなき天候、時定めの場

所等により目錄に多少の變更は何時もいつも免れぬ處に候。

（四）

「妾は夏景色の綠より思立ち妾が居室を綠に飾らんと數年前より旅毎に持ち歸る品として綠ならぬはなき有樣に候、綠平る水彩畫景、綠の一輪挿、筆立、文庫、文挾、置物、綠の手拭、夏帽子、何々は、何年何月何日何時何れの土地、何れの町、何店にて購ひしかは綠の布に蔽はれたる机の中の綠の表紙の手帳に記され申候。追懷も亦皆綠り涼しく人知れぬ樂みは一室の内に籠り居り候。

（五）

「妾は暑中休暇中の旅行のみならず修學旅行其他夏冬の別なく歸りの苞は總て書籍と定め申候。訪問の土地又は其附近を背景として其土地の著者が書き下したる文學書を得たる時の嬉しさは格別に候。旅立つ前に圖書館などにて探せば土地々々の風景、出來事に關したる著書、小說など見出すこと容易きことにて斯くて買ひ求めて書棚に飾りて讀む時は永き記念ともなり興味も亦一層深きやうに感ぜられ申し候。

（六）

「學友五名夏期倶樂部を組織致し候目的は相互の親愛なる母人達及或友人を慰藉する事に候。每週所定の日に早朝より豫め定め置きたる家庭を訪問いたし編繕補綴等より母達の世話燒くる事五人の力にて協力せば母人等に一週間位の休息又は旅行の餘暇を與ふると容易きのみならず五人一家に會する機會は我等にも無上の樂しさを給し申し候。猶ほ幼兒多き母達など殊に喜び申候は御驗しあらばしるきことと存じ候。

（七）

「妾は家居してうるさき蠅驅除の妙法を工夫して殆んど暑さを忘れ居り候。近頃發見の一法は次の如くに候まゝ皆樣御試しの上妾が苦心の跡御笑ひ被下度候。　妾の新法は極めて簡單なるに恐らく諸姉は御

一驚遊ばさるゝことと存じ候。先づ藥種店より拉芬佗油を御求め遊され、小さき皿に熱湯を注ぎ其中に小形の海綿を置き其上より油を數滴御注ぎなさるればそれにて十分に候。固より拉芬佗油は藥用香料に候へば其香氣薫香水に似て氣もちよく、しかもうるさき蠅を驅除すると奇妙に候。一度驅逐致し候後は入口又は廊下に置けば再び襲來すること無き樣に候

（八）

「妾等は海濱に宿り致し居り候、各自寫生帳携帶にて木炭、水彩、ペン畫の別なく各自の作物を時々展覽しては品評して暮し居り候。或日食膳に介類のありしに或一人の思ひつきにて「She sells sea-shells」(彼女は貝を賣る)と申す語を早口に繰返し〳〵言ふことの遊戯を初め其日に言誤りたる二人が相互に一人の知らぬ間に相手の肖像を寫生をなすべき罸を與へらるゝことと相成り半日位は其爲に面白おかしく暮し居り申候。

（九）

「妾等數多は某避暑地に宿り居る學友に候。或日一人よりの廻狀に明朝は睡氣會を催し候間朝まだきの睡氣成る丈け醒まさずに是非々々との招ぎ、夏期の物うく睡氣のみ催すに思ひつき如何ならん殊には服裝などは朝のものその儘との注文いぶかしき限りと恐る〳〵參會候處其日の主人役たる某孃は寛かなるキモノにて中庭にわれ等を迎へ申候。青簾垂れこめたる中に釣床や柔かき褥付きの長椅子や午睡に人を促すげに見ゆるに先づ目錄の第一は「欠伸競爭」とて可笑さを鵜の毛も見せず最も睡むげの欠伸せし人に賞あるべしとの告知、折角喉元まで出かゝりし欠伸も驚ろいて胃の底まで逃げ込みし心地致し候。次には狸寢入の競爭にてこれには一番年下の一人が眞の睡りに陷りしが愛嬌にて表裝見事なる小說一部其賞として與へられ申し候。斯る競爭には審判者の困難いかばかりかと思ひやるだにねむけも醒め申すやうにて面白く候。アービングの所謂午睡の二十年ならずとも二十分時も人々の狸寢入見極むる

主人役の骨折りいかばかりつらさかと存せられ候。
興はこれにて猶ほ盡き申さず食堂に案内せられて主人役の申さるゝには、あまりの睡たさ朝餐の用意遂怠りたれば各自厨房に入られて勝手にしたゝめられよと又しても人驚かすことよと乞はるゝまゝに入り見れば其處には未だ付け盛りこそせざれ美味の數々より氷、茶、レモンの果まで取り揃へあるに先づは安心致し各自に取り出して食卓に配置いたし、いざ食事に就かんと致し候時、皆樣は先刻の午睡の間に如何なる夢を見られしかあから樣に述べられたしとの宣告、これが今日の企ての最後といふ申添こそあれ皆々顏見合せて膽冷し申候。何れもわれこそは今日最後の功名せんと食事も忘れて考ふる樣おかしく夢らしからぬ夢もの語りも多かる中に最も巧みに其日の催しを綴り合せて多くの人の今日の樣々のことども夢の夢のやうに言ひ出して人笑はせ候が第一の人氣にて「アリス、イン、ウオンダーラント」一部の贈與を受け笑ひのうちに散會いたし候。今もなほ其日の物語りにて面白き日を暮し居り候。

新式菓子製造法

梅田矯菓

卯の花捲芋饅頭

其膜皮調合率、白砂糖參拾匁、生甘藷纎維糟乾粉廿匁、片栗粉參拾匁、炭酸安母尼亞粉壹匁、小鷄卵貳個外に並割芋餡棒入用

先づ前に書いてある分量の塊ない白砂糖參拾匁乾いた鉢中へ投れ次に炭酸安母尼亞粉末壹匁と片栗粉參拾匁と生甘藷纎維糟乾粉貳拾匁等を加へ手頭で能く擦交せ合してから小粒の鷄卵を二個ほど割落し徐々と掻まはし練混せて堅目に捏ね集結めて片栗粉を少々撒布いた箱中へ掬ひ出し離と折返しつゝ周圍に粉を篩し圓めて平板上へ出し其の上面を麪棒を持つて前後兩横と順次に壓轉ばし厚身壹分五厘均一位で成べく角形に大きく延べ擴げ、其上元上へ口徑壹

寸長サ六七寸程の並割甘藷餡棒を載せ上向に壓轉ばし餡一杯に捲附け捲餘は庖丁で切除け其續目を摘み附け合し其兩側を薄皮二枚で挾み持つて濡布巾を敷延べた輪蒸籠内へ取入れるやうなして充分沸騰して烈蒸氣を發する飯焚釜縁へ蒸籠底輪を組合し掛け上に釜蓋を載せ凡そ、七八分時間充分蒸膨脹して程を計り、上蓋を外づし熱傷せぬやうに氣をつけ、蒸籠横縁を兩手で確と抱合ひ持つて釜から下ろし、寸緒風を當て稍熱氣を拔き濡手で蒸物を摘み取離し胡麻油を少許綿布に浸して塗布いた葭簀上へ列らべ更に其周圍の上皮を一重指頭で剝ぎ離し去つて後庖丁を濡布に撫つけ持ち、幅七八分位づゝに引切りて斷ち離し其切口を斜に附列らべて菓子皿へお盛りなさい

但し生甘藷纖維精乾粉は芋葛を拵らへる際の副産物でありますが交せる時は能く揉碎してお入れなさい尚甘藷並割餡の製法は前に書いてあります、

宇治捲芋時雨

其原料調合率、並割甘藷餡貳百匁、微塵粉拾貳匁

碾茶粉貳匁内外、別に並割甘藷餡を貳百匁用意すべし

先づ並割甘藷餡を貳百匁琺瑯塗鍋へ投れ清水數滴加へて七輪烈火に掛け、杓子で間斷なく攪まはしつゝ暫時煉返して成べく濃堅に煮詰て下ろし板上へ掬ひ出し熱氣を發散し其中へ碾茶粉を貳匁ほど入れ交せ縁に着色し尚微塵粉を拾二匁加へ揉混せて後壹分角目位の荒い編目の裏漉篩目へ上げ(篩下には竹簀へ洋紙を敷き置き)平掌で徐々と擦漉落し次に漉出した朧餡を先の突つた竹箸で、厚身參分位で幅參寸長さ六寸位の角狀に均らし其手元餡上へ口徑壹寸長さ六寸程の並割甘藷餡棒を横に載せて下敷の簀を上向に捲轉ばしつゝ餡捧全體に捲附けて寸緒握締めて暫時風に曝し凝結めて後庖丁を濡布に撫つけ持つて幅五分位づゝに引切して斷ち離し、其切口を斜に附合し列らべて菓子皿へお盛りなさい、但し微塵粉は菓子炒種製造職又は菓子商で求めらるべし



余は只一人、とある荒漠たる野をさまようてゐた。時しもあれ吾が後ろに當つて、輕い用心深い足音が聞えて、誰か自分の跡を蹤けて來るやうな氣がした。

振り返つて四邊を見廻はすと、一人の小さい腰の曲つた老女が、全身を灰色の繿縷に包んで、其間から只黄色な、鼻の尖つた、齒の抜けた皺だらけな顔ばかりを露はしてゐる。

自分はつか〳〵とその方に進み寄つた……、すると向ふも亦立ち止つた。

「誰だ、何が欲しいんだ、お前は乞食なのか、それで何か俺れに惠んで呉れといふのか」と尋ねたが、一言も答をしない、で自分は老女の上に屈みかゝつて見ると、其眼は或る一種の鳥が、眩しい光線を避けて己の眼を守る爲に持つてゐるやうな半透明の膜を以て掩はれてゐる。

然しこの老女のは夫とは違つて、眼を動かす事も又開けることも出來ないのである……それを

見て、この老女は盲目であると自分は推測した。
「お前は何か俺に惠んで呉れといふのか、……………一體何うして俺の跡に從ひて來るんだ」と、繰返して尋ねたが、老女は前の如く默つて居たが只、少しく自分で後ろに退つた。
自分は向直つて、再び歩み始めた。すると又前と同じく輕い、パタ〳〵と偸むやうな足音が聞える。
「又彼女だ！、何うして俺の跡を蹤けて來るんだらう
と思つたが
「恐らく眼が見えない爲めに道を迷つたのだ、それで今自分に從いて、何處か人家のある里に出やうと思つて、俺の足音を聞いて、後から來るんだらう、さうださうだ、夫に違ひない」
と斯う、心中に附加へて考へた、
然し何となく不思議に不安の念は次第に自分の心を襲うて來るのであつた。今は、この老女は只單に自分に蹤いて來る斗りではなくて、却つて我を導いて左右に引き廻してゐるので、自分は知らずに彼女の思ふ儘になつてゐるのではあるまいか、とまでも思ふやうな氣がし出した。
だが自分は尙歩み續けて居た。されど見よ、吾が前に當つて……現に今踏んで行きつゝあるこの道の上に、廣く黑い…………穴のやうなものがあるではないか。
「墓だ！」
「あれこそ、彼の女が今自分を引き入れやうとしてゐる所のものだ！」
といふ考が、吾が念頭に電光の如くに浮んだ。暴々しう自分は振り返つて、再び老女と顏を合せた。こは如何に彼女の眼は明いて居る、然かも大きく殘忍らしい底意地の惡るさうな眼を剝ぎ出して、恰から餌食

を狙ふ鳥のやうに、此方を凝視めてゐる。

屈みかゝる様にして、能く能く能く老女の顔＝眼を見た。すると其押つ被さつてゐる不透明な眼も



潰れた眼も、物憂げな顔も一つとして前と違つた事はないのである。

「嗚呼この老女こそ自分の運命なんだ！

人間は幾何悶躁いても運命から脱し得ないのだ、それから逃れ出ることは出來ないんだ………」

と、つく〴〵思つた。

「何だ馬鹿なッ、出來るか出來ないか試して見なければ不可ん」

と、自分は方向を換へて一散に驅け出した。飛ぶが如くに走るのであるが、輕い足音は、依然として、ハタ〳〵と、後ろに聞える、然かもそれが一刻一刻と近づいて來る。と又前には暗黑な洞穴！

再び他に方向を轉じた…………が足音は前の如く後ろから從いて來る、そして又もや人を威迫すやうな黑い汚點が見える。

堪らなくなつて、自分はもう道といふ道は、何れでも搆はず、無暗に、宛然獵り立てられる兎のやうにぐる〳〵歩り廻つたのである。然し何時までも同じで、輕い足音も、暗黑な洞穴も少しも異なる所はない

「待て！この上は一つ彼女を騙してやらう、この上は自分は何處へも行くまい」

斯う考へて、直ちに地面に坐つた。老女は自分から二足離れて、後ろに立つてゐる。それを見も聞きもしたのではないが、只何となう夫處に居るのを感じたのである。

その間に、突然余は遠くの方から、例の黑い汚點が、自分の方に向つて漂ひながら徐々に近付いて來てゐるのを認めた。

「神！」

我は再び四邊を見廻した。…………彼の老女は、眞向に自分を見つめて、齒の拔けた口を、モグ〳〵させて、にた〳〵と嘲笑ふのであつた。

「もう逃げる事は出來ない！」　（終）



佐々木信綱先生選

晝顔

天

晝顔や馬追うてゆく野の木に
群り立てる雲の峰かな　　横須賀　柏原みな子

（評）空に雲の峰むらがり立ち、野にひろがほの咲ける盛夏の景色見るやうなり。

地

竹林とかけはひよる日盛を
我よとさけるひるかほの花　　名古屋　山根しげ子

（評）よみて心地よく感ずる歌にはあられど、着眼の他とことなりたるをもて採りつ。

人

笠敷いて富士見る人に晝顔の
花はまとひぬ裾野大原　　三河　橘たか子

（評）少し作りすぎたるやうのきらひはあれど景色ありてよし

秀逸

◎にはか雨日傘して行く田舎まち
低きまがきのひろがほのはな　　東京　堤いく子

◎あつき日をしのく濱邊の草かげに
涼しく匂ふひろがほの花　　秋田　三浦しや子

◎測量の旗もうごかぬ日さがりの
野中にさけりひろがほの花　　美濃　目島眞砂子

◎君が家と我家は凡十二丁
ひろがほつゞく野邊なへだてゝ　　千葉　益子操子

日盛りもいとはでいそぐ旅人の
ふと月にいりしひろがほの花　　神奈川　飯田白露子

讀者文壇

貝殻を家根にのせたる船宿の ◎ かきねのもとにひるがほの咲く　新潟　岩木芳子

砂原やつゞく小荷駄の馭上げゆく ◎ 埃にうもるゝ晝顔の花　相模　藤原下枝子

一むれの鵝草の後ゆいたましく ◎ ひき倒されし晝顔の花　岩代　岸野せい子

城あとや石の崩れのこゝかしこ ◎ ひるがほ咲きぬ夢みるさまに　秋田　長谷川叢子

つみ終へて少女のむれのかへりゆきし ◎ 桑畑あつし晝顔の花　美濃　長濱蘭子

あへぎゆきて馬に水かふ峠茶屋の ◎ 背戸にやせたりひるがほの花　岐阜　長濱ゆきみ子

日もさゝぬみはかのかげのしめりげに ◎ ひるがほちさく咲き出にけり　東京　平塚いと子

里の子は堤の上を雨ふると ◎ 手にしてはしるひるがほの花　東京　平塚白百合子

晝顔の花咲く丘の一つ家は ◎ くまなく戸あけ傘つくり居ぬ　下總　小澤すみ江子

百草のしほるゝ夏のひるさがりに ◎ ゑみこほれたるひる顔の花　靜岡　河合彙子

ひざかりのたへぬあつさの草むらに ◎ ひとりゑみたるひる顔の花　靜岡　中村しか子

草も木もしほれて見ゆるみなづきの ◎ てるひににほふひる顔の花　東京　吉岡[illegible]子

卒塔婆をれ石碑たふれし墓原に ◎ 一本さくや晝顔の花　岐阜　松岡君子

てり返す日かげいとはて葉がくれに ◎ さきいてにけり晝顔の花　攝津　有村紫方子

妹とふたりふみよむまどにさき初めぬ ◎ 青葉がくれの晝顔の花　攝津　有村とみ子

夕立の雨に少女子走り行く ◎ 袖より落つる晝顔の花　石見　山根直子

晝顔の花を摘みつゝ稚子二人 ◎ まゝごとすなり森の下蔭　飛驒　南みれ子

追わけや石文のほとり夏草の ◎ 茂みがくれに晝顔の花　南京　福田つる子

◎ 日燒せし旅人いそぐ野の小道うなだれて咲く晝顔の花　美濃　多田はな子

◎ なつ草の生ひて繁れる城跡の木蔭にさけるひるがほの花　飛驒　中西芳子

◎ 湯の里や笛の音おもき雨の日をうつむきがちに晝顔の咲く　岐阜　中村華子

◎ ふる井戸をおほふばかりのくさむらにやさしくさける晝顔の花　東京　石田りつ子

◎ 汲てこし桶の水にもうかびけり岩井のもとのひるがほの花　河内　木内敬子

◎ [illegible]ひとり釣さをたるゝ川岸に咲き匂ひたる晝顔のはな　河内　竹内久子

甲

○ 重荷負ひて山路をくだるやせ馬の手綱短し晝顔の咲く　横須賀　渡邊比佐子

○ 潮かぜにそみし面わに似たるかな いそへにさけるひろがほの花　東京　榊田けい子

○ たへがたきあつさによれし夏くさ にましりてやさし晝がほの花　名古屋　木下鶴子

○ 三とせぶり青葉の里の乳母訪うて れざめ樂しと見しよひるがほ　能登　栗倉一子

○ 人皆は得堪へがたしといほに入る時を得顔にひるがほは咲く　東京　小林春子

○ 川そひを日笠かたげてかへりくる子等のたもとにしほむひるがほ　名古屋　不破きみ子

○ かひこあみあらひてほしゝ背戸畑の日ざかりにさく晝顔のはな　美濃　篠島みゆき子

○ てりつゞき卒塔婆の板もわれて落ちし墓野にさけりひるがほの花　美濃　平岡かん子

○ ふる井戸のくちしゐげたにまつ はりてところ得がほに晝顔のさく　東京　高橋珍子

○ 海士の子がひろ餉食ひにと 急ぎ行く河原に痩せて晝顔の咲く　横須賀　高橋つれ子

○ 旅人もたえし夏野のひさかりをわが ものがほにさけるひるがほ　靜岡　松井冬子

○ 椎になく蟬にねむりし幼な子が 危ふくもてる晝がほの花　東京　杉浦浪子

○ 夏の雨ひと時ふりてひるがほに野風すゞしく蟬遠になく　東京　增賀龜子

○ しら瀧のしふきにあみで岩かけの蔦にまつはるひるがほの花　伯耆　錦織春子

○ あつき日のそゝろありきの森かげや 小川すゞしき岸のひるがほ　伯耆　錦織千代子

○ さみだれに舟つきわかぬ里川の岸のくつれにひるがほの咲く　埼玉　横田やな子

○ つはものゝ屍とゝもにいたはしく踏み にじられし晝顔の花　岩代　岸野常子

○ 亡き妹のかたみかなしき蝶塚にやさ しう咲けり晝顔の花　岩代　岸野菊子

○ 晝顔は築山陰の蝶塚に妹のかたみとやさしう咲きぬ　岩代　岸野登代子

○　兵庫　梶原京子
夏の日をおのがさかりの晝顔もおくつゆにこそさきまさりけれ

○　岐阜　渡邊ひろし子
茄子畑むしろおほひする日ざかりの背戸道つゞきひるがほのさく

○　美濃　傍島曉子
蟬をとる子等のほかには人も來ぬ雜木林のひるがほの花

○　岐阜　芳澤敏子
足音に蛙のかくれしふかくさのしげみが中にひるがほのさく

○　東京　安達安子
みな月の照る日にゑみてもてはやす人もなつ野のひるがほの花

○　美濃　松田文子
こぞの夏君と別れし川原道やかれこゝちに晝顔をみる

○　美濃　松田晶子
山深き谷の湯の宿石焼けて君住む野べに晝顔の咲く

○　下總　小澤蝶子
晝顔の上になよらに撓つくる霧こそなびけあけぼのゝ畑

○　東京　原　三幸子
もゝ草は色なく見ゆる夏のひにわかよとにほふひる顔の花

○　東京　西村直子
もゝ草のうらふれたてるひさかりにひとり時めくひるがほの花

○　東京　田代貞子
暑けれと萎れの時もわすれけりいまを盛りのひるがほの花

○　陸前　山形すみ子
晝顔は垣にしほれて野の茶屋の人は ねむれる眞晝時かな

○　伊豆　藤田秀子
堪へがたき暑さゞかりも 厭ひなくまさごづたひにひるがほの咲く

○　美濃　多田みず枝子
君が家かつ隣と知りしよりひとしほ戀し晝顔の野べ

○　美濃　多田まさよ子
晝顔の花にふれたる美しき清水を汲みぬうたゝれの夢

○　美濃　多田せい子
今日もまた晝顔に花咲きにけり君と語りしかの松かげに

○　岐阜　中村[illegible]子
橋の茶屋小大二ツが晝寢して川原に咲ける晝顔の花

○　厩井　牧かれ子
見るまへにあつさのまさる畑中にこゝちよげなる晝顔の花

○　長野　千村ちゑ子
古里やひるがほ咲く日椽先に糸くり居ます母の偲ばゆ

乙

○　攝津　磯村さだ子
木のかげに柴荷おろして賤の女がやすらふあたりひる顔のさく

○　青森　川合りく子
晝中のあつさにたへずさゝ川に面を洗へるわかき賤の女

○　神戸　松野みとり子
三とせぶり友歸りますけふあたり一房は咲け晝顔のはな

○　神戸　今西操子
晝顔の花咲く宿より宿かけていざ訪はまし旅の日暮り

○　名古屋　古東壽美子
つくろはぬ背の影の板塀に晝顔さけり三ツ四ツ貳ツ

○　兵庫　古東靜子
あへぎつゝ賤の男いこふかたそばのやれ垣もれて晝顔のさく

○　下總　秋月[illegible]江子
すれて咲く夏ひるがほの身にも侑ものゝなさけをれがはざらめや

○　美濃　西村梅子
てりつゝく日影によれしやせ畑の芋葉がもとにひるがほのさく

○　美濃　瀬川たき子
たゝづみて野景色うつす我務に晝顔の蔓まきもよひけり

○　靜岡　鈴木角子
ひさかりのかげも夏野にひるがほは みづ〱しくもさける花かな

○　豐後　松田榮子
なよ〳〵とまけるもあはれてれるひにめぐみの露もひる顔の花

○　熊本　桂　朝子
頼みならぬ草をたのみに晝顔の昨日も今日も咲きにけるかな

○　千葉　金子智子
川邊野や他草にましり晝顔の咲きぬ蝶とぶ目路のかぎりを

○　伯耆　錦織よし子
あつさよけて片山里のわひすまゐはしめて知りぬひるかほの花

○　埼玉　横田秋子
大麥をかりほす庭が畑つゝきいたわりもなく晝かほのさく

○　美濃　美除くに子
いくとせをむなしくすごし今夏にまだ見もしらぬひるがほの花

○　大阪　木村春江子
右ひだり風にゆらるゝ萩の葉の隙より見ゆるひるかほの花

○　美濃　松田重子
日に燒ける砂地に熱れ川原草あるたゞ中に晝顔のさく

○　美濃　松田春子
堪えぬ如筆一杯にきり〳〵す鳴く日の中に晝顔のさく

○　美濃　松田直子
歌人の心をせおひ晝顔の川原を急ぐ漁士のあとかげ

○　美濃　松田君子
水石の水はひにけり晝顔の花はさきけり日は近うして

○　美濃　松田信子
君が家にうつゝまぼろに夢を見ぬ晝顔咲ける故郷の庭

○　兵庫　ゆき子
二ツ三ツしづが垣根に咲きそひてひるれをさます晝顔の花

○　群馬　小野畢鶴子
賤が家の垣根に添ひてひる顔の花ぞ咲きぬと弟はさけびぬ

○　岐阜　山田はき子
水涸り干れて死魚みる夏の野べ所々に晝顔の咲く

○　岐阜　後藤英子
船つけてしばし遊ばん眼ひすれ島美しきひる顔の花

○　靜岡　中村豐子
いかなりしたれやこほれし夏の日につゆけくにほふひる顔の花

○　旭川　佐藤央子
うきこともしらぬうまいのまとの內をさしのぞきたる晝顔の花

○　東京　田代糸子
架かくれとなき庭なれど晝顔の照る日にゑみて涼しげにさく

○　臺灣　浮洲鶴子
さしのぼる朝日とともにさき出てかきねに匂ふひる顔の花

○　神戸　足立あさ子
晝顔の今をさかりの午時の天晝寢なから眠る海士人

○　神戸　足立ゑい子
この廣い野邊に風さへ夏の日に咲ほこりたるひるかほの花

○　美濃　多田琴代子
村雨のはれて涼しき野の小道木陰に匂ふ晝顔の花

○　大阪　磯村直子
朝夕の花の中がきわがものにほこりて咲けり晝顔の花

○　美濃　多田さとる子
去る年に君と別れし森陰にほのかに香る晝顔の花

○　後志　山本しづか子
あかたなの棚にかゝみてひるかほの花さきにけり野邊の古寺

○　名古屋　荒川銀子
三ツ二ツやさしき花の晝顔や我庭先きに咲き匂ひけり



撫子

天

東京　平塚白百合子

砂あびて撫してさける河原道
　渡しにいそぐ藥うりかな

(評)藥うりといふ一句にて、夏の田舎よくあらはれたり。渡しに急ぐの句もよし。作者よ、よくつとめて清新なる趣を捕へむと心し給へ

地

相摸　藤原下枝子

洪水の思出さむき川添の
　荒地に咲きぬ撫子の花

(評)去年の愁も知らずげに撫子のさける川邊に、立てる村人のさまもうかびて。

人

美濃　多田みすゞ子

撫子の花咲き匂ふまさご路に
　立ちて眺めぬ君います島を

(評)可憐なる少女の面影うかびて、うつくしき歌。

秀逸

◎

美濃　松田君子

長き袖に撫子抱きて少女子の
　雨にぬれ行く夕まぐれ道

下野　井上貞子

洪水の去年しのばるゝ大河原
　石のかたへに撫子のさく

◎

河内　竹内敬子

よひの間の天つ星くつ此所におちて
　匂ひこぼるゝ川原撫子

◎

攝津　有村さだ子

秋もはや遠くはあらしわが庭の
　大和撫子咲きそめにけり

◎

茨城　高村きの子

とふ人もなき山里の賤が家に
　咲けるもあはれ撫子の花

◎

名古屋　不破きみ子

なでしこの花うるはしく咲きいでゝ
　君が垣根のいとゞ過ぎうき

◎

横須賀　渡邊比佐子

いさゝかの物うる家の花瓶に
　咲きほこりたり撫子の花

◎

神戸　今西操子

しめし野に床夏の花咲き初めぬ
　秋はた近くなりにけんかも

◎

千葉　秋月虞江子

なでしこの生ひゆくみれば亡き乳母が
　心つくしのしのばるゝ哉

◎

豊後　松田榮子

おふしつるわが撫子の花さきて
　誰もこゝろもおかぬひそなき

讀者文藝

この川の水はあましと螢よびし ◎ 川そひつゞきなでしこさきぬ
美濃　平岡かん子

やまひいえてそゞろありきのたのしさに ◎ 青とかたりゆくなでしこのみち
岐阜　渡邊ひろし子

[illegible]つたび君まつひまの久しきに ◎ 手折つかれしなでしこの花
美濃　飯島曉子

[illegible]めぐりたのしきながめかずかずの ◎ 文にそへ送るなでしこの花
美濃　長濱蘭子

長良川つとに買ひたる鮎かごに ◎ 手折りてそへぬ川原なでしこ
美濃　目島眞砂子

鵜舟かがりて背におふ籠の中に ◎ あはれましれりなでしこのはな
美濃　西村梅子

教へ子のやさしき文にそへこしぬ ◎ 名もなつかしき撫子の花
岩代　岸野登代子

朝な夕なつゆおき渡す夏草に ◎ まじりて咲ける撫子の花
兵庫　梶原京子

撫子の名もなつかしき花見れば ◎ 逝きにしあこのいとゞしぬばゆ
岩代　岸野せい子

撫子によき歌もなく窓により ◎ 都へ去りし人思ふかな
千葉　金子操子

なが雨に赤土ぬかるうら道の ◎ 土橋たもとの撫子の花
千葉　志水みち子

去にし子の衣の模様の撫子や ◎ この花さけばまたもなかるゝ
千葉　金子智子

あひるの子蓮の葉かげになく沼の ◎ めくりうつくしなでしこの花
千葉　金子仙子

咲きしよりからくれなゐに匂へとも ◎ さすかにゆかし大和なでしこ
東京　青木たま子

なつかしき君がみ魂や今いつこ ◎ 苔むす墓になでしこの咲く
新潟　岩木芳子

李の實小さく結びし丘越えの ◎ 小道かざりて撫子さくも
千葉　金子鶴枝子

水清き多摩の河原に衣洗ふ ◎ 少女美し撫子の花
横須賀　柏原みな子

つりにいでし兄がつとにとたづさへし ◎ 河原なでしこ色のよきかな
東京　平塚いと子

讀者文壇

◎ 靜岡 藤田秀子

しづの男が刈りこめて來しあさ草の
なかになつかし大和なでし子

◎ 群馬 小野里鶴子

少女子の取りおとしたる撫子の
花そ胡蝶のやとゝなりぬる

◎ 宮城 山形さち子

故里は鮎の小桶に撫子を
挿して月まつ多摩川の里

◎ 南京 福田つる子

ほのかなる海もや月夜なでしこの
花のかげふむうつくしの人

◎ 美濃 多田ことよ子

夏の朝漁夫いそぐまさご路に
うす紅匂ふなでしこの花

◎ 美濃 多田さとる子

夕立のはれて凉しきみどり野に
ひともと匂ふ撫子の花

◎ 後志 山本しづか子

なき姉のみ墓のつちにさし添ぬ
みちにてえたる河原なでしこ

◎ 撫子 攝津 中根保子

大君のめぐみの露にうるほひて
咲き初めにけり大和撫子

甲

○ 秋田 三浦しや子

愛らしき少女のかげと見えにけりくれなゐまさるにはのなでしこ

○ 青森 川合りく子

いとし子をせなに負ひつゝそゝろにも歩む道へににほふなでしこ

○ 名古屋 木下鶴子

夏くさの中に交りてこゝかしこからくれなゐに匂ふ撫子

○ 能登 栗倉一子

なでしこや師當の兄にまゐらせてその一もとの繪を乞ひまつる

○ 東京 神田けい子

一枝は蛇籠のうちをぬけ出でゝ水草ましりににほふなでしこ

○ 兵庫 古東靜子

降りそゝぐ雨を我世のうさといふかうちしほれたりなでしこの花

○ 美濃 吉田れい子

亡き母の御墓清めて撫子を心ばかりに手折り添へけり

○ 東京 高橋珍子

なみならぬ庭のをしへも見えにけりますぐにさけるなでしこの花

○ 横須賀 高橋つれ子

草刈りの少女が負ひし籠の中高く挿したる撫子の花

○ 靜岡 鈴木角子

牛の背のかたまのなかのかり草にあはれげにさくなでしこのはな

○ 靜岡 松井冬子

あさりしてかへるかはらに打よする海藻のなかにさける撫子

○ 岐阜 芳翠敏子

海とほき白帆の船にもや降りてうまやぢつゞくなでしこのさく

○ 岐阜 長濱ゆきみ子

海士ばかりすむと云ふなる海そひの小村につゞく撫子の花

○ 美濃 傍島みゆき子

すまにしてかり家ながら庭ひろしなでしこうゑて君をまつかな

○ 岩代 岸野菊子

その昔し泣きて別れし教へ子のおもなつかしき撫子の花

○　秋田　長谷川蕪子
賤の女が馬に飼ふとて苅る草の中にまじれり撫子の花

○　下野　田代こと子
ふりかへりみてはまたしもかへりみる色も床しき大和撫子

○　伯耆　錦織よし子
雨にぬれ露にかなりてとこなつのすゝしきものよなてしこのはな

○　伯耆　錦織さち子
夏草のしげみの中にたゝひとり露にぬれつゝにほふなてしこ

○　埼玉　横田秋子
さゆり葉に枝さしかはすなでしこの花はいよ〳〵くれなゐにして

○　岩代　岸野常子
撫子の名もなつかしき花見れば別れな泣きし妹のこひしき

○　神奈川　飯田白露子
縁日のかへりとも見し若うどの手に持ちそへしなでしこの花

○　東京　安達安子
おふしたてしかひはありけり我庭のなしへまもりて咲るなでしこ

○　大阪　木村春江子
雨すぎしおん墓路はたそがれて露に亂るゝかはらなでしこ

○　美濃　松田春子
うと〳〵と何れ果なく迷ひ來て夕野のあたり撫子をみる

○　美濃　松田花子
なが墳に小女のたける香の煙廻りてのぼる撫子の花

○　美濃　松田時子
露に咲く花にも似たるわが身とは知らでめでたる撫子の花

○　熊本　桂朝子
朝な〳〵おく白露にうち臥して色やあせなん撫子の花

○　美除くに子
めづらしき色をもみせて賤が家の垣根に咲けるなでしこの花

○　東京　倉重千惠子
露しげき岩間に根さす撫子のひときはは色のうつくしき哉

○　東京　田代糸子
いたつきし庭の叢のたゝしるに咲きこそまされなでしこのはな

○　千葉　小澤蝶子
撫子やむすぼほれたる夢いくつ解けてほつれて夏の夜明けぬ

○　東京　原三幸子
なでしこの花のにしきをしく庭にたまをちらしてむすぶしらつゆ

○　東京　西村直子
おふしつるつまと撫子咲しよりまがきのもとにたゝぬひそなき

○　東京　吉岡龜子
唐やまと色よくにほふなでしこにこゝろをわけて露もおくらむ

○　旭川　佐藤央子
花うりのちこの聲さへあいらしくこぼるゝつゆに匂ふ撫子

○　名古屋　山根しげ子
新つかに手向くる袖のぬれにけり露か涙か撫子の花

○　岐阜　後藤英子
鵜飼にも篝籠のつゝく川堤朝美し撫子の花

○　岐阜　松岡君子
去年の夏あひみしまゝに今日みれば又もめづらし撫子の花

○　攝津　有村芳子
手にすれど折りてかさゝんやうもなしあまりやさしき撫子の花

○　攝津　有村繁子
あさ露もいまだかわかぬ袖がきにほひこぼれて咲けるなでしこ

○　攝津　有村紫芳子
なてしこのさきいつみれは別れにしそかふるさとの人ぞこひしき

○　兵庫　南出まつゑ子
荒れはてし庭のまがきに露しげくあはれ一本撫子の花

○　石見　山根直子
雨過ぎて庭母のなでしこ露おきて涼しく照す夏の夜の月

○　臺灣　浮洲德子
移しうゑし庭のなでしこきのふけふあはれもふかくさき匂ひけり

○　神戸　足立あさ子
悲しむ露をうけてそ咲にける柞の森のなてしこの花

○　飛驒　南　峰子
故里の母なつかしき夕くれな咲きて匂へる大和撫子

○　飛驒　中西よし子
雨はれて紅ゐ匂ふ撫子の雫もかほる夏の夕くれ

○　美濃　多田まさよ子
森陰に少女らつとふ里川の汀に咲きぬ撫子の花

○　長野　千村ちゑ子
ふと君と泣きて別れし古郷の野末浮びぬ撫子の花

乙

○　美濃　松田信子
誘ふべき風はあろとも知れざれど誘ふにゆらぐ露の撫子

○　磐城　木幡きよ子
故郷に老たる母や見つるらん袖に露おく庭の撫子

○　茨城　今泉千鳥子
花散りぬ昨日の小雨に撫子の亡き妹あらば愛でなんものを

○　名古屋　浣川銀子
とく來ませ我庭池のほとりまでほのかに薫る大和撫子

○　河内　竹内久子
おく露もわか紫の色見えて匂ひゆかしきなてしこの花

○　東京　小林春子
さき出て姿ゆかしきとこなつを我が文机のかめにさゝはや

○　清國　森　しげ子
紅粉をすつる我かな床夏のそのあかき色うつしかれつゝ

○　兵庫　古東壽美子
限りなき君が八千代の露うけて色深めけれやまとなてしこ

○　美濃　鷲見富子
なてしこの手にもち添ふる揃蟲器に夕日さすなり野戻の道

○　美濃　鷲見さと子
降り足らぬ雨に磧のひろ〳〵と今をさかりと撫子の咲く

○　美濃　落合晶子
魚賣りの戻りの籠にひとつかれ撫子かろき御佛の日に

○　美濃　瀬川たき子
小川原に乙女の小唄愛らしく蝶を追ひつゝたをる撫子

○　美濃　鷲見とう子
小童の牛のまぐさに苅りまぜし春にやさしやひるがほの蔓

○　伯耆　錦織千代子
雨にぬれ露にかをりてあつき日にすゞしくわらふとなつの花

○　埼玉　横田やな子
敷島のやまとなでしこ花咲きてもろこしまてもにほふ石竹

○　熊本　矢野夏子
降る雨をあふぎて嬉々と笑ふ子の心もいとどあはれなりけり

○　美濃　松田晶子
戀しとて都の友の文は來ぬ川原撫子今やいかにと

○　美濃　松田文子
撫子のたはゝとなりし雨晴れの花に赤く夕づく日哉

○　美濃　松田直子
露に匂ふ旭にもゆる撫子を戀てゆるぐか武藏野の風

○　美濃　松田壽子
煙筒の多き市居の目うつしにほと〳〵嬉し床の撫子

○　美濃　松田富子
見るとなくふと見し朝の軒かげに匂ふともなく匂ふ撫子

○　東京　堤　いく子
うた聲は木立に消えて浣されし鉢の撫子子等うらむらし

○　靜岡　河合象子
しきはへしやまとにしきと見えにけり庭の床なつ花さかりにて

○　東京　田代眞子
なさなごがそひふしゝたる袖がきに錦をしきて匂ふ床夏

○　横濱　鈴木まつ子
なでしこはつゆのめぐみに咲いて山のおみなの心とやみん
○　下總　月沖藤美江子
なでしこに宿ねるゝ程の露小石ことごとく小島ともなれ
○　靜岡　中村しか子
唐やまとさきさかりなる撫子のかさしの玉と見ゆるしら露
○　靜岡　中村豐子
咲いでゝにしきと見ゆるなでしこのやまとも唐も花のいろいろ
○　兵庫　ゆき子
なつかしき花の姿はあだし野の色さへ露にうつるなでしこ
○　岐阜　山田はき子
船の醉ひさますと和子の御手引きつなでしこ摘みぬ川そひの道
○　大坂　磯村直子
年々に繁みにゆくぞ嬉しけれまなびの庭の撫子の花
○　攝津　有村棠子
よしや身は遠く異國にはなるとも變らであれな大和なでしこ
○　攝津　有村とみ子
庭もせにほひこぼれて咲にけりかきれの本の撫子の花
○　神戸　小山波子
我宿の庭の撫子今朝見れば色さまざまに花咲きにけり
○　天津　富成梓子
名もゆかし色もなつかし人のおやの朝夕かけてなでしこのはな
○　神戸　足立ゑい子
病む母のよろこぶ眉を開けよとうなゐ少女が手折るなでしこ
○　美濃　多田はな子
君きませ雨の一日を語らむと招き顔なる撫子の花
○　美濃　多田せい子
おもしろく時雨晴れぬ撫子の雫に匂ふたそかれの野べ
○　岐阜　中村華子
學びやの昔の門面の影を殘して咲ける大和撫子



文學士塩井雨江先生選

天

梅雨晴　大阪　木村春江子

昨夜よりあんじた空の、思ひの外晴れた嬉しさに いそいそと張物にかゝつた。所せまきは都のならひ、干場とてわづかに二間半。一反の切を二つ割に、はぬうて張らねばならぬ仕儀。それでも、なれてはさすがに手順よく、先日は八反張つて、姑様にほめて頂いたが、今日のは十一反、悉皆張れゝばいゝがと、心積りの忙しうて、亂髪かき上げる隙も惜しく思ひ居るを、お庭の松より吹く朝風に、又してもかむりし手拭の解けかゝる。くる〳〵と小車の音につれ、ばさ〳〵と音立て、つい目の前を上りゆく五月鯉、おゝ、向家では、美いちやんの初節句である、あゝ、去年は我家に

も建てたが……一年の短い宿世とは何んで思はれやう。長きをほこる鯉の、五間にあまる緋鯉と眞鯉とを、梅雨晴れの朝嵐孕ましては、吾子の行末もかゝれとばかり勇ましう祝うたのに、形見となつた品の、見るも憂しとて、乳母の許へ遣したが、今年は十里の西に建てられて居やう？よしなき思ひに、思はずほろりとしたとたん、

「よく張れますね」――と姑樣のお聲。いつのまに來られたやら。「はい、思ひの外の好天氣でしたから」とお答へ申しながらしんしめのゆがみを直し、手ばやく糊刷き終へて、姑樣のお傍へいつた。

干場の隅に立たせられて、餘念なげに例の鯉御覽遊ばさるゝ姑樣の御瞳にも、矢張り涙が……

（雨評）あつさりとした筆の中に、やさしい可憐なる情が深くこもりて、誠にゆかしい文である。

地

涅槃寺　三河橋　たか子

鐘がなる。

今日は涅槃寺の佛生會。石につまづく坂道をつゞく日傘繪日傘や、孫が情の杖ついて、よぢ〳〵登る姥が眼鏡に、紙礫打たれた山門の仁王も、嘸や含笑んで立ちます事であらう。

鐘がつゞいて鳴る。

今は誰が撞くのやら、かはらぬ響に、しみ〳〵と戀しいのは夢の昔。友染の晝模樣、花やかな袖無着て、祖母が背の上に、珠數振つて行く寺の朝庭

『新茶の煮花ぢや、飲んでお行きなされ』

と草箒すてゝ、猿の樣に盃はこぶ墓守が妻の親切、それも、年老の長話に、䏁と坐つて聞いても居られず。軒端にならぶ里の山を數へて、温和しう唱つて居れば、

『まお行儀の良い御兒樣や。』と草餅の竹皮包、髪に結んで貰うたうなゐの春。さては、蓮の實飛ぶ秋の日を、寺の稚子衆と、鳩が豆食む門に遊んで森に拾うた椎の實のおはじきごつこ。誰が意地惡の惡戯か、塀の白壁の相合傘に泣かされて

『もう涅槃寺へ行くは嫌や。』と祖母に拗ねた幼子も、まだ浮世の悲しみには遠かつたが。

祖母亡き後の哀れは、少さい胸にも泌みて、學舍

の徃さかへさに結ぶ紫苑や、野菊藤袴の花束と朽ち行く花筒にさしかゆる奥都城所、何となう物悲しさにちゝろ虫鳴く夕暮まで泣きに泣いて、さて、鐘守の爺が情に送られて出る寺の山門――げに秋の日なれば、昔はと肩打つ椎のこぼれ實もあれ、今は爺さへ石となつて涅槃寺に、青葉の森の下露拂つて、卒搭婆の前に跪と目を閉づる身の淋しさ、魂誘ひ行く木魚の絶間がちなる音を聞けば夢の昔や忍ばるゝ、懐しい祖母の面影――悲しきは秋のみか、木瓜咲く雨に汲みなれた寺の阿伽井、覗けば落つるわが影の、痩せに痩せて、『よう祖母樣に似て來た。』と聞くも、涙の種である。鐘がまた鳴る。柏の若葉に木魚の音もこもつて、鳩の羽を吹く風涼しい涅槃寺や、晝の勤行は今が最中か。本堂はさぞや扇の風が動く事であらう。

（雨評）趣向に新しいところがある。筆も綺麗である。

人

渡し場　東京　神田敬子

日は薄黒い藍色の暮雲に包まれたまゝ山に落ちてしまつた。空は鬱如として、煤つた樣な紫褐色の雲を、一面に流して、僅に向の遠山の邊、ぱつと薄い殘照を見せてる。黒ずんだ林の影と空の色と入り亂れてたゝんだ水上から、長い筏か靜に現れて來た。悄然として舟の中に立つてると、ぐらぐら動いて、いつか岸を離れる。あわてゝ岸の方を見ると、汀に茂つてる蘆の一群、さわ／＼と風に鳴つて、今し方堤の陰で物をやつて來た白は、蘆の間からひよつくり首出した。白やと口もと迄出た語を、唇に殺して、堪へられぬ思ひを抱きつゝ一心に見つめてると、彼は物を失つたかの樣に、不安の眼してうろついてる。人かげも見えぬ堤の上に。知る人もない村里に、毎日我友となつてくれた白をおいて、私は今此渡しを渡つて、更に汽車で都へ歸らなければならないのである。

舟はする／＼と辷つて岸遠く離れた。長い筏は私の乘つてる舟のあとを横ぎつて、流れる樣に下つて行く。目を落してぼんやり水の面を眺めると、紫がゝつた褐色の空は、鼠に變つて、薄い臙脂の色を載せて流れた水も、何處ともなう次第に迫る

黄昏の靄に薄れて、淡い夜の帷帳は、漸々あたりを罩めて、物と物との間を黒う彩つてしまつた。羅に包んだ様な對岸、ほの白いものが、夢よりも淡く逍つてる。

薄暗うなつた柳の陰に彳んだまゝ、一心に茫として向岸の或るものを見出さうと、目を見はつてる時、今着いたのであらう、後の停車場から促す様な汽笛の音が聞えた。我に返つて立ち上ると、さわ／＼と蘆の葉渡る風の聲と、せゝらく水の音とは、さながら靜寂なる夕の歌を奏してるかの様に響く。向ふの渡し守の小家の邊、ハッと燈火がついた。白いもの丶影はもう見えぬのである。折りしも、悲調な聲微かに夕暗を破つて、餘韻長く川の面を渡つて響いてくる。

（雨評）心にとまる渡し場の情景に候かな。

秀逸

◎◎暫し々々　横須賀　渡邊比佐子

近頃にないよい天氣丶丶丶丶丶

降りつゞいた五月雨は、何所へ消えたやら、空には一點の雲なく澄み渡つて、青葉若葉の清い風は樂しさうに奏でて、彼方此方を漂うてゐる。

軍港を一目の軒の我が書齋、何時に厭かざる眺めなれ共、今日は一入新しく嬉しい様な氣がする、今しも繙いた書の栞を片手に、肱を窓に落して、恍惚と見入つた、幾十の艦船は、出るあり、入るあり、さしもに廣い軍港も、いと狹く、間に／＼に起る白波の譜は、工場の槌の音に和して、面白く聞える。

其れが、徐々に遠く微に消えて、涼風の一過自分の顔を撫でゝ、後毛の二筋三筋を嬲つた、と思ふ頃は、早夢路を辿るのであつた。

「清水の響きに耳を傾けて、だん／＼若葉の路を奥へと分け入つた、すると、向ふに白いものがちらちら風に嬲れてゐる。よく透して見ると、奉納の手拭なのであつた。其の手水鉢の後に、大きな楠の古木がいと暗く茂つてゐる。其の下に、小さな社が光るまで黒くなつた扉を現してゐる。靜かに仰ぐと幾代古りたる勅額の一面が、堂の上に厳

かにかゝつてゐる。其れが、如何にも物凄く腸を断たれる樣な風に迫て來る、思はず無言の儘ゐかづいた。

すると、一陣の青嵐は、何所ともなく吹き起つて頭上冷やかに浴びせ去つた、一刹那？忽ち白雲四方に漲つて、社も自分も其の中に葬られてしまつたかと思ふと、俄然!!!けたゝましい音のして、傍の六抱へもあらうと思はれた彼の大楠が、中程から二つに折れて、地上に地響きして落ちた。ハッと思ふ間や、其の響に驚いてあたりを見廻した。依然!!自分の懐しき書斎の窓である……あゝ!!!ては今のは夢であつたかと、漸く安き心を窓の外に放つと……

遙かに旗山の項から告げた午砲の響き、余韻今猶漂うて白く、茂りを破つて一筋高く、殘んの煙りは、僅に消えなんとしてゐる。

今告げた午の軍港は、風穏かに波低く、細く、數多の檣頭には、三角形の食旗、ちら〳〵風に煽れて一入靜かで、喇叭の聲さへ微である。

持つて居た栞は、何時しか手を離れて、椽の上に落ちてゐる、二葉三葉、風に滑つては漸次ページを先へ繰つては運ぶ。其れが何んとなく可愛いゝので取らうともせずに暫し見守つて居た……。

（完）

（雨評）靜かな涼しげな書窓の情景は見えたり。唯だ……してゐるといふ結び方多いのが、耳に障る。一工夫ありたきところなる

◎◎兄さん　　信濃　松澤まつ子

「朝咲いて四つに萎れる朝顏さへも、朝つゆ賴りで咲くわいな――」、餘韻長く、夕陽の光薄れゆく野面に何とはなしに物悲しくひゞけば、野ら歸りの女連が、いひあはしたやうに聲をしるべに返り見る岡の桑畑、新芽の香高い綠が中に半身を現はして、やさしい手ぶりに桑つむ十五六ばかりの美しい娘、銀杏返しの鬢のほつれ毛、白い手拭の下をもれて、紅い襷も似つかはしと、散る木の葉にも笑ひこけるべき年配なるに、何となく晴れやらぬまなざし。いつか桑つむ手を止めて「兄さんのゐなさる北海道つて、あの邊かしら」。ぢつと見入る北の空は、一面灰色に流れて、ひとり薄紫にそゝりたつ淺間が峰に、足も早きにびいろの雲の行

方を追ふのであつたが、耳驚かす入相の鐘の音に初めて我にかへつたやうに「あゝ又私ぼんやりして、母さんが嘸待つてゐなさるだらうに」獨ごちて、やをら立ち上り、桑袋小脇にかゝへて、露けきもすそ風に拂はせつゝ、岡を巡れる清水川の岸の小草ふみしだき歸路さしつゝも、想ひは矢張り熊住むときく北海道の野に馳するのであつたが、いつか進みて村に通ふ土橋の上にさしかゝつた時、娘はふと立ち止まつて、「オォ此處だつた、兄さんが稼ぎに行くのを見送つたのは然う。有明の月が夢のやう、あの山の端にかゝつて、村の眠はまださめず、うら悲しい春の朝だつた。なでか默つて歩いてゐられた兄さんは、急に顔を上げて「おきぬ、何處まで送つてくれても、限りがない、さあ、此處で別れやう、何、三年位は夢の間だ、お母さんを大事にして待つてゝくれろ、巳も男だ、三百や四百の金は、きつと汗からしぼり出して、人鬼の手に渡つた家も家敷も取り戻して、お母さんやおまへの喜ぶ顔が見たいつて、元氣よく行かれた後姿が、かすみに淡く消えた時、堤の櫻、曉風にはら〳〵散つて、あゝ今でも目に映つて來る。それも早一年前。櫻は再び實を結び、野にはかすみの衣二度脱ぎ更へて、すが〳〵しい夏衣となり、雨の夜など時鳥の聲しきる折は一そう兄さんの上が忍ばれる、なんぼう氣強くいはれても、矢張り故鄕はこひしいもの、雨につけ、風につけ、此方の空が眺められるであらうと、口にこそ出さね、心に泣かるゝ母さんがおいとしい、の——兄さん、家も家敷も要りませねば、只一日も早く歸つて下さい、そして、晝はひねもす兄さんと二人田に畑に耕して、寺尾山の頂きに星影二つ三つかぞへる頃歸れば、夕顔棚の下に風呂もわいて、夕げの膳には、母さんがお手料理の二くさ三くさ、山海の珍味にもまして嬉しく、月影の障るものない椽側に、はかない言葉にも花が咲けば蝶もまふ、家庭の春風に逢いたいが、私の願ひ。否々、廿歳にも滿たない兄さんが、家の再興てふ固い決心をいだいて、海山遠き草枕重ねられる雄々しいお心に對して、こんな女々しい考へをしてはすまない。許るして下さい。私も兄さんの

妹です、細腕ながらお母さんを助け申して、三年の春秋月にも花にも兄さんの成功を祈つてゐる妹が、故郷に在る事を思ひ出して、淋しい胸も慰さめて下さい、人氣も絶えし橋の袂に、獨り物想ふおきぬの顔のみ暮れ殘り。まこもがくれに水雞鳴いて、夏猶寒き河風さと渡れば「オ、さむ」と、身をふるはして、つと橋を離れたおきぬは、行手の森影、燈ゆる、母待つ我家へと蛙の聲花やかな畦道を急ぐのである。

（雨評）可憐な情はこもつて居るが、筆になほ申し分がある。「私の願ひ」といひ來たりて、否々と轉ずるところなどは殊にだしぬけで面白くない。

◎◎海邊の春　金澤　北村きよし子

朝霞に包まれた東の鼻の燈臺の、白い姿がぼんやりと見えて、其下の雌の岩の上に、珍らしや、洋服が一人綸を垂れて居る、何所かで牛が吼ゑると栞の花咲くわたり、避病院の屋根に止まつて居た鳥が、海を飛んで彼方へ行く。山を削つた硝道を、ランプ屋の歩調遲く、陽炎立つ鹽田に働く人夫忙しさう、波上の檣旗は春風に飜つてみたり下がつてみたり、茅屋隱見する松原の向ふ、八幡の社は櫻で眞白う。萬千の鏡の破片漂ふかと疑はるゝ海、こくり〳〵と交瞼んで居る陸地の山々、浮いて陽炎ふ彼方の二子島、干潮の磯には磯歌賑うて、湯場の煙斜に丘に匍うて、空は花曇り、往くか戻るか、緩和として流離する大小の帆幾十百、西も東も北にも南にも微風波を動すの力なく、宛然青海原に生えし土筆のやう。階のやうだんだんに積み上げられし綠の畑中に、鍬の手を休めて、姉さん冠りの二人、沖を指して何をか語る。そこには、木の葉の如き漁舟五つ六つ。指すは、いづれの舟。話題は何に？

（雨評）のどかなる海邊の春の光景一寸見えたり。

◎◎五月雨の窓　下野　井上倘子

何と陰氣な夕べだらう。五月雨の窓によると今朝の新聞で見た男三郎死刑の模樣が、目さきに浮び物凄ひ思ひが迫る。それを消さうと、愛らしい花子さんの姿を目の前にゑがく。あの可愛い口、何か云いたいやう。涼しい聲がきこゆるやうに思つた刹那、がや〳〵と人のけはい。みれば、葬式の

列。小さき旗小さき棺、ひつぎの主の生前の友達であらう。二十人近い少年少女が、片手に傘、片手に花や線香をもち、静につゞいて行く。見送りする子等の頭には、死と云ふもの思ひは浮ばずとも、花かげのまゝごと學校での遊びに、たのしかつたことなど思ひだして居るであらう。向の方で泣く子をすかす子守が歌ふ「里の土産のおかたびら、誰れにきせよとかうてきた、おかめに着せよと買つてきた、おかめは死んで今日七日。」さみだれの夕、小さきひつぎこの歌。對照があまりに寂しい。四邊がうすくらいので、床の白薔薇がくつきりと白く淸い姿が神々しく見ゆる。豆腐やがせはしさうに鈴をふる。婢がかん高い聲で呼ぶ。

（雨評）子どもの葬式と子守の歌とは考へられたる道具立である。

○◎梅雨はれの朝　東京　平塚いと子

長いしめ〳〵とした梅雨もあがつたので、今朝は何となくはれ〳〵しい。昨日までは綿入羽織をかさねた身が、薄い單衣一枚にも肌がシツトリと汗をもつた工合、ひるにでもなつたらさぞあつからう。

そつと庭下駄を引かけて、敷石をふんでゆく。築山の芝生は一つ〳〵葉末に玉をうけて、青葉のひまもる光りにキラ〳〵と目をいるやう。緑のつゆはさら〳〵と吹き送る風におちて、苔と生ふたのであらう、ふむもをしい程のやはらかさ、青々しさ、梅林にはそこ〳〵に梅の實がおちて、そで垣の邊には、はや萩が尺とのびたのである。

かるい衣ずれの音にふりむくと、母樣が例のゑましげの御ほゝに、「露さんはやく青梅がほしうなつておくれではないかへ」とかろくほつれ毛をなであげながら、あら母樣と眞赤になつてどこをどうしたのやら居間にもどつて、やつと胸をなでおろすと、びんの毛を涼しげにふく風が身にせまる。ふと丸窓をあけると、八つ手の葉に、青蛙が一つゆつたりとゆられてゐる。

（雨評）ゆかしい家庭のさまの忍ばるゝ文である。

◎此の夢　茨城　今泉磯千鳥子

「先づこれで佛壇の掃除も濟んだし、高燈籠も張り換へたしヽヽヽヽヽと、もう何時佛樣が入らつ

しやつても、、、、」とお母様の聲は急に絶えた。
私も何だか急に悲しくなつて來たので、居間へ行つて、一人で泣いた、何だか悲しい——悲しい私の目には何物もない、、、、只あるものは、去年逝つた妹の露ちやん許り、、、、。
あゝ悲しい、私は何となく悲しい。
不歸の人となつた妹の露ちやんの姿は、ありくと目に映えて、、、、私は日暮るゝも知らずに、夢路を辿つた。
あゝ、此の夢！永遠に覺めずにあつてほしい。

（雨評）文の組立發表に工夫の見ゆるところが捨てがたい。

◎白百合　　金澤　佐藤　しげる子

白衣の女神は、わが手をとりて語りぬ。
おん身よ、世にも薄命なる妾が身の上、きゝ給へや、妾はもとみ空なる月の宮居にかしづきたりし星姫なりき。若き血潮の狂ほひて、下界の花を戀ひしより、物の哀れを知りそめし身よ。あはれ涼しき一夜を、柱の園に煩え明かしし曉、慈しみ深かりし月の宮居を離れて、戀しき花に身をまかせたりしが、さるにても敢なきは、人の世の春なりき、戀人は無情き夜の間の風に散り失せつ。戀にうらふれし妾のみ殘されて、お身の書の窓をかざり侍りしが、無實罪ゆりて、再びみ空へ歸るべき身となりぬ。
さらば、夜もやがて明けむに、おん身は人の子、妾は空のもの、ちぎりもこれまでに侍る。さらば、、、。我は夢よりさめて、有明の灯火にすかし見れば、無慘！花瓶の白百合二ひら散れて、余香なほ芳ばしく、身に迫り來るなりき。

（雨評）趣向は一寸面白いが、少しあつけないところがある。

◎仙鄕　　新潟　星野　よき子

春は後ろの山から燃える樣な、躑躅を夏は前の川瀬から、淸い鮎を花めすかア、あいめすかア、と徹るいゝ聲で賣りにくる村人がある。紺の頭巾に同じ筒そで質朴な風は他村の婦女と少しも變りはないが、氣のせいか、皆顏だちが卑くない、殊に老婆にゆかしみがある。又この村人に限つて齒を染めぬとやら。優美な山の麓に淸鮮な氣と水とに

養はれてゐゝなのと許り想像して居つたが、五月雨の徒然な一日、ある老人から短かい春の夜には飽きさせぬ面白い昔語りを聞いて西京訛りもおぼろげぬ迷信もわかつた、一層ゆかしい。村の名は宮の下村上の東一里余り、鮭と鮎とで名高い三面川に架けられた長い小川橋を渡つてすぐの村。名物の椎茸が盛んな頃、竹藪の中に霞んで殊にめでたい。後ろ一帯の樹峰はどこまでも優しい。中で最もすぐれてをる螺峰山を、父は京都の山の姿であると稱される。其他、海岸などには、好い眺めが多い。知る人は、其の村上附近を越後の仙郷といふ。

（雨評）整ひたるところが見どころなり。

ヽヽヽ○形見の町　河内　岡田こう子

今でも忘れられませぬ、月塚町と申せば……、丁度妾の十八の時でした、邊鄙な田舍にては、とても程よい教育は、うけられないと、父が申しまして、まだ小學校二年の弟と月塚町のある酒店へ預けられました。兄弟仲のよかつたことと云つたら、成る程遠く國を去つて居るからでもありませうが……「姉さん今晩はどんな御馳走が戴けますの」等と愛らしくも、申しまして、相互に食膳にむかひまして、妾が女學校のお話をすると、弟の敏雄は蟹先生より教つたおはなしをすると云ふ風に、さびしながらに笑ひ興ぜしが、それも昔の夢。

今宵のやうに降りつゞける梅雨のために、板を亘せし庭も、只浸み〳〵と五月蠅き時でした。敏雄は、數日來患ひし風邪からか急の發熱、醫師をよぶと、全くの肺炎になつてゐて、而かも甚だ危險だと申します。一方熱は益々まるばかりで、時々「姉さん、それ雀が飛んで居ますよ」等と浮言を言つてゐるばかりで……殊に樣子が變だと思ひましたとき、「姉さん僕、何んだか目に幔が張つた樣だ、取つて頂戴よ」と申して、手をかざし横に打振りますのを見ましたときは、身の毛もよだつて哀れっぽく、醫師の手前を顧る遑もあらせず、前後もなく只ワッと泣き伏しました。……ややあつて、目を開きますと、醫師は敏雄の手を握つたまゝ默されてゐます。其の顏は私にはどんなに見えたでせう……………可憐の敏雄!!!敏雄は遂に長へにおりました、父が側に居りますれば、兎も角、急電を發したものゝ、房州の一隅、いかで數刻の間に合ひませう。

友は默しぬ。一陣の涼りたる風窓を襲ひて、雨また窓を打ちぬ、友去つて後、倘ほ月塚町は心に消えず、…………あゝ月塚町!!

あゝ可憐なる敏雄!!!

（雨評）今一層の文である。

ヽヽヽ○噫藤ちやん、甲斐　小澤星水

「お隣りの姉さん裏のお山へ登りませう」と駒下駄の音も輕やかに自分を誘ひに來たのは、お隣りの美ひちやんである。をやみなく降り續いた梅雨の空は、今し漸く晴れて、微風靜かに梢を掠ると見ゆ。

一葉二葉、鳥か蝶かあはれやハラ〳〵と散つて、空しく泥土に歸した、「裏のお山？」「あらいやよ、姉さんは」「エヽ妾一寸もこはくないの藤ちやんがいらつしやるんだもの」と答へる顏のいぢらしさ。嗚呼、何とて忘られ樣か。そこには、妾がなつかしい弟が斷

えざる松嶺に、吊はれつゝ、長へに眠つて居るのだ。美いちやんと、藤雄とは、年も同じ級も同じ、實に生れる時からの親友である。赤い緒の小草履をつけて、遊び廻る頃から、まだ一度も爭ひ事らしい事は、した事のない。離れる時とては、寢る時と御飯を食べる時と只これ丈け。それさへ、まゝ一處にすると云ふ風で、知らぬ人からは、全く双子と思はれた程！「ちや美ちやん、一寸待つて頂戴れ、今お花をとつて來ますから」と裏庭へ廻つて見れば、弟が嘗て大事な牡丹、常には弟のふつくりとした、紅の頬と色を競うて咲いたのに、今や手入れの主を失ひ、愁ひの露を宿してゐる、近よつて、折らんとすれば、葉末の玉露、一滴二滴、ハラ々々と落ちた。「サア、美いちやん詣りませう」と手折りし、片手の牡丹を渡して、二人は寂しく裏の山へと足を運んだ。清き小川の流れに沿うて、細道を傳ひ山深く分け入れば、次第々々に道幅狹まり、遂にそれが盡くる處へ來た。此れがいとしき弟の眠れる奥津路である。仰げば空を掩うて、立てる大樫や、古松枝さし交はして、鬱蒼と茂り、爲めに日の光りさへも通さない。日頃喧しい蟬の聲も、幾多の靈魂を弔ふかの樣、其處此處と、破れた石垣には、蓋頭の力なく凋み果て、冷たき石碑は、數多立ち並んでゐる。其の中に、あはれまだ新しい小さき石碑!!

「藤雄さんは、遠い遠い處へ、獨りでいらつしやつて、もう歸つては來ないのね！もうこれからは二人で遊ぶ事は、出來ないのね!!!」とは

美いちやんが、涼しき眼に、愁ひを宿した、しほらしい顔でいふりかへつて言うた言葉――妾は、思はず胸がつまつて、石碑に倚つて、何と答へも出來なかつた、

じりゝゝと照り付ける夏の日は、今しも山の端に傾いて、眉毛計り面を出して、名殘惜しげに、光を投げて居る、沈んだ夕暮の空は、オレンヂ色に、頭上の松嶺は、えならぬ雅致の美を奏してさし、妾が憂を慰むるかの樣、やがて、沈み行く夕暮の空に、重く響く無情の鐘聲！思はず頭を上ぐれば、目に入るは新らしき卒塔婆！

「アゝ藤ちやんは、なぜ死んだか、も一度姉さん呼んで頂戴……

……かの海軍服に、劍附けて靴の音わざと響かせて、いつも美いちやん相手にゝゝゝゝ

「僕は、いまに大將になるんだ」と大得意、毎日進めゝゝの聲も可愛かりし。

あゝ、あの姿あゝどうしてそれが忘られ樣か…………見れば美いちやんは、手にせる花を手向け了りて、楓の樣な、手を合せて、小さき頭をかしげて、墓前にぬかづくいぢらしさ!!!

嗚呼、仲よしの美いちやんは、斯くして墓前に居るけれども、冷たき石碑は寂として答へず、枯葉一片ヒラ〳〵と落ちて、空しく美ちやんの袖に止まつた、」

(雨評) 筆になほしまらぬところがある。

ヽヽヽ○淋しき一日

下總 小澤蝶子

梅雨しとしとと降る夕、小窓によれば、彼方の路を傘さして行く一婦人。あゝ、我がなき母君にさても似通ひつるよ。噫、さなり今日のごと雨ふる日なりき、一人のみ母は妾を殘して逝き給ひし啜きそひぶしの床に桃太郎語り給ひしあの涼しきみ聲、愛の瞳を湛へし如き彼の御瞳―さては烏羽玉の黒髮さへ、ありありと眼に浮べては、涙とめ度なう頰を傳ふよ

あゝ、二年のありし面影、今何處。妾は泣かん。泣きて泣きて、

熱き涙のつきはてゝ、なほ溢れ出でん紅き血潮のそれ迄も!!!
姉よと呼ぶ聲に、ふと見れば、せめて佛をこれに偲べとや。母によう似し妹の、笑を含みて後に立てり。
梅雨は早や、名殘なう晴れて、鎭守の森の大杉よりみ空にかゝれる虹のかけ橋!
母よ!今ひと度喧白妙の裳を引きて、其の橋渡り來ますや。

（附評）今一層情を活かすれば、始めてよき文とならむ

〃〃〃〇來ぬ母

京城　山形美清子

「喧ましい」と邪見に叱つたお文樣は、吐息して又酒をグッと呑む。小さい妹は更に聲をあげて泣き出した。
私は見兼ねて「美ちやん!泣くんぢやないのよ、よ、お母さんはぢつき見えるからね!これからお迎へに行きませうと!」と泣くのを背にして門へ出た。
冷たい風、虫の音、露の色、星の光、いづれ物淋しい秋の夜である。
おぼつかなの私の子守歌にゆられて、美ちやんは何時しか寢てしまつた。あゝ、可愛想に!今宵もお母樣は歸らぬであらう!と思ふと、何んだか悲しうなつて自分も泣きたいくらゐ。お母樣も、向ふの山の麓に、私等を慕つて泣いてお出だらう、お母樣は何故來られぬ!
頂度三日目の夜、旅から歸つたお父樣と、何やら言ひ合つて居なさつたが、翌朝姿は、見えなんだ、お父樣に聞いたら「もう家のものぢやない」と云つたきり、何んとも云はなかつた、女女しい樣だが、私は悲しくて、其の上問ひ返す事が出來なんだ。そして、それから今日迄……。お父樣は酒ばかり呑んで居る。美ちやんは泣く、私はぼんやりしてしまつた。

（附評）わけはきこえたが、情がなほ足らぬ。

〃〃〃〇雨後の山村

大分　佐藤家子

ポツリ／＼思出した樣な雨の音も、いつか全くやんで、一陣の清風に梢の青葉うなづけば、ゆるぐ白露の、沈み行く夕陽の光りをうけて、虹の色にかゞやき乍ら、ハラ／＼と地におちる。今まで向ふの山も峯も、丁度綿をかぶせた樣につゝんで居た白くもが、次第／＼にうすれ／＼て、みどりの色鮮やにぬけがらをなした樣な山の頂を、わづかにかくして、フワリ／＼東の方にとんでゐる、實に清々しい雨後の夕べである。
一本松ヒョロリと立てる向ひの岡の小道をこちらへ、ひなうたの節面白く、浮立つ樣な長い聲を張り上げて、大きなる(ぶち牛)の體は見えぬ程なよやかな草を負せ、手つなは角にまきつけて、追ひかけ乍ら急ぎくるのは、村はづれの與作が一人の愛子新次で……白い鉢卷のりりしさにも、すぐにそれと知らるるのである。
又、下の谷川では、向ふのわら屋からもこちらのわらやからも、鍋や桶をさげて來て、流をへだてゝ語り交はし乍ら、しきりに米をとぐやら菜を洗ふやらしてゐる。丁度岸邊のあやめも今八分の花盛り、清いすがたをさかしまにるりの色すむ水底にうつしてゐる、川下の大きなぶなの木の下に、最前から夢中になつてつりをしてゐるのは、村で川獺の名人と名をとつてゐる水車小屋の吾作であろ——。やがて、その影も、次第にたるる夜のまくにつつまれて、いつしか一ツ二ツ三ツまし五ツまし、わらやをもるる燈火の光り。折から、川上では何におどろいたか、けたたましい

くひなの聲、四邊のせきばくを破つてしきりにコツ〳〵叩いてゐる。ああ實に平和なる山村の夕べである、

（雨評）前段の作は一寸雨後の涼しさが見ゆるが、後段の筆が單に説明したるまでのやうにて面白くない。

〽〇戰つて　　青森　川合りく子

色は黒々と體格いと丈夫さうな男の子が五六人、舟の上より、一二、三の掛聲と共に、海中をのぞんで、勢よくとび込た。ザブンと波泡を立てたぎり、かげは見えぬ、中々息が長い。やがて遙か沖の方に、一人現はれた、續いて皆あらはれた。すると、今度は一まいの大きな板の上に乘て、各々兩手をもつて、後へ水をかきよせながら、チシンヨイ〳〵チシンシヨイデンマコヂ、ママツマイサデンガケタ聲を揃へて、岸の方へ近付てきた。妾は其のハヤシのあまり面白いので、思はず笑つた、ふと横を見ると、又もや彼方より一つの板舟が、矢の如くに漕ぎよせて來た、それには、三人の子が乘て居た、此方は其れと見るより早く、ヤー敵がきた〳〵と狼狽して、一生懸命に水彈をとばした。敵はどびくる潮けむりをものともせず、優々としていよいよ此方に近付いた。すると、一人は聲高く、ヤーイ臆病の弱虫め逃げるなツ、我等は日本男子だ逃しておくものか、と貝殻で波を立たせ、敵舟をヒツクリかへすとに全力を盡した。中々敵もまけない、突然二人は海中にとび込で、敵舟に泳ぎ付た。行きなり舟に手をかけてヒツクリ反した敵は皆海中に落されて、散り〳〵に岸に泳ぎ着た。其の間に、彼方の三人は「我軍連戰連勝の〻中にも名高き海戰は！――勇ましく凱歌を擧げて、うれしさうに引きあげた、

（雨評）個文の結び方が、いつも「……た」では面白くない。

〽〇回章　　能登　栗倉すみれ

心地よき夕立にも候ひしかな。我が小庭のけしきさへ又なく面白う候ふものを、ましてや君樣達の御庭庭、さこそと想像いたして候ふ。さても親愛なる君樣達よ!!!、心に懸けし學期試驗も、首尾よう濟みて〻樂しき休暇はまのあたりに微笑みをり候 此頃只今を、何をかし玉ひ何をか考へ居給ふや！我れ等は密かに悶へ居り候。そは他なし、五七三十五日間の暑中休暇を如何にして過さむとはいつも、休暇前よりの大問題にて候ひしよ。過にし休暇も、過にし休暇も、たゞ何心なく同じき日課を繰りかへすのみにて候ひき。思へば、思へば、餘りに興なう候。さあれば、又しても毎年の例をとるも心許なく候。優美にして趣味ある高尚なる、而して有益なる事業！事業とては餘りになかしうもきこえ侍れども、兎もあれ何にまれ、休暇後に於て休暇中の日課を追想申候とも悔だに之なくば、それにて心足り候ふ。さはれ、我れ如き才なき者の獨りにては迚も覺束なく、今尚好ましき案も浮び申さず、果ては此の小さき回章こそは生れ出でしにて候ぞかし。やよ、賢こき君樣達よ!!!希くば共に〳〵心を一つにして、樂しく愉快に此の休暇を送りては如何に候か。近頃なめげなる申し振りには侍れども、御異存もこれなく候はゞ、明日なりとも我が茅屋を叩き玉はり度く左候らへば、此せまき書齋にて、かたみに小さき智惠袋を搾り合ひて事定め申さむ心組みにて候ものを。拙き筆のまゝならず思ふ心の萬が一だも筆しがたく、察し給ひてよ。

あなかしこ、

文月十あまる七日夕　　夏野すみれ

高森榮子樣
森尾靜江子樣
光井安子樣
仲清野子樣
（家並順）
の君方へ

○静けし　　岩代　江口ろく子

眞白に咲きみだれたる卯の花に、月はなくて、星の光のみ空にきらめく夜の暗に、獨り庭上に下り立ちて、物思ひに耽ければ、何所の小田に鳴く蛙の聲ならん、かすかにゆるやかに、からころと玉を轉ばすが如き、哀れにもいみじきその音色は、げにや天にもかよひ地にもとほるらん。聞くとしもなくおのづと耳を傾くれば心はしばし此世をはなれて無念無想の界にさまよふ、静けし。

綿の花ほの白う、有明月夜かけ落ちて、秋を誘ふつめたさすがすがしさ、あしたの霧立ちこめたる彼方の人里には、曉つぐる鶏の聲長閑にきこゆ。綿畑の彼方を、帆かけのみ見えて、悠々と走り行く船、水夫が身の様も偲ばれて、またなく静けし。

むかし若武者の功立てゝと呼ぶいさをの杜、緑深くて、行く人の日傘のみ白き、またなく静けきもの丶限りなれ」

○朝顔見に友を招く　　大阪　とく子

日毎御目にかゝりてだに飽かぬを、數日前よりは一向御顔を見せ給はぬは、いかにせられしや、わらはも家に用事のありて出でられねば、ひたすらに來たまふを待てど、たゞ空だのめなるに御あたりのみ忍ばれてなむ。今頃は母君の御そばにて、御とくいの裁ち縫ひに餘念もなからんか。あるは、しのぶをつりし、かの涼しの御えんにて、妹御を相手に綴物をせらるゝか、などて訪れ給はぬやと、一人かこたれつ、昨夜も君を招きて、名月の曲なりと合奏せばやと思ひたれど、片破月のくもり勝なれば、興も少からんと思ひ切りつゝさていかにせんとためらふ時しもよき序ども出で來ぬ。今朝いつになく早く起き出づれば、廣からぬ庭ながら、朝顔の花新らしきが咲きそろひぬ。あるは、緑ふかき葉かげに紫紺の花麗しく夏菊のかたへに白く匂へる氣高さ。君が御庭の如くすが〳〵しがられど、紫、紅色とり〴〵に破れ垣に添へるも、又一しほ愛らしと思ふ者から、君が御歌袋の料ともなりなば、花もさこそ本意ならめとて、早朝失禮とは存じながら走り書きもてそゝのかしまゐらせぬ、殊にこれは祖父が好みて培養せしものなれば、見そなはせなば、花のみかは、本人の悦一方ならじとてなん、是非御來車あらせたまへや

○花あやめ　　河内　竹内敬子

子規の一聲だも、いまだ聞かぬに、早くもかきくらし降る五月雨のわびしさを、慰め顔に匂ひ出でたる花菖蒲よ、ゆかりの笑顔美しきが、雨にぬれたる姿いとゆかしう。いでや、花子の君へ贈らむと、ぬるゝも厭はできり取りぬ、ふと後の方にて、嬢さま其花吾に賜はれかしと、愛らしき聲の聞えぬ。あなやと怪しう見返れば、破れし傘重げに肩にしたる十ばかりなる少女の、悄然として佇みたり。何處の子ならんとのわが問ひに答へはせで、愛らしの眼は吾手に持てる花の上去らず打瞻りつ、つくろはぬ姿の、いたくやつれて哀げなれど、眉宇のあたり賤しきかげもなく、いとほしき少女のさまなり。此の花ほしきやと言へば、愛らしき顔に微笑み見せて、打點頭きぬ風流なる少女よ、與へむも苦しからねどそも花を得て何にせんの心かと、顔さしのぞけば、哀れ風かと見えし眼、とみにくもりて、雨の栞とばかり、涙はら〳〵とこぼれぬ。何と辨へがたき身にも、そゞろ哀れの催されてひしと少女の肩を抱けば、顔に押あてしつゝれの袖のひまより、すゝりなく聲音に、(好み給ひし花なれば、母様の御墓に手向まほしう)てと、かすかにきえぬ。さは哀れなる心の少女にてありけるが、優しの心かな、ゆかしき人哉。哀れや、世のさまも知らで只ひな遊びに余念もなかるべき此稚き少女か、少き胸に、早くも知りそめし浮世の波の哀れさよ。無情なる運命の神よ、いかに御身が鐵腸には、此の辛苦も感じ給はぬか、かれて母を亡ひし姿、今更に同情の涙せきあえず、さはれ少女よ、涙を收めよ、若き御身の春未た永う

して、希望の光はとはに輝けるを、たゞ優しき汝が手にて、世が壙墓の塵を拂へ、いざや花ほしくば與へなんに、泪なかけぞ皆の袖に、色美しき薔薇の花は、少女が腕に移されて、一しほのゑまひ見ゆれば、爾は少女が袖にはら〱と。

○折にふれて　　横濱　鈴木まつ子

したしき友より、朝がほのたねめぐまれければ、おのれつれよりこのめるものから、いと〱うれしく、八十八夜前より、蒔くにはいつの日よからんと、一人思ひに日をすごしぬ。市のせまきすまゐなれば、地の餘地もなし、まして土は石まじりにて、よきものなければ、心ならずしはじめより鉢にまきそめぬ、元よりつちかひもしらぬおのれなれば、新聞雜誌などよりみ出して、水やるさま又は蒔方抔、傍にそれにならいてなしぬ。幸に日のめぐみ津ゆのめぐみにて、愛らしく生いでたるうれしさ。朝夕のびんことをまちにまちぬ。あまりに日にあたりて葉のしほれんことなどを思ひて、中〱に心せはし。あるはことしげき折り、水やることしばし忘れし爲め、萎れしを、いそぎ水やるるまを、家の人はみて、何もかやうにさわがぬとてもよきをといはるゝもおもなし。されど、おのれは中〱におもしろく、やがて美しの花さかば、家の人々にほこらんと、一人おもひぬ。まどのほとりに、青々と生出し鉢三つ四つ置て、みるも心地よしと、一人ながめをれば、道ゆく人にあな愛らしのあさがほといはれしも、またなくうれしくてなん。

伊香保入浴中日記の一節　　小野田鶴子

明日は兄様と、私と大仲好の雪江さんと、私とそれに案内人として宿の兄様と同年の春雄さんとの四人にて、榛名神社に參詣せんと約して、日のくるゝをまちて寢につきぬ。翌早朝に起き出で見れば瀞白布を引きたらん如くたなびく霞の中より、淺黄色に見ゆる赤城の峰突き出でゝえも云はれぬ好日和。皆共々に嬉び勇て身輕に支度なし、午前七時宿を出立す。面白く今日をすぐさんと、語り合ひつゝ、町はずれの猿澤橋を渡りて、山道に入りはじめぬ。其より山又山を行くうち、二ツ嶽のふもとを通りかゝる、皆一度に立止りてながめにしばし。私は思はずふりかへり見て、チヽ、物聞山が彼處に……彼の山は時鳥の名所とか、此の山は雲の名所とやら、伊香保八景の唱歌の中にありますれ……と、問ひつゝ又歩みはじめぬ。道すがら共に、空氣の新鮮を嬉び、古木生茂れるを賞愛なしつゝ行く、相馬ヶ嶽をはじめ種々なる多くの山、及び渺茫たる原野などをながめつゝ急ぐ程なく、二里余の道を行きすぎて、いとうつしくかつ涼しき榛名湖畔に出でぬ、春雄さんは彼の山が榛名富士夫が烏帽子嶽、殺柳嶽、硯嶽、掃部嶽なりと教ふ、實に名の如き形の諸山蜿蜒として湖畔を遶る、其の風景、畫筆取りうる身ならば寫生もせんに、筆取りうれば寫生もせんに、筆取りうれば詩なりとも作りたき程なれど悲しき身の詮すべもなく、ただ〱うつくしとのみげに仙境とはかゝる處をや云ふならんかと一人心に思ひ、うつとりとして眺め居たる耳元にて雪江の君は、(榛名の湖水清く、神社はいとも神さびて……と)八景の歌をうたひぬ、私はただ〱よい風景ですねと云ひながらなほかへりにこゝにて休まんといひつゝ坂を昇ると僅かにして天神嶺てふ處に至りぬ。左右二棟の休み茶屋あり。右の家にしばしいこへば、老婆は出でゝかれは何これは何よといと親切に教へられき。げに見はらしよき事、えも云はれずこゝに社の鳥居ありくゞりて行く事幾程なく神社に着く。參拜なしかしこゝをながむれば社前に常宮殿下御手栽の松樹あり、枝葉繁茂して緑の色の深くなるこそ、いと尊けれ。外に、新田義貞公奉納の異風なる鐵燈籠一基建てあり、雙龍門、三重塔、神橋、隨神門等見るべき者多く、奇巖怪石兀立として壯者の膽を挫ぐ様なり、晝尚暗き迄に、古木生茂り、境内の神怖結構の莊嚴人をして、自から神威の貴きを知らしむるなり、暫くにて引き返し湖畔亭に立寄り中食をすましつ、兄様を先に皆つゞいて舟に乗り沖へ〱とこぎ出で彼處、此處はたまた、清き水面を

讀者文藝

ながめつつ樂しく語り合ひ、一時間餘を此湖に遊びて、後歸途に就きぬ、共に今日の愉快を語らひつゝ宿につきしは午後四時十七分なりき、其の夜私は雨江さんに向ひ今日のたのしさを、拙き一句に詠しぬ。

今日も亦遊びくらしぬ君と共に
榛名湖上にふれをうかべて。

投書は

別項記載の如く、本誌發行所變更致候間、以來投書は左記の所願度候

東京四谷區霞ケ岡

女鑑發行所



文學士鹽井雨江先生選

天

墓　　埼玉　高橋とよ子

雪をあざむく手弱女の、
其やわ肌もこゝにあり、
山を動かす大丈夫の、
太き腕もこゝにあり、
卒塔婆の文字も鮮かに、
さゝげし花に露ぞおく、
あはれさびしきこの底に、
いかなる夢か結ぶらん。
昨日も若き人ひとり、
屍の數を増したるに、
今日又してもうら若き、
花の乙女を埋めたり、
定めなき世かこれがそも、
手向の鐘の寺々に、
絶えぬを見れば死の神は、
明日に誰が身をさそふらん

（雨評）調簡にして強く、寸分のすきなく詠みつけたる手腕、誠に敬すべし。

地

宵雨　　橋　たか子

——若き尼によする——

湖添ふ森の尼庵の、
木槿花咲く垣近う、
淋しき窓に囁きて、
追想多き夜の香に、
精舍貴き曼陀羅の、
爪繰る罪の珠數の手の、
佛かしこき引接も、
吾にもあらで映し見る、
夜毎の悶え消えやらぬ、
なう宵雨よ、宵毎を、
枯れたる袖に隱れても、
あまり辛くも音訪れて、
人は想の胸の弦の、
涙外向し法燈に、
若きに許す咎ならで、
み灯細き森の庵に、
音も詑しう更け行けば、
褪せしを投し阿伽棚に、

青柿落つる裏庭や、
夜を誘へる宵雨は、
冷う闇を捧げたれ、
胸の想の亂れては、
文字紅に炎え出で、
法衣の袖に顫ひしが、
寂びたる庫裡の白壁に、
沈默に瘦せし面影に、
こは執着の切なさよ、
吾から捨て、墨染の、
若う瘦せ行く新尼に、
惱みな胸に誘ひそ。
戀の搖ぎは知るべきも、
咎められたる鉦の手や、
佛は罪と見そなはす、
夢誘ひ行く木魚の、
尼が手向の夏菊の、
影も沈みぬ宵の雨。

（雨評）一雫〳〵に忍ばるゝ宵の雨に候かな

人

海邊にて

金澤 佐藤しげる子

月にわきくる八百汐の、
葦わけ小舟棹さして、
身は甲斐もなき難波江の、
やさしき君の御言をば、
笑みて別れしみなと江の、
かへらぬ浪は何方に、
眞砂にかきし秘うたと、
響に消ゆる櫓の音を、
みだれてかゝる黑髮の、
波のしぶきのかゝりては、
昔かはらじ難波江の、
君を偲びてやつれたる、

靜かによするちぬの海、
現ともなきもの思ひ、
浦わ小女と生れきて、
嬉しここそは思ひしが、
夕の夢はさめざるに、
わが思ふ人を送りけむ
妬みて洗ふ白波の、
戀に待夜やつらかりし。
追憶しげき海の面、
浦なれ衣くちやせむ、
月の光のくまなきに、
少女姿のはづかしき。

（雨評）やさしくあはれなる韻致誠に掬すべきものあり

秀逸

◎清き少女に

下野 井上尙子

小さき肩蔽ふ綠なす、
淸き姿をいつまでも、

髮に相應ふ白うばら、
忘れずありて柔胸に、

燃ゆる血めぐる年ごろを、
黒かみ亂すこと勿れ。
天なる神がべにときて、
膚やわらかきふくやかの、
夢にも似たるとし頃を、
うつゝの憂さに泣くなかれ。
汚れをとめぬ清き眼は、
ま球の如き尊さよ。
清き瞳のそのうちに、
悲しき涙たゝふるな。
春は花の世、人の代の、
ひと代のうちに、秋の如き、
胸に波たち狂ふ日も、
汝永久にのどかなれ。

冷きこひにとらはれて、
さして給びにしうす桃の
頬の血色よあせざれな、
はかなき戀にとらはれて
愛のしづくにうるほひて
小女も人の子、されど
こひも宿るな、魔りすな
春は少女よ、汝がこゝろぞ。
さびしさだめにあふとても
ねたみを知るな今を思ひ

（雨評）清き少女への注文、げに詩人すべての情ならむ句もよく整ひて出來たり。

◎◎城の跡

飛驒　南　みね子

しばし榮華の夢みつゝ、
浮世をこゝに送りたる
二十萬石、今はたゞ、
夏草生ひて蟬ぞ泣く。
昔しの影を偲ばする
お堀半は埋もれて、
蓮の花や哀れにも、
彼方此方に咲き匂ふ。
天そゝる老松年毎に、
綠りの色を增すとても
つみかふ人も絶えはてゝ、
訪づる者は鳥の聲。
一基の墓や建つとても、
苔重たげにかさなりて
下に眠れる武夫の、其名も
さだかに見えずして。
あゝ果敢なさは人の身よ、
昔し殿樣と尊びし
一國の主、今はたゞ、
この城路の土と化し、
花を手向くる人もなく、
そが英魂は何處ぞと、
昔しを偲ぶそか時に、
流星一つ飛びにけり。

（雨評）感すなほにきこえたり。

◎◎蟬の塚

岩代　江口ろく子

蟬の玉笛盜まんと、
たくなみたりしさゝがにの
くもの罠に捕はれて、
餌食となりし身ぞ哀れ、
木影に山に溪川に、
歌ひて死にし汝なれば、
神のめぐみも厚からむ、
靜けき國の永久に、
愛しの魂よ、秋風の
寒さに覺むる事勿れ。
小さき骸しづやかに、
この詩の中に眠れかし、
小花香つよき木犀の、
こぼるゝ陰に石たてゝ、
『蟬子の墓』と墨薄う、
涙そゝぎてしるしゝか
とはに眠れよ、春秋の
手向の花は捧げてん、

ほそ女文字うすらぎて、よむにえたへずなりぬとも

（雨評） やさしき情はきこえたり。

◎幻影　　下總　小澤蝶子

吾と心のまゝはしに、ひねもす森をさまよひぬ
狭丹づる花に君が頬を、みどり滴たる老木の、
苔に御髪をしのびつゝ。
と見る梢に影ありと、おもふ間からずわたし
風のさやぎにかき消えて、おちしは櫛か藪椿、
それはまよひの夢ながら——。
白百合の花うながふし、岩垣きよき泉川、
わたる身をば伸しゝとき、花にひそみて微笑むは、
君にはあらじか頬のにほひ。
もとよりわれのこむるは、此世ならざる君なるを
ふとしも見たるまぼろしや、月の臺をおもひそめ、
むかし歌ひし水姫か。
君よと呼べばいとほのに、唇の花ゆらめくよ。
うつら心に手をさせば　水は忽ち輪波だち
小百合も君も消えうせぬ。

（雨評） 工夫せられたる幻影と見たり。

◎わかれ　　長野　千村ちゑ子

ほのかに匂ふ夕月の　影に背きて君も泣く、
若葉に風はさゝめけど、別れと云へば悲しくて。
すまじき戀の歡樂に、ああ醉ひしかな二歳を。
かくて別かると知りもせば、戀ひざらましを果敢なさよ
若葉かくれのほとゝぎす、血に啼く聲の胸さすよ。
手に手をとりて一語なく、たゞ泪して相泣くや、
ああ永久に逢ふまじき、運命悲しき二人哉、
死もせば乾く泪かも。さはれ死に得ぬ世ならずや
相泣きて別れゆく、二人が影の隔りぬ、
又あひ呼びぬ走りより、手に手をひしと熱き泪よ、
雲心あらば、月かくせ、心ゆく迄抱きしめて、
死すにも勝る悲しみの　永久の別れを泣かん二人ぞ

（雨評） 今少しく詞を優美にせられなば、はじめてよき韻ならむ。

ヽヽヽ○藤六尺　　大阪　木村春江子

大椿
上枝の花のこぼれては、音ぞ寂しき薄暮にして
ひとりうら月に佇めば、日の影よわう目こそ射れ
行く春をいためる心——、櫛とりてかゝぐれば、
を指に纒ふ黒髪の　ぬくることすらわすれては
うち守らるゝたそがれや。
風にゆらるゝ紫の、藤はわれかも六尺の

長き袂はかへされど、
小さき胸に戀秘めて、
淋しくも
老けて行くなる宿命の、
身よいつ迄の少女なるらむ。

（同評）末段の一句、感深し。

〇夕暮野に立ちて

河内　竹内敏子

暗鬪やみて、雨晴れぬ、
見よ、夕空に霓匂ふ。
たのしからずや、
人の世は。
自然のたくみ神のわざ
うつすにかたき彩色の、
そこに神秘の影あらむ。
さはれ、ひそめる其影を
いたくな追ひそ、詩人よ。
夕へ空の色あらば、
靜愁の影あらむ。
人ははかなき虹の輪の
しばしを神のたはふれと
悟られぱこそ、なかく／＼に
香世のおやはいつくしき。
悟らであれな、悠久に。
たゞ仰ぎ見よ、空のはて
高く妙なる霓の色。

（同評）發展に今一入の苦心を要す。

〇雲

茨城　今泉磯千鳥子

白鳥のむく羽のごとく、
はたはた谷間路に咲く、
白百合の花瓣の如も、
白雲は出でにたりけり、
高樓の空に聳ゆる、
碧宵の都の空ゆ。
「あゝ雲よ懐しの雲！
願くば故郷にして、
田草取るわが母が上に
影せよ」とわれは祈りぬ。
野邊に臥す巨牛の如く
はたはたまた芒生ふなる
廢墟の古城のごとも、
黑雲は出でにたりけり、
「渾沌」と霞足亂る
暗澹の故郷の空ゆ。
「あゝ雲よ怖ろしの雲！
願くは荒ぶるなやめよ、
わが家はむごき荒家
歎へよ」とわれは祈りぬ。

（同評）一寸思ひつきはあれど、なほ苦心足らず。

〇

東京　平塚白百合子

今しきえなんともし火の
一きは光りますごとし、
夕ばへあかうくれてゆく、
世はさながらの炎のみや
かへる小舟もゆくかこも、
唯眞紅にはそめなして、
餘光はなほも紫に、
北のみそらにそゝりたつ
つく波の嶺なつかんとす。
峰の男神はたちまちに
銀弓一つひきしぼり、
見るよと思ふ程もなく、
みそらの色はさめはてゝ、
なごりは雲の一ひらに、
新月細うかゝりけり。

〇「鄙の夕涼」

横須賀　渡邊ひさ子

青葉隠れに、月様御星、
共にニコ／＼笑つて御座る。
馬子も嫁女も若衆さんも、
他へ漏らさぬ平和な唄ひ
聞くも嬉しい濁音高く
背戸の小川のやさしい水に、
吹いて行くぞへ凉しい風が、
紅の筒袖と絲りの袖を。

（同評）末段の三行、きくべし。

〇小楠公

河内　岡田こう子

一

いまし歸れよ忘るなよ。
その身は汝がものならず
遺訓はしろく身にしみつ。
金剛山の朝日かげ
淀川淸き夕まぐれ。
君安からむ時待ちぬ。

二

花や散りける葉月なか。
君父のみことかしこみて

吉野を出でし路すがら、　如意輪堂に盟ひてし
かへらじの歌みどり房。　をさめ行くこそ頼母しき、

三

世は万乘の光なく、　嵐はむせぶ吸ばら。
奮闘苦戰勉めしも。　衆寡はつひに敵し得ず。
身に立つ毒矢數しれず。　果さぬ無念ぞかなしけれ。

四

年はうつろひ風去るも。　見よや千古に名は朽ちじ
飯盛山の碑は高く。　仰ぐ御空にかがやきて
名もかぐはしき楠の。　忠義のほどもよまるなり

○聖い戀　岐阜　松岡君子

風の輕るさうな白雲の、　流れ行くぞへ、東へ、
雲の行方を眺めつゝ、　名殘りの露ぞ繁くして、
四つの袖をば分ちかれ、　少女子二人並びたつ。
「異の旅路をあんずれば、　都へ着いたその時は、
必ず手紙下されな。」　「遠くへだてゝ居ればとて
互に送る玉章に　心の眞語らはん」
「なれと五年のこの別れ、　私し辛いは、あゝ辛らや。
「…………」　泣きぬ名殘りや聖の戀、
互に袖をしぼるとき、　血をはく如き時鳥、
一聲鳴きて過ぎゆきぬ。

○あるわざ　新潟　星野きよ子

ねざめの顔をひいやりと、　うつや朝もやふかくして、
天地謙々ゆめのごと、　忘れてたちぬはし近う。
庭の木立のこゝかしこ、　くもの巣しろうあらはれて、
今をさかりの八重ざくら、　にくものもなき眺めかな。
小垣のそとに自轉車の、　鈴音たかく警官は、
東にうせぬもやのなか、　夏帽のみぞ目にいりて

二七ばかりの茶つみ女は、　かへりみしつゝすれちがふ、
重き病の母ひとり、　父はあの世と、いたはしや。
折しもちかき學びやに、　おこるもいさまし起床の喈。
もやもきゆると思ばれて、　たちまちさめぬ夢ごゝろ、

○山　居　大分　佐藤家子

青葉若葉にかこまれて、　後は廣き桑畑、
前を流るゝ谷水の　清きを庭に引き入れし
二町に余る廣池に、　いく十尾の鯉をどる。
岸邊に柳藤の花、　みどりの色も鮮やかに、
もみの古木の數十株、　枝を交へてそびえ立つ。
木の下影を住來して、　餌をついばむ鶏のむれ、
牧場にひびく牛の聲、　駒のいななき勇ましく、
ああ平和なる住居かな、

○この夕　美濃　多田さとる子

笛吹き歸る里の子の、　蠶屋の軒に蚊やり火の、
ほのぼの白くたちそむる、　さまなつかしきこの夕、
空にあこがれ君とわれ、　村里とほくはなれつゝ、
うつゝうつゝに夢のごと、　共に來たりしこの夕。
月の響のそれならで、　白銀映し夕陽に、
啓示やくは何、露のいろ、　たのしからずや、この夕。
魂はおひぬ空の■、　浮世のつれとはおもはれず、
浮身忘れてしばらくは、　たのしく語りぬ、この夕。
浮世を外に湧き出づる、　湧くま清水のそれのごと
千代に絶せぬおもひして、　共に語りきこの夕、
夕風さそふ岩蔭に、　歌へうたはむもろともに、
そこに自然は美をすべて。　うつくしからずやこの夕。

○夏の夜　美濃　松田君子

浮世に遠き天さかる、　邸の小里の夏の夜半

朧の月のかげふけて、
花目にもしろきかの岡の、
きしり靜けき水車、
流るゝ前に立ち並ぶ、
窓よりもるる灯火の、
若き妹背の涼みうた、
柳木蔭に佇みて、
かなたにひゞく笛の音、
仰げは空は和氣滿て、
よろこびほかに溢るなり、
たのしからずや、人の子の、

きよし、み空のうす碧。
青葉下ゆく谷川に、
そこに美妙の響あり。
鳥羽綸に似たる家二軒、
影に涼しき此の夜半、
和合の神や宿るらん、
水のゆくへを見て居れば。
里の童か天使か、
愛の光の月かげに。
うれしみよそに光るなり、
あゝ前途の希望かな。

六月の大和路

陸前 山形こう子

清き希望の日光浴び、
綠と綠きらめきて、
鷄が啼く丘の上に、
太古の傳說聞かされて、
千古の詩をうたひつぎ、
旅人一人仰ぎ見る、
昔の愛も忍ばれて、
家の遠きを忘らるゝ。

風も薫るよ夏の朝、
青葉領する大和路や、
道たづぬれば翁媼に、
興は泉と湧きもくれば
三輪を出でたるうら若き、
畝火、耳無、香具山や、
綠したゝる平和に、

●本號迄の誌上に懸賞當選の御方にて賞金御請求洩れの分は此際至急御申越被下度候

短歌

貴族院議員 御歌所參候 子爵入江爲守先生選

天

雨晴れてなほ立ちまよふ白雲の
絶間に靑し峰の松原

陸前 山形すみ子

地

夕立の露もかはらぬ樹の間より
涼しく洩るゝ宵月の影

相模 藤原下枝子

人

折にふれて

下總 秋月廣江子

折にまた見かへる人のありてこそ
野の草花も咲きいてぬめれ

秀逸

梅雨晴

靜岡 河合象子

さみたれの雲うち絶えし大そらに
はやくもわたすにしのかけはし　後志　山本しづか子

○

うすもの丶袖かろけれどあさゆふは
もとのあはせぞ戀しかりける　常陸　岡田萬子

早苗

五月雨の晴間待ちえて菅笠の
數そふ小田に早苗取るなり　東京　高橋珍子

○

いそ松の木の間に月のかけみえて
なみのよる／＼すゞしかりけり　岩代　岸野せい子

○

のかれすむ我かくれ家も夏ふかみ
いやかしましき蟬のもろこゑ　神戸　松野みどり子

夜半水鷄

はかられてこゝろよからぬ浮世にも
うれしかりけり夜半の水鷄は　東京　小栗捨子

○

夕顔の花もゆかしき賤が家に
月待ち出づるたそがれの空

佳調

○

湧き出る庭の清水にうつりけり松の樹の間の夏の夜の月　横須賀　柏原みな子

○

さみたれのたやむけしきも見えぬ哉かやの軒端のくちはつるまで　東京　山代糸子

夏草

うちやりしまりのゆくへもわかぬまで　しけりにけりな庭の夏草　攝津　磯村さだ子

扇

木の葉すら動かぬ夏の日さかりは扇の風そいのちなりける　東京　白井岑子

○

若竹の生ひたつ頃は世の人のふし心地よき時にぞありける　神戸　足立あさ子

○磯夏月

しらなみのよせてはかへすあら磯のまさご路涼し夏の夜の月　東京　矢澤民子

故郷

花錦とりも着ずして故郷にかへりし身こそ面ふさなれ　東京　倉重千惠子

○

露の間の命と知らで咲き誇る　庭の籬の朝顔の花　東京　富永久代子

甲

田家螢

つみ捨てし田川のきしの桑の葉にひとつすがりてゆくほたる哉　埼玉　横田やな子

○

杉むらの奥のみやしろなく蟬のこゑより外の夏なかりけり　岩代　岸野常子

水邊蛙

ま菅生る門の小川の水口を我ものかほになく蛙かな　岩代　岸野菊子

夏月

たとりゆくつゝみの柳露ちりてもろ影すずしみぢか夜の月　岩代　岸野とよ子

早苗

植ゑなへし門田の早苗ながめつゝまとゐやすらふ雨の夕くれ　兵庫　梶原京子

夏月　横須賀　高橋つれ子
若竹の生ひしげりたる小庭をは洩れて涼しき夏の夜の月

月前時鳥　東京　小林春子
三日月のほのかに見ゆる大空に聲かすかにも鳴くほとゝぎす

柿の花　新潟　星野きよ子
幾度かみゝそばだてつわすれてはあめかと思ふ柿のおち花

○　横須賀　渡邊八佐子
吹く風の松より外の聲もなし寄せては返す須磨の浦浪

○　美濃　松田晶子
闇にして涼しくも聞く里川の草の根を行く水の音哉

○　相模　中島類子
てるや日の光にしぼむ朝顔のよすがともなる消えやらぬ露

○　大阪　木村春江子
園かなる花や亂れむ紫陽花の心もとなき五月雨の空

田舎垣　東京　白井はる子
竹垣のすきま〳〵にゆたかなる門田の稲ほ見えわたるかな

○　東京　田代鎭子
もしほやく浦の汐屋の煙さへ立つともわかすさみだれのふる

○　東京　平塚いと子
あやうけのかり橋見えてその秋のなごりも見えぬ多摩の渡し場

夏寺　横濱　鈴木まつ子
花はちす風にかをりて山寺はなつも涼しきところなりけり

○　飛騨　中西芳子
海原や波も靜かに月照りて釣する舟の影の涼しき

○　神戸　足立ゑい子
むら雨の降るよりも猶涼しきは草葉における夏の夜の露

○　日向　長倉みつを子
幼な子の籠さげつゝも道すがらやさしき聲にほたるよぶなり

○　岐阜　中村はな子
國境をこゆる峠の朝の道青葉がくれに山からのなく

藤　河内　竹内敬子
朝風に藤の花ふさゆらくなりこき紫の露やちるらむ

露　攝津　中根丈子
人の身もかくやとはかり淺ましくおもほへてみる朝顔の露

○　攝津　中根・さくら子
なつかしき君のみ聲にめさむればたゞともしびのかげぞ殘れる

○　神奈川　松尾きみ子
ちりふかき世をはいとひて山の奥に清くもさける白百合の花

乙

○　茨城　今泉嶺千鳥子
相對す瞳とひとみ君とわが恥しと言ひうれしとぞ云ふ

新庭を見て　東京　原三幸子
いろ〳〵のひれに波立池のおもにうかふさゝふれきしにたゞよふ

陽紫の花にそへて友の許に　神奈川　飯田榮子
いく度か色かはるてふ花に似し君がこゝろのうらめしきかな

○　越後　岩本芳子
あゆのとふいさゝ小川にかけすみて涼しさまさる夏の夜の月

麥秋晴雨　埼玉　横田秋子
仇人にひとしき麥の秋の雨晴れて曇りて晴れてくもりて

夢讀古人　埼玉　横田稻子
手枕の夢のうちなる物がたりむかしの人は現なりけり

夏山　磐城　木幡きよ子
故郷の空より戀し夕立の晴れにし後に見ゆる夏山

磯めぐりして　美濃　日島眞紗子
磯めぐり雨ふりつゞきかく日記のことすくなくもくれてけるかな

垣夕顔　美濃　傍島みゆき子
蚊やり火のけふりなびける垣ねみち三ヶ月うすゝ夕顔の花

○　秋田　細矢にゐ子
いかたしの竿のしつくに月さしてほたるのかげの數にいりけり

水邊卯花

むすひなは凉しからましこの花は雲のかげくむやまのゐの水　豊後　松田榮子

折にふれて

紅き水下に流れて青き岸に水牛遊ふ長江の夏　清國　森　しげ子

○

よろこびの聲ぞ諸家にみつるらんさみたれしきる今日の今しも　兵庫　古東すみ子

○

昨日よりけふぞとすゝむ世の中にひとりなくるゝ我身なる哉　兵庫　古東靜子

○

なき人の靈とや見ゆるとぶ螢やさしき君のかげぞ戀しき　下關　鈴の舍文子

○

村長の家はむかしの城の跡めぐれる池に蓮白うさく　能登　栗倉すみれ子

旅時鳥

宿りのみ宵々ことにかはれども同じ血に啼く聲をきくかな　神戸　今西操子

○

うつら〳〵眠り催す馬の背に松原十里たゞせみの鳴く　美濃　松田重子

○

たをさらばの聲さへ出でず逗子の濱血を吐く思に時鳥なく　美濃　松田春子

○

忍ぶ身の編笠はれて願れば月のはづれを時鳥啼く　美濃　松田直子

○

心まで凉しくなりぬ水打ちて植木並ぶる夏の夕ぐれ　美濃　松田君子

○

納凉の人等凉しく笛ふきて月にすきゆく磯の松原　美濃　松田文子

○

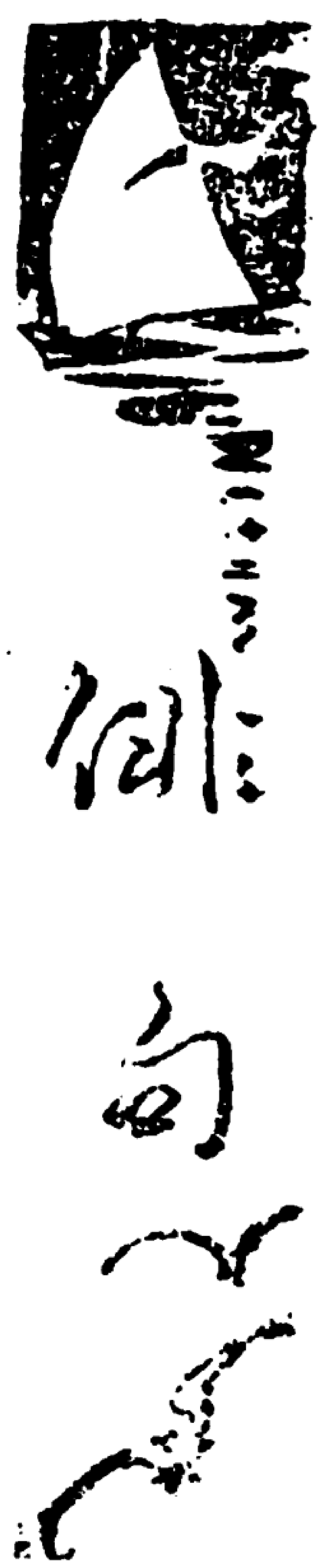
納凉の即席に出でし和歌題の想草ゆらぎ風薫るみゆ　美濃　松田信子

○

遠富士や草なしとれの春の人茶の芽つむ歌ひくう聞こゆる　東京　平塚白百合子

兄弟

夏休み都の兄の歸りきぬつとは何ぞとまつ聞うれしも　名古屋　山根しげ子



内藤鳴雪先生選

天

明月や向ふの山に鳴くからす　群馬　小野里鶴子

地

勝馬の月に嘶く戻り哉　東京　小檜山いく子

人

夕磯の女浪男浪に秋立ちぬ　相撲　小野ゆき子

江の島をめぐる船あり夏の月　相模　渡邊君代子

つき放つ湖上の鐘や風薫る

水番の小屋荒れはてゝ秋の風　相模　小野ゆき子

雲の峰月の世界に聳えたり　横須賀　三浦やす子

夕立や五百羅漢の眼の光り

松多き鎌倉山や蟬時雨　東京　小檜山いく子

山猫に温泉の町ありて青嵐　札幌　佐藤千代子

湖や舟に帆かける青嵐

張板にうすき西日や雲の峰　長野　千村ちゑ子

燭し見る雨の若葉や時鳥　長崎　秋山虎子

釣の人小舟さす人五月晴　岐阜　松岡君子

青嵐利根川下るボートかな　飛騨　中西よし子

時鳥鳴くやもれ出づる月太し
行暮れて竹に宿借る夏の月
芍薬に夕ばえすなり五月晴
朝顔や隔ての墻のへだてなく
絞る程柳は濡て夏の雨
豆盥を遣はせて見たり水團扇
五月雨に池の高樓おぼろなり
竹吹て東男の涼みけり
南洲の像あり岡に風薫る
新らしき下駄のかろさよ夕涼み
五月雨の暮るゝともなく暮れにけり
流れても來さうな島や夏の月
御影石切り出す山の若葉かな
鮎の舞ひ水は邪なう流れけり
世を遁る若葉の垣や隣琵琶
暑き日やまぬがれられぬ用の涌く
石炭を掘り出す山の若葉哉
沸ぎるたゝらの音や雲の峰
涼風や杉坂くだる巫女の袖
松風や清水に跳る眞桑瓜
三日月のほしき夕や閑こどり
三文の渡しゝ涼しき家路かな
編笠や錦絵を賣る美少年
夏の雨軒に燃なうつしけり
短夜や高野の房に語りけり
撫子に人なつかしき垣根かな
面白き五百羅漢や夏の雨
衣更へて錦帯橋を渡りけり
朝顔のもつれ〳〵て花もなし

岐阜　中村はな子
同　中村暾子
飛騨　雨宮みれ子
南京　飯田つる子
神戸　足立あさ子
神戸　足立ゑい子
大阪　木村春江子
相模　柚木とよ子
陸前　山形幸子
神戸　竹野節子
横須賀　伊坂みれ子
美濃　金田かく子
同　鷲見たき子
同　瀬川もと子
横須賀　齋藤松代子
兵庫　梶原京子
横須賀　柏原みな子
東京　倉重千恵子
越後　岩本芳子
相模　藤原下枝子
岩代　岸野常子
同　岸野菊子
横須賀　渡邊比佐子
東京　富永久代子

定價
一冊　前金　貳拾錢
三冊　前金　五拾五錢
六册　前金　壹圓拾錢
拾貳冊　前金　貳圓拾錢
全國通郵無料

廣告料
五號活字二行廿字詰　四半頁十六　半頁廿二　一頁六十
特等　六圓五十錢　二十圓　三十五圓
一等　六圓　十一圓　二十圓
二等　五圓　九圓　十六圓
並等　四圓　七圓　十二圓

御注文規定
一切前金の事(但郵券代用一割増の事)●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十一年七月廿八日印刷
明治四十一年八月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　株式會社　國光社
東京市京橋區築地二丁目二十番地
右代表者　橋本忠次郎
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷人　岡守功
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　株式會社　國光社
振替貯金口座番號 壹壹七八番
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋　特八八番)

稟　告

本社發行の女鑑是迄永々御愛讀を賜はり難有奉深謝候處今般都合に依り右發行權を中川愛氷氏に讓渡し候間此段御了知可被下候就ては本號（八月一日發行分）迄の代金は本社へ御拂込被下來る九月一日發行以後の分は新發行所宛御拂込被下候樣奉願候又九月以後分に對し前金御預り致居候分は其の前金の相切れ候迄は從前の通り月々本社より發送可申上候間左樣御承引可被下候猶本誌に對し今後不相變御眷顧を賜はり候樣併せて奉願候

明治四十一年八月一日

株式會社國光社

發行所變更

私こと是まで、筆の人として、本誌編輯に從事いたし候處、今回その發行をも引受け、同時に第九月號より、大に誌面を改良いたす積りに御座候、猶私が本誌に對する所感のごときも、次號に於て御披露申すべく候、大方の讀者諸君、何卒倍舊の御引立を願上候

中川愛氷

女鑑に對する通信は、以後『東京四谷區霞ヶ岡女鑑發行所』宛に願度候

土方伯爵題辭◎毛利公爵御母堂。三井男爵夫人。遠山女史題詠
青木子爵夫人。松村理學博士。濱視學。棚橋女史。山脇女史序文

寺西綠子著

九重編造花法

全五冊

菊判クロース金字入
装釘優美
毎巻二尺に三尺の石版極彩色大附圖あり
松の巻附豫修法○梅の巻○櫻の巻既刊○以下續刊

定價○松の巻附豫修法金九拾錢○梅の巻八拾錢○櫻の巻金八拾錢

九重編造花法は著者の新案に係り從來の編物を應用して造花となすの技術にして近時女子の手藝界に清新の一生面を開ける優美多趣味の造花法なり此の書は著者親しく生徒に教授するに方りて最も教材に適したる內外產の花卉百種を撰擇し之を松の巻以下五巻に分ち一々圖解を附し其一小部分より全花を組成する迄の順序方法を詳密に說示せるもの なれば手藝學校の教科書として最適當せるのみならず又家庭の獨習用として無比の良書なり且世間斯の技術を研究する人近時漸く多きに拘らず未だ斯の技の教習に資するの書なし本書は即其世間未發の新教授法を發表するものなり目今女子手藝技巧を競ふの時に方り子女ある家庭には必須缺く可からざるもの也

發賣所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

文部省體操遊戲取調委員

井口あくり　可兒　德　川瀨元九郎

高島平三郎　坪井玄道

諸先生共著

第六版　體育の理論及實際

總クロース　菊版五百餘頁

正價　金壹圓參拾錢

郵稅　拾錢

目下新式體操書の發刊せらるゝもの其數尠からずと雖ども概ね一個體操家の手に成り單に一部動作の形式方法等を示すに過ぎず其斯學大家の共著に成り學說實地全體を網羅して完全無缺なるは世間唯本書一あるのみ本書は曩に文部省體操遊戲取調委員として調查研究せられたる前記諸先生が其取調報告書に基き教育上生理上の學說及實地演習の動作方式等を詳細（新式基本姿勢は特に詳密に）解說せられたるものにして姿勢動作等には百六拾餘個の木版運動服體操教室等には石版摺着色畫を挿入し丁寧親切に說示しあれば此書を繙く人は恰も諸先生に就て親く教授を受くるが如しされば新式體操に志す人は勿論中學校高等女學校及高等尋常小學校には必一本を備へざる可らず初版再版忽ち賣盡し今や第三版發行

發行所　東京市京橋區築地二丁目　電話新橋特八八、二六九三　株式會社　國光社

大賣捌所　大阪市東區南本町　合資會社　積文社

香水の原料

オリヂナル パーヒユーム

壹瓶 壹圓廿錢

普通香水二十倍の濃さで一雫僅に一週間の匂ひを保ちます

一日一滴宛として二百八十日間

一瓶の量は凡そ二百八十滴、使へます。諸姉試みにそれ一雫を花簪の蘂に滴らし給はゞ胡蝶も來り宿る。肩の地襟に一滴たらし給へば袂は薰風に來り其身恰かも百花の園に遊ぶ心地す實業之日本社代理部取次薰襟止雨に最も適す、



實業之日本社代理部 三越呉服店 大西白牡丹等ニテ取次グ

報知社代理部 白木屋呉服店

本舖 象印遠磨 安藤井筒堂

女鑑

明治四十一年八月一日發行　毎月一回一日發行　第拾八年第八號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

